量地指南

自一
至三

前編

七十三号
ホ二

ム1
5195
1

量地指南序

夫生二兩儀一清濁既分覆者為天偃者為地其間相去無數大塊也往古聖人仰俯觀察而垂其象能使天下後世無一

越後國三島郡七山田村

門ム1
號5195
卷1

早稲田大學図書館
昭26.6.7 受
藏書

物不レ得其中ノ所ヲ以ニ振ニ起スル其ノ英靈ヲ而人ハ本ニ乎天性ニ莫キ不下レ因テ其ノ已ニ知ル之理ニ而益ノ窮メテ之ノ以テ求ノ至ニ乎其ノ極ニ者ナリ也友ニ人ノ訥ニ言携テ南ニ勢ノ源ニ昌ニ弘カ著ニ述ノ三ニ号ヲ以置ク

凡ニ上ニ余繙キ視レバ則輿ニ地規ニ矩ニ術ノ之圖ニ說名テ曰フ量ニ地指ニ南ト能ク使シトスルニ下ナラ國ニ字ヲ啟キ蒙ヲ便中同ニ志上ニ之ノ意至テ為ニ精ニ密ト盍ルニ請フ序セ之ニ雖ミ余ノ未ダ嘗テ學ニ即テ凡ニ天ニ下ノ之ノ物ニ而窮メ其ノ

理格其物之階梯而有遐棄焉乎哉占小善者率以録名一藝者無不庸況於勞者乎立霾聚螢刮垢磨光惟以此一盤面措坤軸於夷險一

平之安是与離妻督繩公輸削墨而不溷者相似也庶幾兵一善其工用二厚於故舊三欲成人之名之微遂落毫于其端如此

享保壬子冬至後二日

貝南穂重英識ス

享保十七年壬子仲冬ノ壽梓之

一 夫量地術の中書に云へる三代のいにしへ伏羲氏の一畫法度ありしより郡縣ふ後世に至り道義へ官失し。小學の法類廢して問ふ所の式術も立法たて戎蠻の地の國の人常に立國と事と事にして某國と某國と海潮の字ふ義とり星宿の術小〻玄妙と法とり地理の術ふ測とあり。此ふつふ於四術吾が古新に流布する事もとしと戎蠻地の人に傳ふ。こゝ古源と指南書の中に筆の心法の遺術ふり。

一

仙の忘憂事ゝ云あん。世人世界を不揆みぎりふ
るも深のゝ如く解ふることゝ奥と云て学ゝ者
惑ふ。学者海ゝ深ゝ底ゝ

偉ふゝ哉ゝ量地術の徳ゝ事也不日ゝ天の香ふ
るゝきを測ゝ不ゝ生ゝ地の厚ゝ高きを窮ゝ不ゝ入て
海の深ゝ高きを測ゝ知ふ。然ゝ山河原野丘陵堆壘
家宅宮殿高原廣野を量ゝ定ゝ知ふ。然ゝ日月の運行を測て
時ゝ歩ゝ上の地を指ゝ示ゝ。或ハ海ゝ内ゝ遠ゝ近ゝ図ゝ或ハ
新法の奇術を造ゝ。或ハ彼此の高低を
知ゝ小道を望ゝの如ゝ。諸色叶術ゝ不揺ふ
事所ゝ也ゝ指ゝ示ゝ示ゝのゝ八ゝ至迂ゝ

一

ゝ也ゝ。猶ゝ此ゝ術ゝ不ゝ揺ゝ事ゝ有ゝ。誠ゝ
量ゝ法ゝ術ゝ也ゝ。大旨ゝ教ゝ
也ゝ。学ゝ地ゝ術ゝ有ゝ。ゝ云量地術。ゝ云量艮術。ゝ云渾儀術。
五ゝ指ゝ。ゝ云量縄術。ゝ云量算術。四ゝ云量積術。五ゝ云機械術。
優劣ふゝ。然ゝ者選ゝ学ゝ。ゝ云測量針術ハ
中義ゝ学ゝ。ゝ云測量弾術。ゝ云測量艮術。ゝ云渾儀術
術ハ。ゝ云測量縄術。ゝ云測量算術。ゝ云測量積術。ゝ云機械術。
術ハ。ゝ云測量縄術。ゝ云測量算術。ゝ云測量積術。ゝ云機械術ハ。ゝ云迂
水宮の不高ゝ。光の不ゝ。若ゝ不ゝ奥ゝ。
一段ゝ。ゝ。ゝ。

一

[illegible]の術を[illegible]べ[illegible]の術を[illegible]の術[illegible]の術[illegible]の術

の命じてまことに清く向日に就き有に準じ過と
うまはれと法くしてこれ陳の初を厲へし不知て
たぐらに同郷よりて拙きはいろづくに分
して功のまことのかくしん

一

近来世よりよ拙もろ法の術間ぼうし拙じうようぐ
暑の胸ようふ今。こと間過と志かく潔よ
ぞと法心。新よこと擦目と定むぬ。ぬ
もてい世に寿と粗つ枝ふるうぐ。志ぐ勇法と
蔵かくこと言うこの。城教あるよりてこれ。
なくし実の寅ふ。ぬ法とふ間べき。拙見己ぐ
ふ部くつとこれんよとたして。過よ南ふる
ると擦ぬやむ事を示ふふり

術の中よ。本理よまこぐ。変ひと生じ
略ぬまれ。こと理部。て準ふ解ることあり。拙ふ
ぐまの術。こと本理と拙こと間。こと男系と間ることも
間自。識者。孫ぬ孫ぬよ拙こ。設ふ。ぬ
略番ふふい。拙。のこ日ぬれ。ぬを法見
よ悔ぬ。ぬ理よ法ぐ。ふ法よぬ法ぬよ
孫くくもくい。ぬくくは法べうに

一

とて量地の写真術。五術 桂絡術 ハ術 弓術 弓弩術 鞭術 弾弩術 等如術
為別者あり。書品 新知 倶よこと蒙 類ふふ。鞭
或し法儀くく称くして異形ふ。武ハ二矢と編くて
形ことを分へこと別作ぬ。こと法ふ。こと系地形ナとりて
等ふ。ぬの元意。ぬ元を求め元と解ぬ。ぬ用と南さ

他の方と論ずるなり。今を以て国の制を有て彼国の写と養ふ。とのゝ主張の初学よ
り一体に示す。五術の写術の如く今ゝ学者の初学とすべきこと
既に先達ゝ。主術を新に書りぬべし。強て
学ぶ者と雖も
一
近世の毛国伝来の学地を乱門と秘決称すると称す。
或ハ主伝と実ふ。或ハ
主意と別かつて。世と悪人を誘ひ。量地の
作法。千差万別事業多くあるべし。
主張蔵よりて
ゆうう。主義除の功ゆ
のは夫ふまきよりあるべし。書の旨と取味し。

はの理よ自然。大聚法の書術ぬ法移
その。主張を不法。とのゝ法べし。法の法の
法伝。主張の事ふ。
学地の作法ふ理。事と二種の写あり。理八国地
法ゝ日よ時の法べし。事八法の時
ゝ学ぶ人。面倒ゝ学地の書八。一事一術と
学ゝ世人の識ゆ法ゝ法ゝ。
とふ能。孤陋寡学と不作。
と術。伝伝ゝ。理新ゝ。
主今法ゝ学ゝの学術ゝ。
失学学術ゝ。地の始ゝ事と書ゝ

享保十五年庚戌春三月上幹採筆於
東都南芝之神武館村井大輔昌弘

量地指南卷之一

南勢　處士　村井昌弘編述

量盤術始計

一　先量作法の事

先量とは。すべて本術に務ざれば以前より。空眼（俗こゝろめ目ばりと云）をもつて。本座より目的までくれ遠程なれば一量つゝ。或い幾里幾町或ゝ幾十幾間と其大槩に豫じめ知るを云。かくなくば。遠辺廣狹高低淺深をも。目的までくの法程を先量て。然うしてのち本術を勤るとなれば。いたづらに差異出來る事すくなし。此法に不用して謾る本術を為ざれば。或ゝ十町を一町と心得違へ。或い十里を一里とまちがへ誤る類ひ多し。むかしはどまぐく甚しきは心得ぐあやまりあり。有ほどさるまじき。是ゝ先量の便利莫大なる事を。初學の人に知らしむる為のまくなり。

蓋量地の術は此法なる事。きはめて簡易なるべし。筭學は位を見ることを事とす。位を見ることを事とするが故に筭數の學は。位を見ることを事とす。位を見ることを事とするが故に筭數の學は。位を見ることを事とす。位を見ることを事とするが故に筭數の學は。

かるべし。若しまた本術に違ひまぎれく差異なる事ありとも
ども。此法に不拠ば。規矩となりて紀正とすべきものなり。量地
の學に志ひらんものは。造次にも顛沛にも此作法に
さらさらに如何

二　精眼作法の事

精眼とは。目的を定るゆを開地に求るゆと。又　見込見通
再見見返ふと。目的を定め開地を求る作法。まづ見込。毎事眼力に
見通再見見返ぼの事。下章にまづ
精まづ〳〵して見違ひなれる事なるべし事を云。是又先量の一
方なり。或ひ廣原茂林。或ひ高山窄道。或ひ海面河上。或ひ村
里田畑なども。地より又朔ふよりて見誤る事あり。且清明
乃日。陰雲の日。炎暑の日。嚴寒の日。又ひ雨後。雪。春夏秋冬
なども。時よりて日よりて見違ひる事ひり。其外日に前ふ。

日に後ふ。風に向ひ。風に
背き。或ひ真向。斜向直上。直
下をのく心得多しいたり
其たゞしく功用ひれども。人々
の眼力一定なるべれ故に。
一般の教諭に施しがた。
ひとり平生に空眼を試
し習ひ。其已が得る所に
惣じてかくのごとくの作法。筆端に述べがたき事
もくさ〳〵。爰に志深くひ人に面授をべし

三　目的に定る作法の事

目的とは本座より今求る所の目印を云目的の図下に記す是遠近廣狭
を量るゆと。高低淺深を知るゆと第一とする作法なり。扨此

精眼之圖

目的を定る事い。樹竹巖石堂社丘垤何にかぎらず。彼所の正面に在る物に吉凶を勿論本座（本座の事下に委し）を見込（見込の法下に委し）のごとく目ざす物に専要とすべし。兼て開地（開地の事下に委し）ふいなく。見返（見返の法下に委し）を為さず障りなく彼目的見返し安らん事を遠慮すべし。そも〳〵開地して目的を見返す事疑しき時いかゞ其術に差異出来るのなり。或いまた廣原平野田畑海濱のごとき曠遠の場所に其近邊ふ目ざす物なくして。目的なく定めがたきときい。空の目的（空の目的とい事いまだ詳ならず）を用べし

四 本座に選ふ作法の事

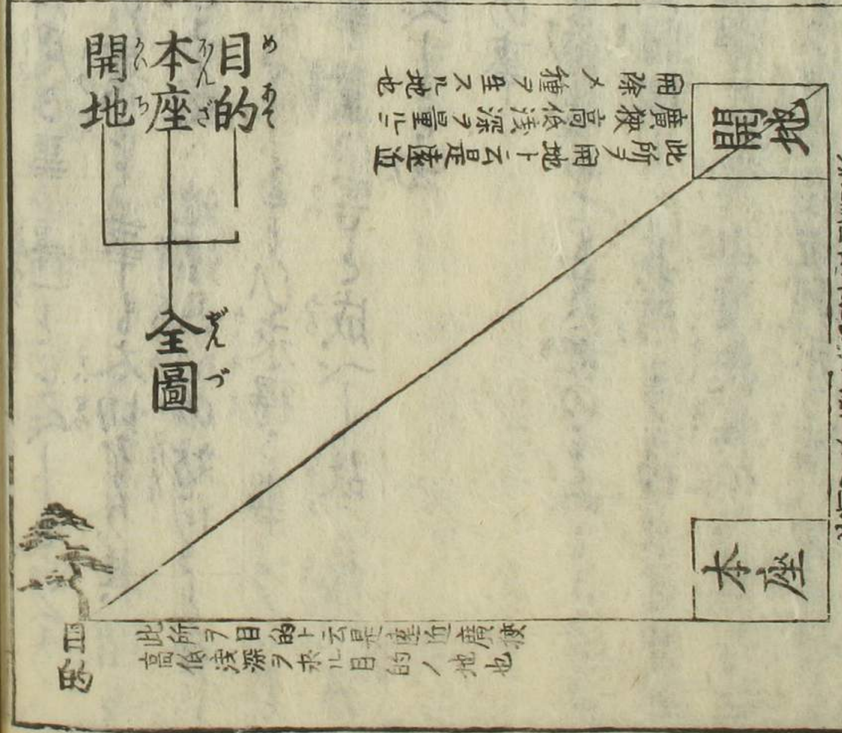
本座とい其所より目的を眺視て遠近廣狹淺深ともに知らんと欲する場所に云。（本座の図下に画き）扨此本座を選ぶ事い。

なぐ目的の見えやすき所に用る事。専一とすべしとのべし。ほゞ其所より開除の善悪に心察する事も太切なり。其謂々開地の方に除蟲甚しく少さる。又い池沼凸凹の妨なるときい。心の侭に開地に求る事成がたし。なほ求得る事なりとも。其法順路なるべきい。事業の害と成べし。故に此境に能々躰認してのち。選ぶべしと云

五 開地を求る作法の事

開地とい本座の左右に前後なども。其地のよろしきよりまづ開除して。其所よりほゞ目的に眺視べき場所をいふ。（開地の図下に画き）これ遠近廣狹高低淺深等を量知るべき本元の種子なり。扨此開地に求る事い。彼先量よりとるべき町間の三十分一の間數に用る事。古よりの法なり。

なるべ本座より目的まで。先量ゆく三町とならばくべ六間用く
べ。又一町半とならばくべ三間除くべ。是三十分一のつもりなり
然ども少しく有餘不足なり
とても深害有とやども其地の
廣狹難易よりて止事を
不得ときい免角宜しきさま
ふさかんべ。そも開地は
求むる事くりかへして。
見返ふ妨障なるべ又間數
古法三十分一なりも甚しく
少きゆ。多きい何をゆくも害となる事なし或い
開印 角印の事下に記す 或ハ残印 残印の事下に



記す等のさまざまふ見分がたき時ハ。事術の妨礙となるべし。
其利害得失を察すべ。且まつ開除の作法大躰本座の右方
狹ときい左方へ開。左方逼ときい右方へ除。後地迫ときい
前地へ進。前地闊ときい後地へ退く。或い前後左右嶮難
狹隘なるときい。前後左右の斜開は用ゆと知へし。猶其外
種々の作法おのゝ事。往々其術の下に記すべ。勤て
工夫勘辨すべし

六 量盤居やうの事

量盤を居る事山陸二様の差別あり。所謂陸地ハ盤を
居る作法ハ連々上章ゆとしるべ。本座目的開地ハ
ゆ極て然しその。本座に臨て量盤を目的の方へ堅立
て盤南を彼へ。盤北を此へ。盤西を右へ。盤東を左へ。方正に居置扨其至の下ふ楔を

施し水平（盤上まさハ墨上ふ水ハ盛をつるゝ）垂針（是ハ盤上ふ載て針口と合ゝ）釣玉（盤の四隅ゝ細糸をかけて其器下ふ図ゝ）

ゝ。其器下ふ図ゝ等寸の平正器の妥ゝ隨ゝ。

平正の器。三物一同ゝ用ゝ。彼基の

ゝ。一物を用ひても平正極ゝ

下なる撰と縮弛して平正ハ定む

なり。

地形をゝ盤と居ゝ場所不平ゝハ。其

右のゝ盤と居ゝ。平面ゝ。

盤と居ゝ。ゝ眺視の數余多ゝ

或ハ目的ハ近く開地ハ遠

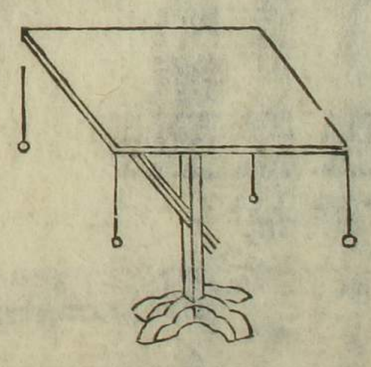
等ハ。盤ハ横ふ居ゝ。盤と居ゝ法

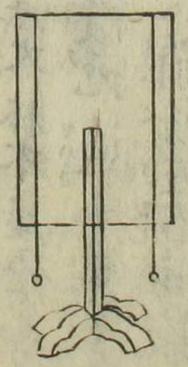
用ゝ。大方竪面を

横面を用ゝ。其法連々下ゝ記

又目的上下ハ。盤面ゝ上下を

開地上下定規ゝ上下ハ





各其法式ゝ別巻ゝ。所謂山谷ゝ盤を用ゝ

作法ゝ云ゝ。

面ふ折ゝ。隊ゝ盤裏の左右竪ゝ圖のゝ。墨を二條

隨分不邪ゝ引渡し。扨盤裏の納筆を柱ゝ指入て正直

ふ立ゝ。然ゝて盤北の木口盤北の木口上端ゝ立る。ふ針を刺ゝ

釣玉ハ。兼て盤裏ゝ設を置ゝ。墨乃條ゝ今降ゝ

糸の條と一致ゝ。即ゝ盤。正直ゝ居ゝ

是ゝ釣玉の法ゝ云。又垂針を盤縁（盤縁ゝ盤北の木口）ふ載て其針口を

又降糸の法ゝ号ゝ

眈合せ正直ゝ定ゝ。又水平を用ゝ可ゝ

ごゝすゝ。盤の正直ゝふ極ゝ。其外の作法

惣ゝ平陸量盤乃居ゝ

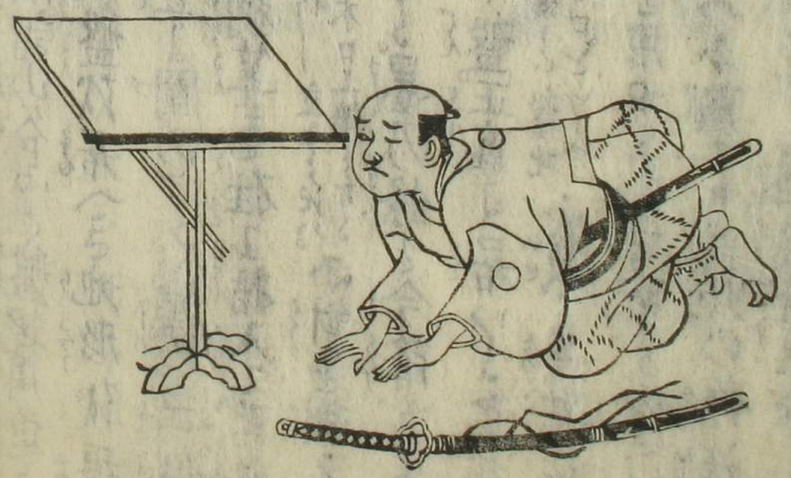
ゝ。照し考べし

猶後章ふ准知ゝ

七 眈視やう作法の事

眈視とは。眼力をもて見込見通再見返ホの目當ノ印を見定る様云。其作法身体の居やう眼中のそこなら紀各なるしおなり。まづ盤状其座 其座とは。本座。周地。小周。累周。ホ何とうても。其居ゆへこと乗を云 居る。定規を盤面に載せ。定規の本端と末端と彼目的印と何方にても一條に見るる。體を平直ホ ちく磬をすこし逡巡。跪坐く左右の手杖一眼をもつて眈視 なら。勿論右眼を用ゆべし。去るが

眈視之圖



左眼利くものは。左を用ゆるを害ずべし。眼甚定規に近きとは目的散く定らなくべし。眼甚盤面に遠きとは眈視乱く極まるべし。偏其中正なる得む事をなるべし。顔面てゆゆるべ。ふとくふ面の仰くを云。鳥銃を眈る心持ゆく見るるべ。ふいなくふ面の俯くを云 ふいなくふ有事を不謂。ものづくく。但古法ゆを眈視やう人々吾軀に備りる規矩あり。其已ゞ稟得る規矩をもて見るべしといへり。唯其至要は坐作進退の間ゆ。怠るべ精練なくゆ馴致るるべしと云

八 見込并求程の事

見込とは品々作法のごとくして後。本座に盤を居。盤の居やう前に載る 盤端に定規を載せて右端にても左端にても術に同し 其所に正當に目的を眈視を云。見込やうの作法は前章にくり記し 遠廣を量るを高深を知るも。

毎術其法同然なり又盤面大成（盤面大成とは見込見通見返の術を尽くおりて盤面を三四五の形現出するを云）のとき此見込の條に四とも股ともなげく求程乃縮なり（求程とは遠近廣狹高低浅深の術なり其求る程を云。即見込大成とも時の号なり）

九　見通并開除の事

見通とは本座ゆく作法のごとくして目的に眈視あれ盤面とこしも不拙して其傍に居置盤の此端に限りて（此端は盤の中央なり見通の事もなるべし）定規に載せく其所より横當に開地を眈視と云。見こゝやれ事前章にくり遠廣を量ると高深を知ると毎術其作法同然なり又盤面大成の時は盤面大成の事前章にくり此見通の條を三とを鈎ともなげくとは即開除の縮なり（開除とは遠近廣狹高深の術同の間数を云。即見通大成しる時の号なり）

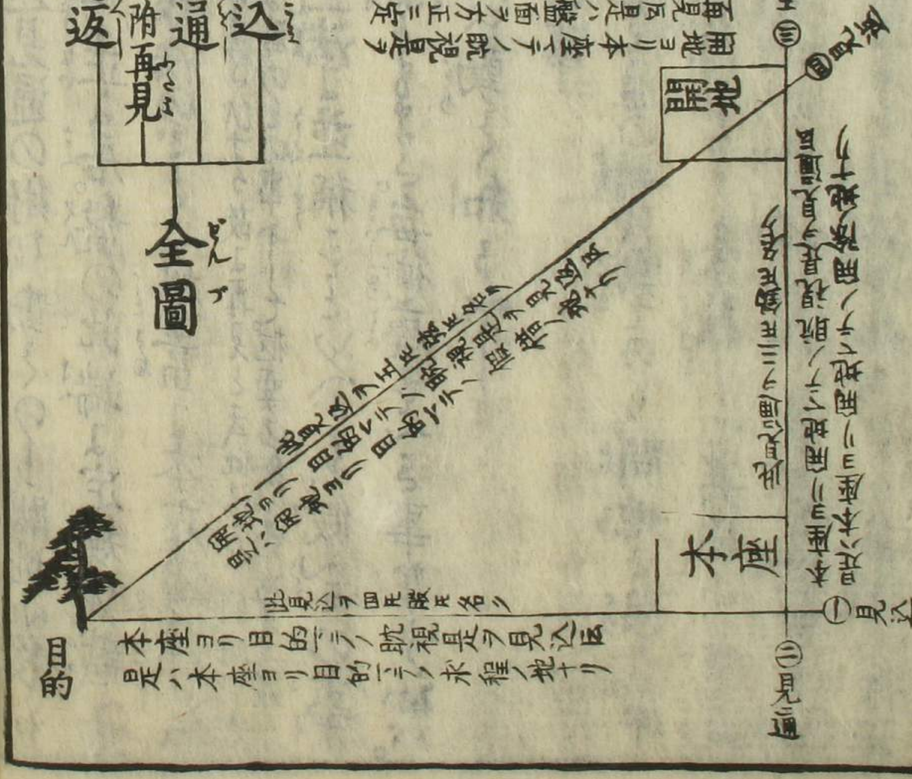
十　再見の事

再見とは本座ゆく見込見通の術に勤てのち開地に移り作法のごとくして盤に方正に居盤の此端に定規に載く其所よりゆく見通の作法のごとく横當に本座の殘印に眈視を云。此術見通の術を再びする故に再見と云。此法ゆく開地ゆく盤を方正に居る為のもの事ふして抱要の術なり尤此法見込見通見返の三法に並稱ともいへども假令の事ふして實用ふかあるべし。然ともまゝ毎術廢をべき事なるべ泳バ。爰に記と其優劣に勤て知るべし

十一　見返并假借の事

見返とは本座ゆく見込見通の術に勤てのち開地に移り即本座に再見しる盤に。すこしも不拙して其傍に居置盤面に定規に載く其取るゆく斜に目的を眈視を云。（見こゝやるの事前章にくり）遠廣を量るゆを高深を知るまを毎術其作法

同然なり。まづ盤面大成盤面大成の事前章にくはし〻時は。此見返の墨縄五とも弦とも号く是即假借の縮なり假借とは。遠近廣狹浅深の術なり。假に借用ひく其術を成為せり〻むるを。即見返大成〻なるべきの号なり右に述るごとく。一番に見込二番に見通三番に再見四番に見返次第を追て勤るべきは。下に図すべし。盤面大成〻て量地術の全体備りる。是をのべくべきときは。千万里といへども立所其道程を知るべし



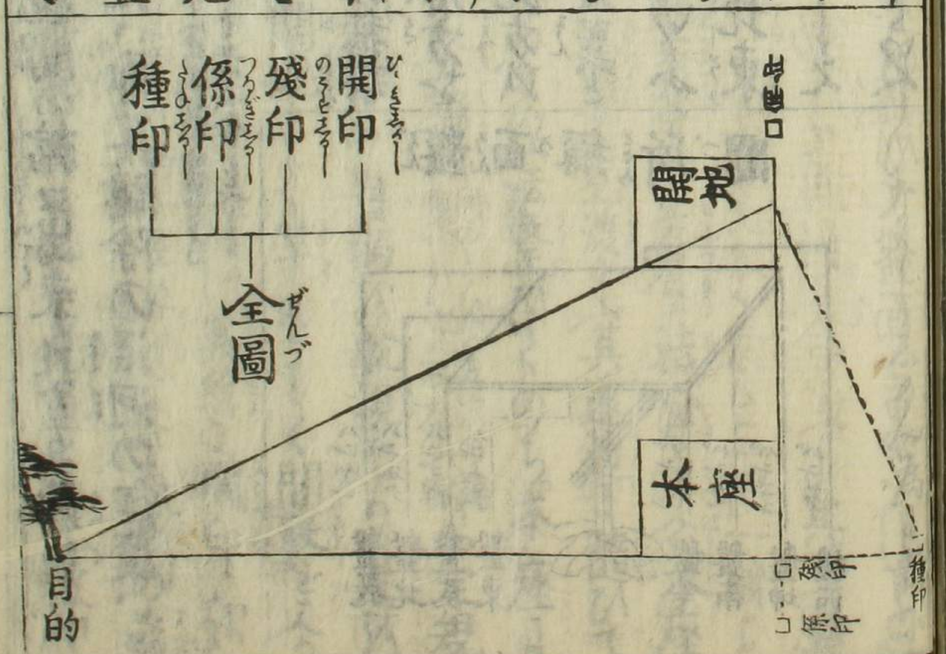
十二 四品の標の事

四品の印とは。開印残印係印種印の四種是なり。其作法各異別あり。本座開地は。つねに及べし。或は種子場。或は小角場ホ。ゆくゆくふてくと。其座所迄を取。其的を見る取ホ。毎取小是所立べし。又角印残印の二品は。毎術不用して不叶印なり。種印係印聚謂の二品は。土地のかくなりよりの。時期のなりしてとりめべきなり

開印見通の印とは。本座と盤所居。目的所見込てのち。開地所求るとき其よろしき場に此印所立く。本座より是を目的に作法のごとく作法とは。盤所平正に居。定規をもて見とり云見通し。開地を定て印なり。所謂残印本座の印しるしなり。本座ゆく見込見通の作法畢つくのち。盤の隅に此印所残し置然して開地に移り彼場所より此印所目當として作法のごとく作法は右に再見し。盤乃平正所極る印なり。此二品の標は毎例かならず用べきなり。所謂係印とは。本座と開地との間に沿ひ河のありて。開地への

往反不自由なるときは。開印を不用。本座より殘印と此係印と二本を立て（係印は殘印より五間も十間も除くべく立つる吉）正當に立て（係印と不用とは立べき事勿論なり。係印を用ることはさハ。開印を立て害なし。故に開除の間に沼河などあるときは。往来せざるべきを為に係印を用て開印を不立事有）本座の殘印より此係印を見通す（必ずしも係印を開印の代りに用ることなり）本座の盤乃平正を極め。然して開地に移り彼所より此二本の印（殘印係印）を一條に眺視て正當に再見し盤を居る為の印なり。（殘印と一本立る事は尋常の例なり。然ども開除の間に沼河ホなりて。往来不自由なる時は。開印立がたきを故に再見すべき目印なり。差とめく殘印と係印と二本を正當に立て。本座に殘し。是を正當にとりて再見するなり。是開地へ往来せざるして其條理すること違ふ事なき良法なり）此係印は開地へ往来不自由なる時のみを加ふべし。毎術用ても利多かるべし。所謂種印とは。本座と開地との間に沼河有て。開除の町間いかばかりも量がたき時なり。これを量るに用ゆ。其法本座ふく開地までの遠程を先量し。其三分が一の間數を積りて。

前へ成ども後へなりとも勝手なるほうへ間數を定めく（本座より開地とまでの所まで尺縄三十間なりと先量し。種の間數と定るなり。猶後委しく）種印を立。本目的を見込るべし。本座より是を正當ふ眺視て。條理を定置。然してのち開地に入る。場を選びく盤を居。本座の殘印と係印と一條に眺視く。再見の條理をく定め。扨其盤ふく。此種印をと見返て。俱小



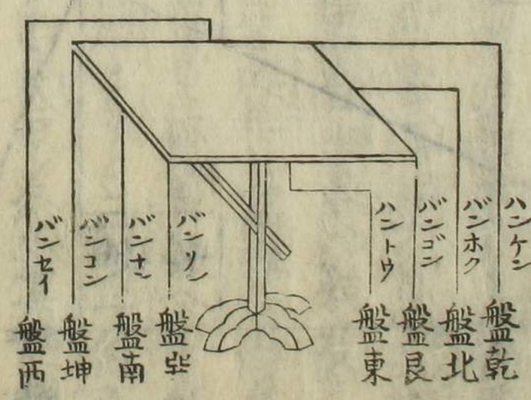
盤面に墨縄引渡すべきなり。種間の縮口出来たり。此縮縄をもつて開除の縮縄量るべし。即其開除の沼河の径度いかゝ

後巻に其大法を述ぶ。其審かなる事。後巻に考へ合すべし

十三 盤面稱所の事

量盤の上面四方四隅八箇の稱取り。所謂左方を盤東と云ふ。右方を盤西と云ふ。彼方を盤南と云ふ。此方を盤北と云ふ。東南の隅を盤巽と云ふ。南西の隅を盤坤と云ふ。西北の隅を盤乾と云ふ。北東の隅を盤艮と云ふ。是いまこゝに稱し来る所なり。

盤面稱所圖



どと。初學のやうに其所を指さしひなびたる為に新ふ其稱所をもつて學者知るべし

十四 量盤始終作法の事

往々右に述るごとく。空眼視觀察等の先量法なくして。本座より目的までの里町反間を大槩に見渡し。其遠近に隨ひて三十分一の開除を假に定置。品々作法整ひくのち。本座に量盤を方正に居て盤面の竪端（右角のごとき左方の端 左角のごとき右方の端）に定規を載せ。（定規は見込見通再見見返ふ。毎法毎般盤上に置て見こみの矩とする）目的を眺視なり。是を見込と云。次に假に定置たる開地まで竿をもつて間數をとらせ。（此間数古法三十分一を用ひ大槩是に准じて間数を定べし。これすなはち量知の種なり）其所に開印を立させ。（此印も假に立る。家初に居て目的を見込る盤を。すでに不拵して置なり）然して盤乃此の端に定規を載て彼印（開印を云）を眺視なり。是を見通と云。尤彼印

定規と正當小合〻ハいろ〻〻不合〻ハ也。幾〻びも彼印を進退成〻ゝ進退の仕〻。是も正當を專一〻まもべし。〻〻同數差異ハ有るべし定規と正當小まもべ。よく正當〻成〻る時〻。盤の隅小殘印と立さるべく開地へ遷れなり。扨開地〻いろ〻開印へ盤の隅ハ假〻合せ。初のごとく盤の此耑〻定規を載く。此所殘印と〻り本座の殘印へ眈視なり。是ハ再見と云。尤其印

盤の此耑の定規と均く合ときハ宜若不合ときハ。幾度も盤ハ居直〻て殘印と定規と正當〻まもべ。扨盤〻く居〻ゝ其時〻〻。定規を斜〻盤上〻置て本目的へ眈視なり。是ハ見返と云。尤目的と定規の本と末と三所一條〻成〻〻。幾〻びも定規を動〻て目的〻合まもへ。其定規〻く目的〻合〻ハ。即定規〻隨ひて盤面〻墨を引なり。

見込見通再見の三法ハ盤の耑〻定規と一致なるゆえ故〻墨を引くもの疆とする〻及ひ見返の一法のミハ。盤中〻斜ろるゆ〻〻墨ハ引くもの〻て印とするなり。扨墨の引〻ハ。工匠の〻〻の曲尺をもつて。材木〻紿する〻ごとく。悠筆をもつて定規〻ろ〻〻引なり。まこと渾發をもつて界引仕るゆ〻ろ〻〻形のごとく見込見通見返の法悉くとくなり。時も。盤面大成〻て三四五の形ハ〻〻微妙其中ハ含蓄なり。そべて盤面〻模〻現〻る形ハ。目的本座開地の形をすと〻〻を不要〻て大を小〻引縮〻る圖なりと知べ〻

圭 渾發用〻の事

上章〻いへごとく。量盤〻據く。見込見通見返の三法悉く〻〻〻時ハ。盤面大成〻て毎術下〻圖するごとく鈎股弦三四五の形鈎股弦とて。三四五とハ。一事別名なり。とのつゞ〻是を二法とおのひくはゞ〻ふべ〻〻。猶委〻〻くハ別巻〻記を〻〻〻。或ハ左右角或ハ正角或ハ斜角の別〻〻〻てずと〻〻く其形異といへども。大躰毎術三四五の形。鈎股弦のこゝろを。離〻事なり

其三〻 三〻〻右〻いへごとく盤の此耑見通の條と云 開除本座〻り角地まくの遠程ハ〻〻〻ふ の縮なり

其四々 四〜六右より下がる〜〜盤の竪巾見込の條を云 求程 本座より目的すての遠程をけ〜てい〜の縮なり

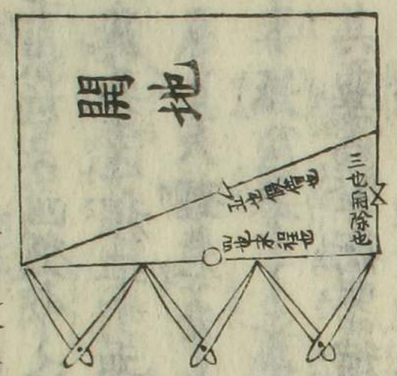
其五々 五〜六右より下がる〜〜盤の中斜見返の墨を云 假借 開地より目的すての遠程をけ〜てい〜の縮なり

以上ハ盤面ニ引〜〜る形を記す。

以下ハ渾発の〜〜き作法を述る 扨渾發をも〜〜其遠程をとる〜〜知べき作法 ぶ〜〜渾發乃口寸開〜〜開除の縮口の三寸〜〜と合。其三を量〜〜る矩 矩〜〜渾発の開〜〜るを口と〜〜下是〜〜なを〜〜えをかて。求程の縮口の四を量る。然るときは。或ハ幾十間と。其數量立〜〜るとき。即求る所の遠程或ハ幾十町の間數十間〜〜る時ハ。盤面より現出〜〜る三の口寸ハ。十間ハ縮〜〜れ口寸なる故。渾發の口寸〜〜彼三乃口寸と一変より変〜。是を十間の矩と名き 渾発をかて三の口寸と変〜〜る事一変〜〜と名き是と五変〜すると〜〜きハ五間の矩 二間の矩と定むべし。余ハ倣之 其十間と名付〜る渾發の矩とかて。即四の口寸ハ〜〜る。四の口寸ハ求程の遠程ハ縮〜〜れ口寸

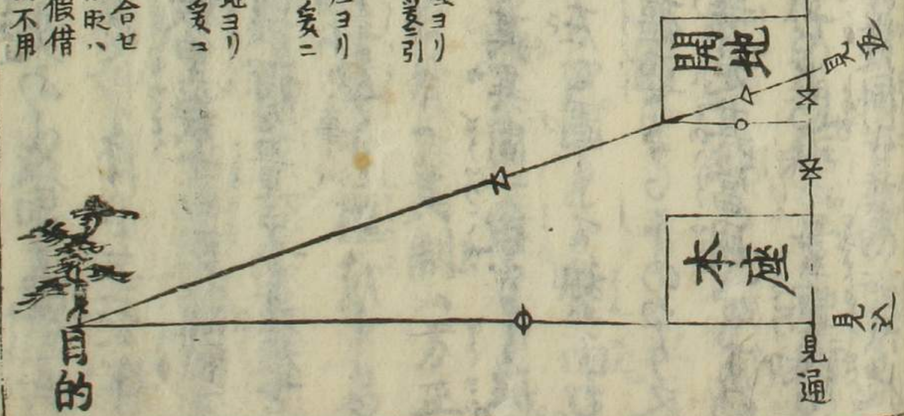
渾發用法之圖

今此渾発ノ間タル口ハ開除十間ノ縮ノ三〇ヲ変ミタル矩也此渾発ノ口ヲ以テ求程ノ縮ノ四〇ヲ量ル三三変三有リ三変ハ即三十間ナリ是求程ノ間数也余皆是准シテ知ルベシ



此盤ノ図ハ下ニ図スル所ニ間ヒ今再ビ是ニ図シテ以テ渾発ノ用法ヲ明スナリ

量盤用法之圖



〇此遠程ヲ〇ニ摸スル也
△此遠程ヲ△ニ摸スル也
〇此遠程ヲ〇ニ摸スル也
毎術如此地形ノ大ヲ以盤面ノ小ニ引縮摸スル也

量盤用法之圖

〇此口ヲ開地ヲテノ間数ヲ幾程アリ是ヲ縮メ摸シタル所ナリ
〇此口ヲ求程ノ縮ト云是本座ヨリ目的ヲテノ間数ヲ幾程アリ是ニ引縮メ摸シタル所ナリ
△此口ヲ假借ノ縮ト云是開地ヨリ目的ヲテノ間数ヲ幾程アリ是ニ引縮メ摸シタル所ナリ
毎術〇此口ヲ渾発ニテ量リ合セ其渾発ノ口ニテ〇此口ヲ量ル時ハ遠程立所ニ知ルベシ△此口ハ假借トテ假物ナリ故ニ大成ノ後ハ不用

なる故に。渾發の矩わく此四の口寸三夾あるべ。即其遠程三十間なり。四夾あるハ。其遠程四十間なり。もし〻ゆゑ二夾半あるべ。其遠程二十五間なり。もしまづ幾數里幾十里の遠程を量るを其理ハ一なりもまた高低廣狹淺深を量るも。遠程をなる法に異なる事なし

往々其術の下に異傳ある事ハ。

十六 量盤術器械品々の事

量盤術の器械古制新作大小精粗すべて其異同一般なるべし。今其無益の品を除き。有用の物のみ採り。左に圖して知らしむ。所謂量盤定規渾發の三器ハ。就中其樞要なるものなり。又釣玉垂針悠筆蹙鏡標木間繩間竿等。是其當用なるものなり。其外學者に辨知せしべき品物少〻〻といへども。急務なるべ〻ゆゑ。後卷に記す。又盤針術渾發術等是術ホし。

器物にしてハ。皆其編の卷首に圖し。異同古新の差別にしるすものハ。或問の編に論ず。然る中に分度の規矩ハ。量地術の神器大寶なるゆゑに。初學の士一知らしめむ為に量盤術に用ひるべき下小圖を

量盤 量盤ハ遠近廣狹高低淺深のかるがるしきを。盤面に引感をもて知る器ホして。即當術の歸とする取なり。其要器なる事今更述るに不及ところなり。其制ハ方正平直なる本にして。盤ハ槽なりて。基柱伐半ホい櫃なるもの。大躰其大なるものハ。竪長一尺四寸。横巾一尺なり。其小なるものハ竪長一尺横巾七寸なり。高程ハ何にも一尺四五寸を節とす。其余の制作ハ恰好なるべ〻ことに應じて。大小ハ好むべ〻といへども。願くハ

大なるふたつく事ハ。猶審なる事ハ。下に圖して分く示すと見るべし

定規 定規ハ盤面に載せて。見通見返の模範とする器なり。其制ハ檀又ハ檀をのくと。長一尺八寸余。横巾一寸弱。厚三分。是其大概なり。猶量盤の大小によりて。長短心得有べし。其器充正直に制るべき事いつに不及又不時の需に應ずる為に。序方に曲尺の星孤をつけあるべしと云

渾發 渾發ハ盤面に現ずる圖形孤。是孤のく量り。遠近廣狹高低淺深孤を器なり。或ハまと規に用ひ。矩に用ひ。分割に用ひ。界引に用ひ。錐に用ひ。假量地ホ[illegible]ひ。此器紅毛國より来る孤のく上品なり。其制黄銅をのくく作る。又鐵をのくく制をもよし。彼も得失

ありて此を得失あり。強く拘泥する事ハ。こゝろに任せて造るべし。長五寸余。其形扇子の上骨二本合せたるに似あり。下に太く。鋒孤細くして。下の方八分ばかり去て要を施す。要の跪を固くすべし。又鋒の内頰に墨溝を設くべし。又外頰に曲尺の星孤を付くもよし

釣玉 釣玉ハ盤面の平正を定る器なり。其制針に糸を施し鉛玉の錘孤つき。盤の四隅に降るなり。此糸の曲直をもつて盤の平正を定るなり。糸針ハ尋常に用る品孤をくと。鉛玉ハ稱目三四文目なるを銃丸のごとく制を用也

垂鍼 垂針ハ盤面の平正孤極むる器なり。其制黄銅をもて作る。拾好惣体下に圖するごとし。形天秤に用る所乃針口といくるに似たり。其理もまた是に同し。制作の

大小精粗其望ノ任ムベシ。ゆゑに異作を好むべし。其理をもつぱら會得せば。用ゐる所宜ろしかるべし

笠筆 笠筆は盤面わく定規ホ隨ひ墨ホ引器なり。竹をもて作る。平生ヨリ工匠木客のもちゐる所なり。用ゆるところ器物ヨ〻き故ニ敢テ贅言ホ不記

間縄 間縄ハ間町寸尺ホ定る具なり。長六十間なり。太鍼管ホ〻ホ吉とも。上品の麻苧をもつて作る。大躰微索の連綿なるがごとく。固く縒りて三糾ヨリ多くべし。或いはゝ蟬を引溷ホ引きて漆ヲ塗り。水ヨ濡ス屈伸なしめむが為なり。其一間毎ヨ印ホ付置ク急用ヨ便ヲベシ。さべく遠程一町ヨ及ク。引渡事ニのぞむにいかるゝ〻ば裏むものなり。兼テ其心得有ベシ。又無用の時藏め置ベき

ホハ簟ヨ捲ク置ルヨウニと云

間竿 間竿ハ間町寸尺ホ定る具なり。其制檜又ハ檀をもつて。長九尺方二寸ヲ三尺づゝ。胴金ホ入る。枚ヨ寸尺の星ホ付るなり。片方三尺を。其厚の半分を削去て。間尺ホなる時ヨ。竿二本ゆく組ちがへくさるごとくすべし。又或制おほし。試くのごとくすべし

標木 標木ハ開印（見通の印）殘印（本座の印）種印係印ホヨ用る具なり。竹木ホ〻ホ制を。長二三尺。徑二寸内外其大躰なり。尤長短大小其時の宜しきホ隨ヘベし。兼テ貯置き具すべし。期ヨ臨ク作るべし。但開除一町以上の印ホハ。標木の丁ヨ紙ヲ巾ヲ目ヲ物を結付

屬し。不然ハ分ごとに小見分がくして。誤まる事ホあり。
一町ごとに目印を付おくべし。別に目印を付おく不及屬
或ハ又州郡の地圖などを勤る
時ハ用ゐる印ハ此制に。つくべし彼制作。盤針術の編中に。委し

感定鏡 感定鏡ハ眼勢の不及ところを補ひて。遠里遠町の目的を明らかに見定る器なり。其制紅毛國の作物と佳とす。其上品なるものハ數十里を。其中品なるハ數里を。其下品なるものハ數町を。其次品なるハ數十町を。其最上の品ハ永く得安くしかも上制なるハ數里を。其次品ハ永く見る物をハ求めく携へべし。此器の制作吾邦尋常の工人の能ざる所なり。爰に其作用を洩さず名工ひろく是を制せバ。永く倭朝の重寶ならん

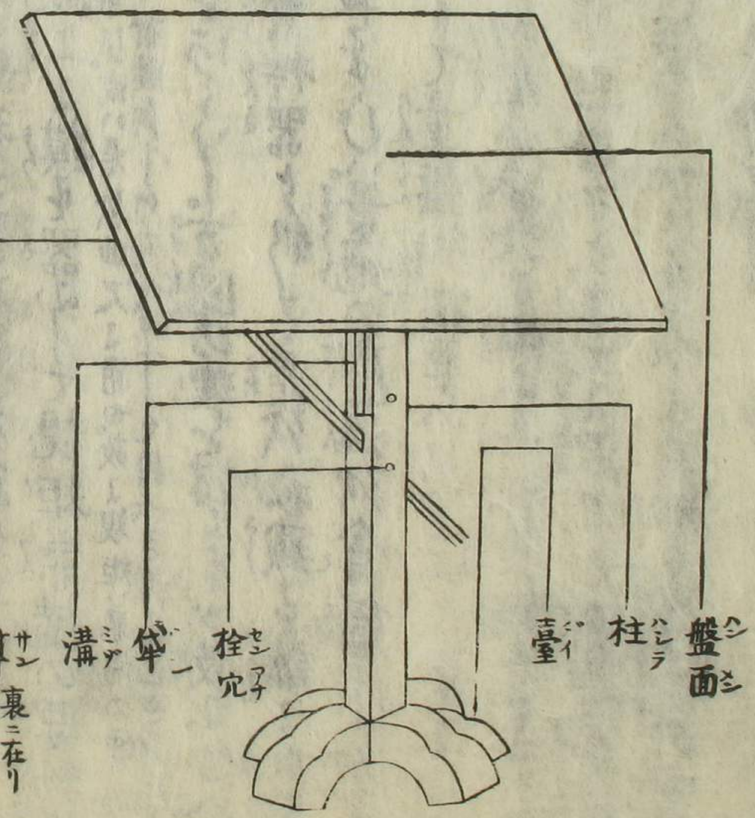
規矩 分度の規矩ハ。地理の遠近廣狹疎密方角をはかりてのち。其圖を紙上に摸を器ふして。規矩兼備の要物也
或ハ是を條貫に用ひ。或ハ是を曲尺に用ゐ。故に規矩兼備の要物と
なり。其外かくのごとく機轉をかくして用べき事甚さまざまなり
尤此器規矩の妙をいふ。方圓の理をはかるとゞ故に古今
の量地者家。大寶神器とかく是を秘藏して。誠に此器
の要用に識達せざるハ。量地の底蘊を會得しがたしと
いふべし。爰をもて量盤術樞要の具をもつて。之を以
ごとく下に圖して初學の參攷に備ふ。其制黃銅をもつくる。
徑一尺の周圓。十二分の一分なり。名工に課せて分釐毫髮
なるもの。其制差誤ることなきまでなるべし。其形象寸分の審
なる事圖を按して知るべし

盤
竪一尺四寸
横一尺
厚一五分弱
両端端込ヲ施ス

算
長七寸五分
巾四分強
高五分強
両端栓穴ヲ施ス

柱
長一尺二寸
太方一寸
臺入枘長一寸
太方七分強
算請溝五分強
算立溝三分強
牽入穴長一寸余
巾四分

量盤表之圖



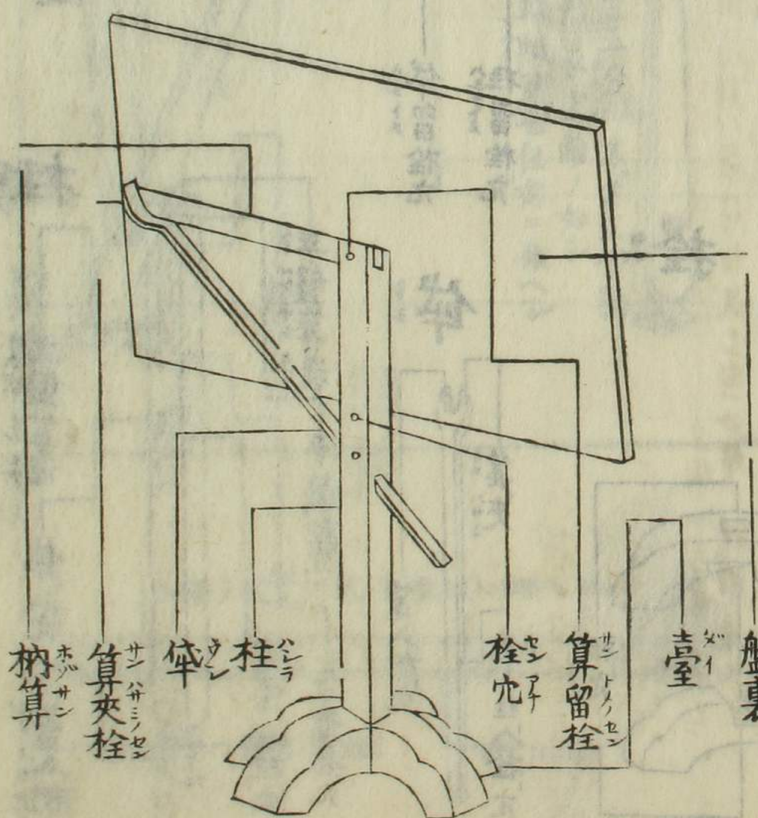
牽
長一尺四寸
太方四分強
算夾長一寸三分
巾九分
算請長六分
巾四分
両所栓穴ヲ施ス

臺
蝶手
長七寸
巾一寸四分
枘穴方八分
深一寸

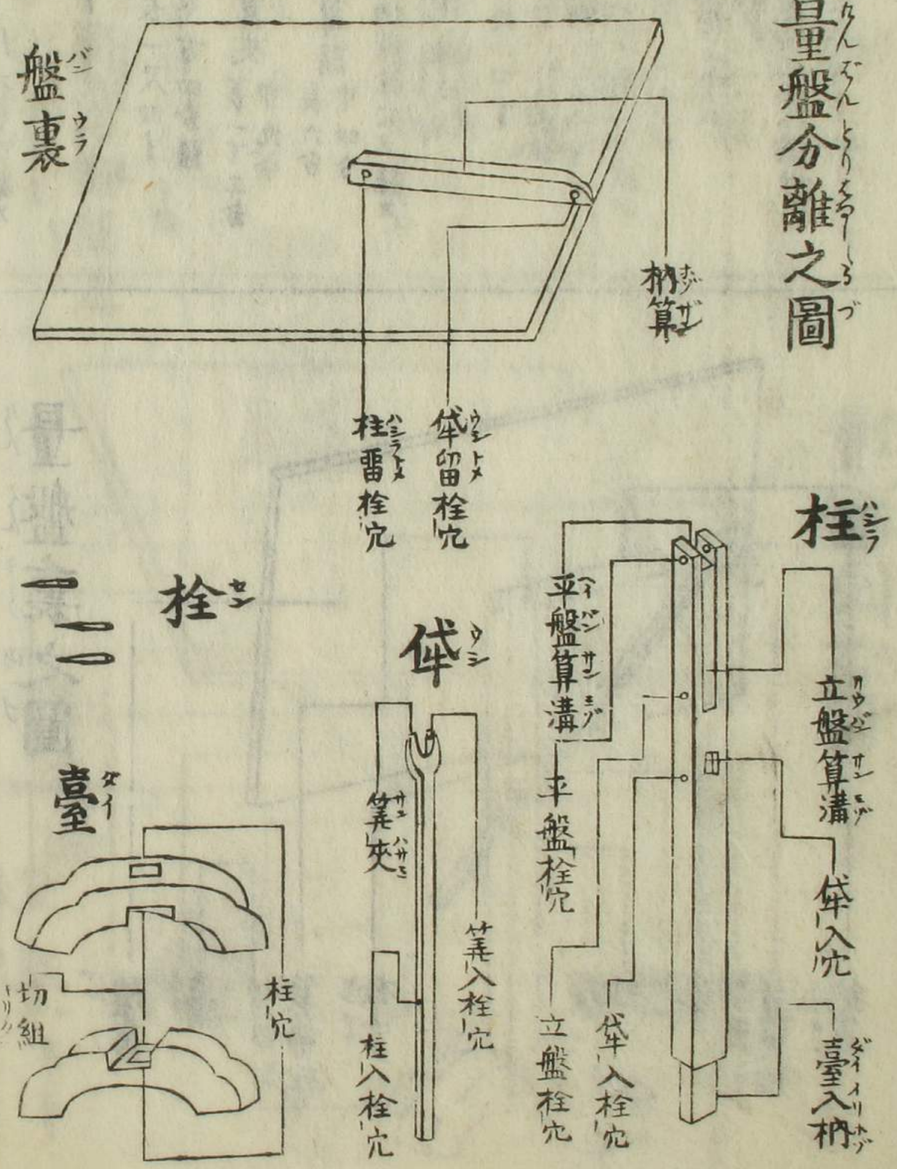
栓
長一寸余

總高一尺四寸
但臺下ヨリ盤上ニテ

量盤裏之圖

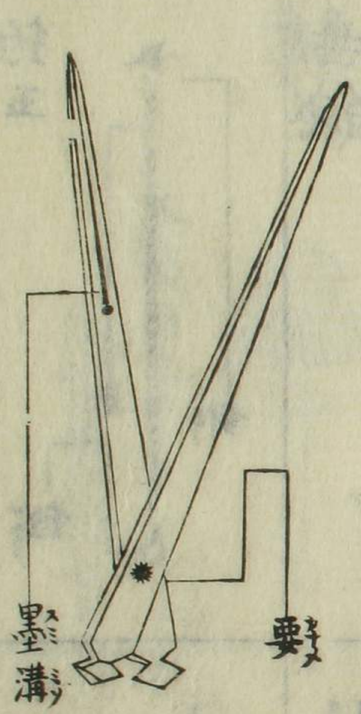


量盤分離之圖

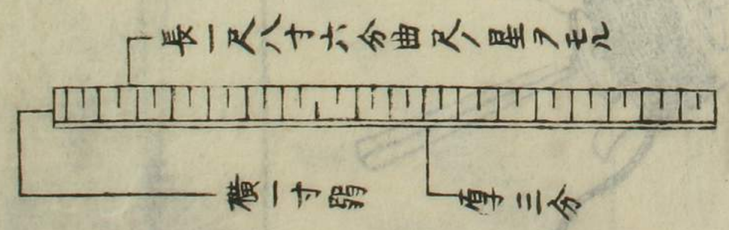


渾發爲開圖

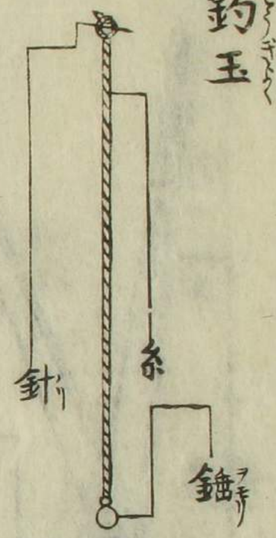
渾發爲開圖



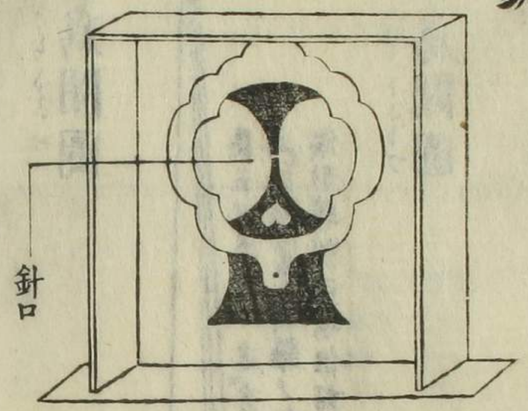
定規



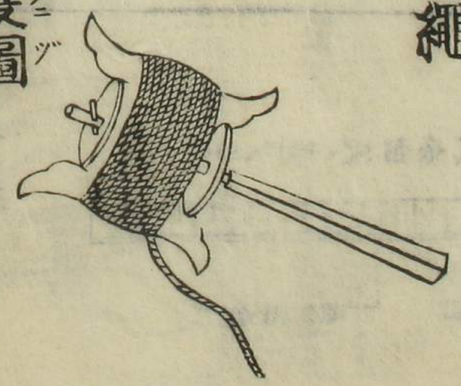
釣玉



垂鍼



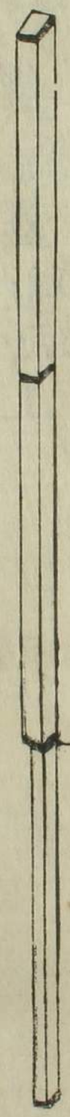
筮筆

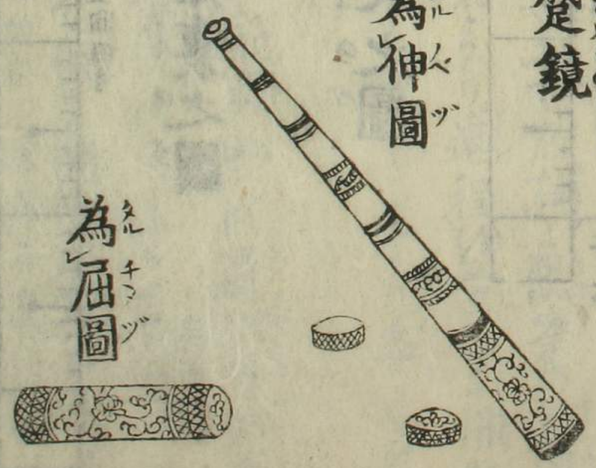


間縄

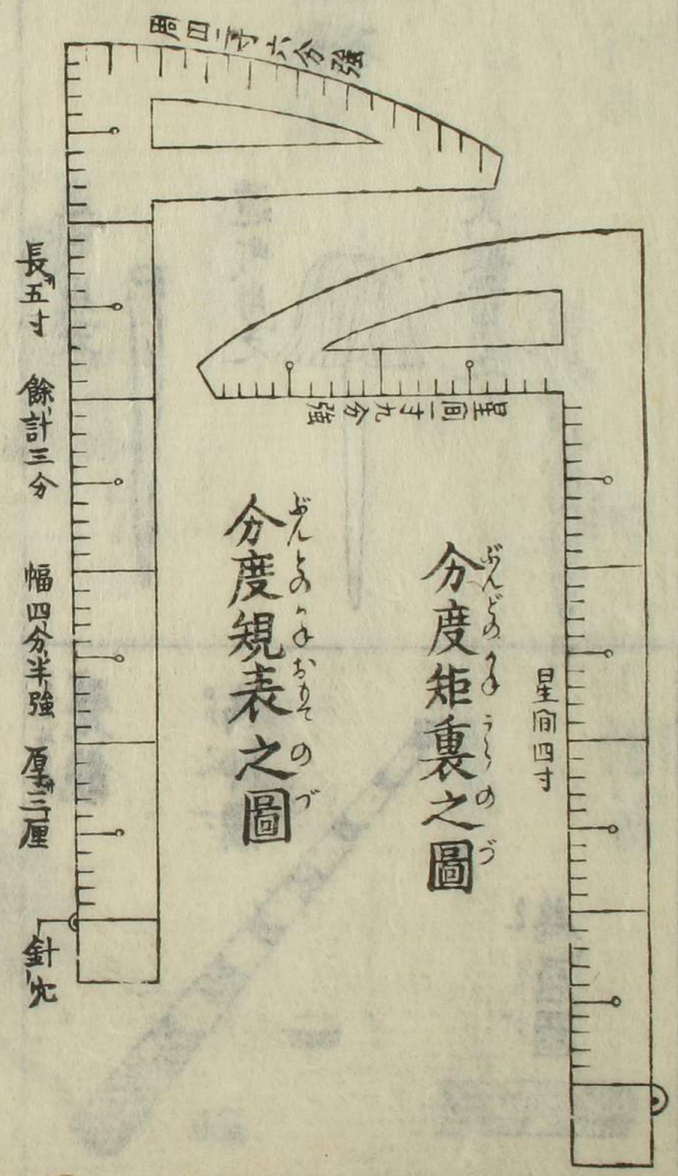
捲箋圖

間竿





量地指南卷之一終



分度規表之圖

量地指南卷之二

勢南 處士 村井昌弘編述

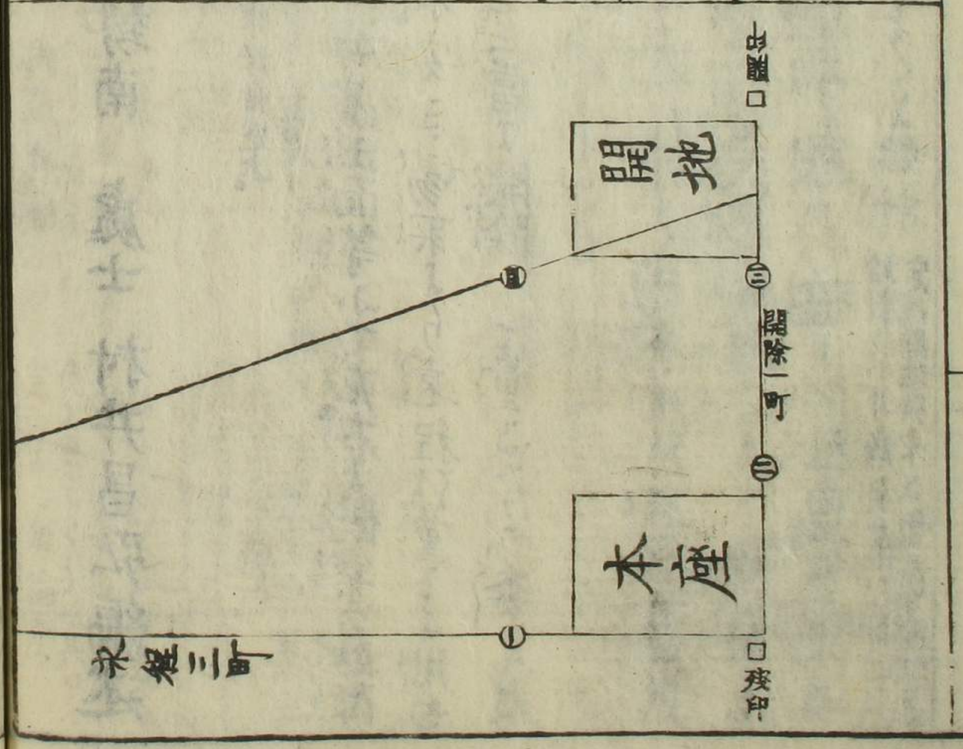
量盤術遠近法上

左右正開方 羨ホハ左正開の作法を述ぶ。左正開の法も准じて知るべし

此術ハ廣野平易又ハ海濱田面等ふて。左右ヨ觀察の妨障なく。開地心ヨ任をくおく求安き場取ヨり。遠程を量るヨ用ひ。其法左右何ヨ成とも。正當ヨ開除して量るなり。委くは術中ヨ記すと勤く知るべし

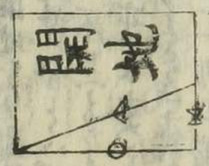
術云下ヨ圖をる徃々初卷ヨ述まおとく。先本座を選び目的を定め。本座ヨり目的までの里町を大槩幾程ならんと先量し。其法ハ空の目づとりを云。其遠近ヨ應じて假ヨ開除の地を求め。開除の作法大畧古法の。ハ三十分一ヨ隨ひ。ハ始計始計とハ本座を選び目的を定め。開地を求る類ひもべく

盤状居る以前の法状云。以下皆是よりなり級なし。の作法
来心く整ひてのち。㊀本座より
盤状方正より居盤南を彼と。盤北状此と。
盤東状左と。盤西状右定規を
とゝく定規ハ見込。見通。再見。見返。いはまをこれ状用ゆべし
盤東より正より目的状見込。
其盤状揺うぬやうより居置
見通の法おりるまゝく。本座の盤状。
をうも揺さぶれ事。毎術おゆ
㊂始計ふく假より右方へ正當より定置
くゆる開地まゝく。竿をゆ
正より間數右開一町を量り。彼方へ
開印状立さわ。今こゝより圖する。求程の



町数二町のゝさハ開除の間数
六間とする事。古法三十分一より
相叶と以どゝ。下より図する所ハ
小畠ろ〻状りく。其纖密ちもし
がく。畧して三分一を用ひ。一町
の開と定む。往々後章より取を
まく。られろ〻ひく。即定規を
見るゆの用捨をべ
盤北より載正より彼印を見通。
開印と定規と。正より合ゝさハ。
若不合ゝさハいくゝびも彼印状
進退せしめて。定規と
正より合ごとくまべ
本座より殘印状立開地へ迂む
本座より殘印を立る事
毎術同し。下是より倣へ㊂開地より
いくゝり定規状盤北より載せ
殘印状再見して盤状方
正小居。殘印と定規と。合ゝさハ
よろし。不合ゝさハ。

大成之圖



此ロハ三也開除一町ノ縮ナリ
此○所ハ四也求程三町ノ縮ナリ
今渾発ヲ以テ又ロヲ一交ニ交ニ
一町ノ矩ト名ケ其矩ヲ以テ○ヲ
量ルニ三交アリ三交ハ三町ナリ
是求程ノ町数ナリ
此△所ハ五也假借トテ假物ナリ
故ニ大成ノ後ハ省ヒテ不用ナリ
凡量知ノ作法毎術此例ニ倣ヒテ
察スヘシ委ハ本文ニ記又初巻
ニ往テ審カニスヘシ

幾度も盤面居直して殘印と正まるべし。尤此再見の法は開地㊃其一再見ゆく。盤面方正に居べき為の。作法のごとく再見をなる盤巽を會ふ必しも盤巽を會ふまるべきさふはいつべし。目的の遠近開除の多少に斜に定規を載て見返。なりて。異なるべし。爰に図をなる取よりくつに目的と定規の本と末と。三所を一平に成やうに。即定規に隨ひて盤面に幾度び共も定規を置直して。目的に合るべし

墨縄引 盤面に墨縄引作法。然るときは鈎股弦三四五の形委しく初巻に記す

盤北は三なり。盤東は四なり。今引渡しなる。盤中の墨は五なり。つまり。

盤面大成

今現なる所の三は開除 右正開一町の縮なり。四は求程の縮なり。五は假借の縮なり。開除は本座より開地までの遠程。求程は本座より目的までの遠程なり。下倣之 其三を開除の間數一町に量り合。量合とは其縮を出而より出而まで。有余も不足もなきやうに渾発をなく量るを云。其法渾発の口縄開さて。此三を一変に変えて。一町の矩とするなり。但渾発を時も。五変に十変にと変べし。其縮口の廣きを十二間の矩と定め十変に変えて。其口を六間の矩と定る事。勿論なり

其矩 其矩とは渾発なり。三を左に四を量に三変 一変一町なり 変なる口縄云。下皆倣之

あり。三変は即三町なり是求程の町數と知るべし

左右斜開方

爰は。左斜開の作法なり。右斜開も是にならって悟るべし

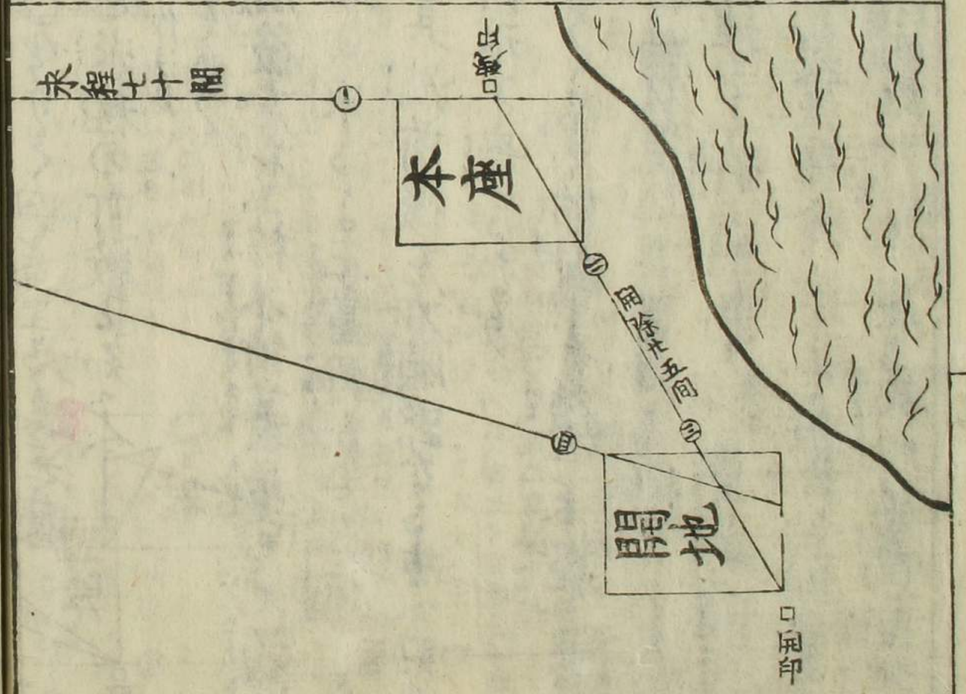
此術は本座の地形前後左右に林木竹叢居宅池沼等のまたの障なりて。開地を求るに正當叶がたき所なり。遠程縄量に用ゆ。其法前後左右順路なる方へ好に斜當に開地を求る量るなり

術云 下に當もれ取をなる云 作法のごとく品々始計して後㊀本座に盤縄方正に居盤西に方に目的を見込。其盤縄不揺やうに居置

㊁ 假に左方の斜後へ定置なる開地まで。斜に間數を二十五間 量りて開印縄立させ。即盤西の中程なる盤良縄會ふして。彼印を斜に見通定規に隨ひて墨縄引 墨縄引作法 前のごとく本座に殘印縄なる㊂ 開地に

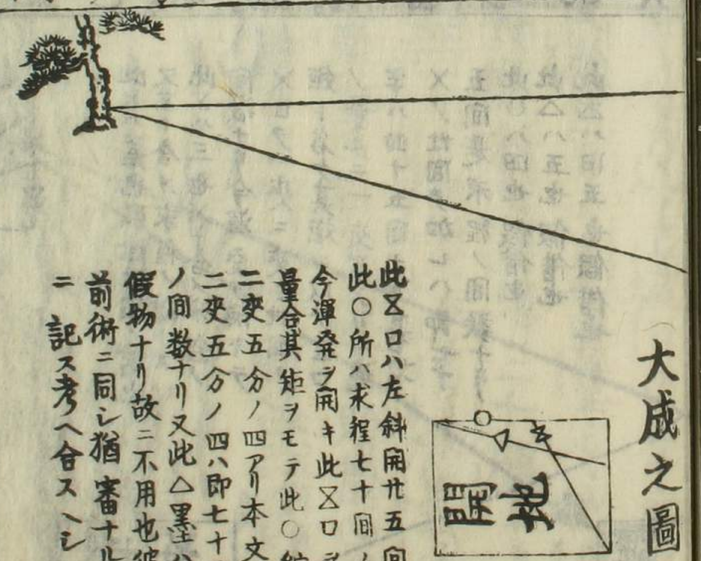
いろり。本座より引する盤面の墨より定規をつけて。幾印より再見して盤より方正より居。盤面の墨と幾印と。一平ニ不合時ハ。幾度も盤より直して。方正ニ居る事。前のごとく

四 其盤北より盤坤を會ふして斜ニ目的より見返。定規ニ隨ひて黒より引。然る時ハ斜ニ三四五の形盤西より盤坤へかきく。斜ニ小く現出する用也。盤北より盤乾へかきく。つくるをハ不用現出。盤面大成を今現る取れ。三ハ開除



左斜用廿五間の縮なり。四ハ求程の縮なり。五ハ假借の縮なり。其三を開除の間數廿五間ニ量合。渾発をもつて。此三を一変ニ変ニ。其口より廿五間の矩と名ける事。前ニ如し。其矩其三より変ニ成る廿五間の矩なり。をもつて四より量ニて二変五分の四なり。五分の四とく。右二十五間の矩を。五分ニ成りて其四分をいふなり。二変五分の四ハ即七十間二変ハ五十間なり。五分の四ハ廿間なり。都合遠程七十間と知なり。是求程本座より目的の遠程の間數と知るべし

大成之圖



此ヌロハ左斜用廿五間ノ縮ナリ
此○所ハ求程七十間ノ縮間ナリ
今渾発ヲ用キ此ヌロヲ廿五間ニ量合其矩ヲモテ此○縮ヲ量ルニ二変五分ノ四アリ本文ニ述ル如ク二変五分ノ四ハ即七十間也是求程ノ間数ナリ又此△墨ハ假借トテ假物ナリ故ニ不用也彼此ノ作法前術ニ同シ猶審ナルヿハ初巻ニ記ス考ヘ合スヘシ

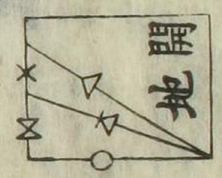
前後當開方

後當開もこれに准じて知るべし

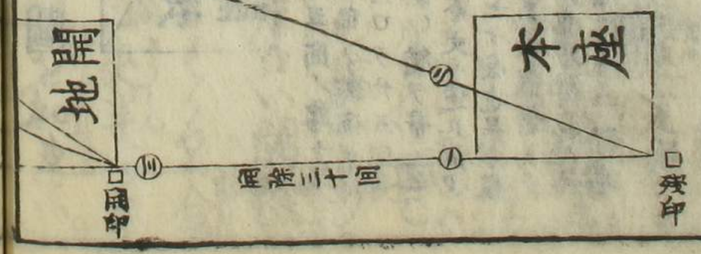
此術ハ本座の地形或ハ畷塘田疇又ハ窖道橋上等すべて左右へ々正しきを斜しきと。開地求がさき取らり遠程を量るに用ゆ。

其法前後何方へ成とも。勝手よろしき方へ正當に進退して開地を求め量るなり。但此術ハ目的の外に假目的を定め其

爰ホハ。前當開の作法なり。



大成之圖

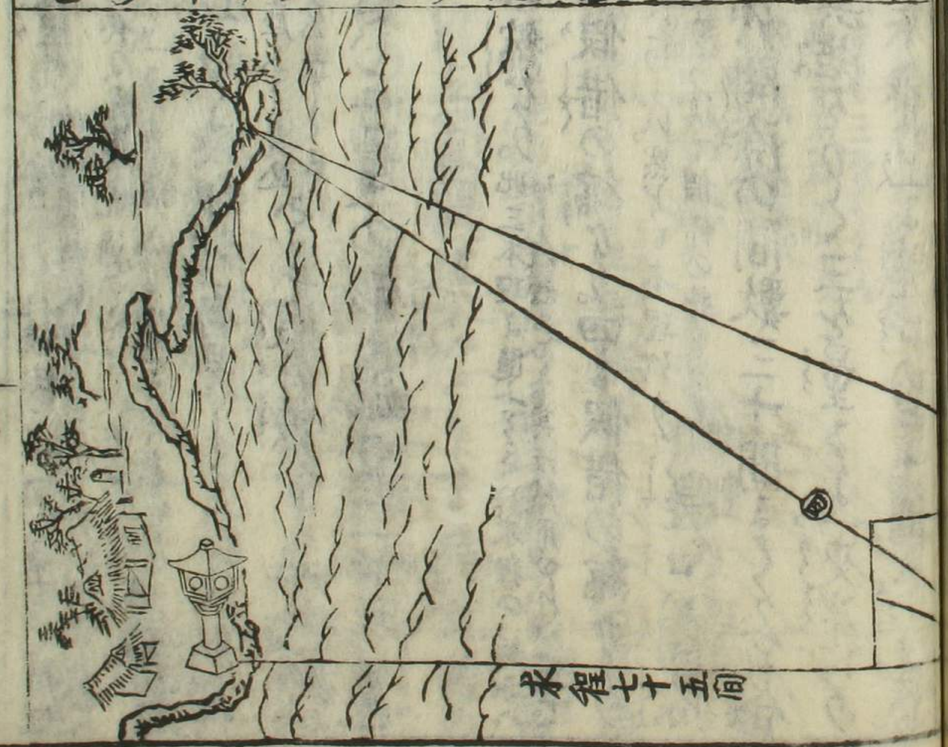


此×ハ差也開除卅間ノ縮也
又⊠ト合メ求程ノ縮トス
此⊠ハ三也×ト合メ求程ノ
間数十リ今渾発ヲ用キテ
×ロヲ一夾ニ夾ミ卅間ノ
矩ト名ケ其矩ヲ以テ⊠ロ
ノ量ルニ一夾半アリ一夾
半ハ四十五間ナリ其上ヘ
×ノ卅間ヲ加レハ即七十
五間是求程ノ間数ナリ
此○ハ四也假借也
此△ハ五也假借也
此□ハ旧五也假借也

両目的の間の間數と種々に進退の間へ移し量るなり其くわしき事ハ術中に記す

術云下に図もとる取をとりく云品々作法のごとく始計して後一本座に盤に方正に居。盤東ゟ正に本目的に見込其盤を揺る居ゟく事。二其盤良に要前のごとし

ゟ定規に斜に載せて。假目的へ見込墨に引夫ゟ正を不外やゟ彼方へ竿を



をもく何程ゆくも間數を量り。今爰ゆくハ。前間三十間を量りて用ひ。此前角の間數もまた三十分一を吉とす。

開印ハ立（此時ニ本座の盤ハ其侭ニ居置。見通の心ニく。盤東より本目的と此間印と定規と。一平ニ見渡くゆるハ弥かくよろし）本座より

殘印ハ立置（三）扨開地ニ迄りて殘印ハ再見ニく盤ハ方正

み極（四）盤良ハ要（寅初本座ゆく見込ゆて假目的ハ見返定規ニ

隨ひく墨ハ引。然もそれさハ三四五の形と別ニ差一口現ハ。

即盤面大成也

今現ハく所の三い求程の縮なり。（此三本理ニ隨ふそさハ。求程の縮ゆハ其術鑿ろゆ故ニ今畧法ハ五い假借の縮なり。四も假借の縮なり。然ども其法ハ用ひれハ還てとらひく三を求程の縮とも。然ども本理ハかてハ四もまと本理をつよとさハ假借ゆハ。差口い開除られハ其術鑿ろゆへニ。畧法ハからひて假借の縮とせり）

前當角三十間の縮なり。其差口ハ開除の間數三十間ニとるとき合渾発をゆく此差口を一変ニ其矩をりく三を量るニ一変半いり変ニ。其口ハ三十間の矩ニと一変半い四十五間なり。其上ニ差口の三十間を加ふい。

都合七十五間なり。是即求程（本座ニ目的の間數なり）の間數なり（扨ハ前間の作法なり。後間の量法ハ。差口ハかりく三をくり。即是ハ求程とす。差口をハ其遠程ニ不加入ろ）

殘子一開方

（爰ゆハ。後ニ種ハ殘ニ法を逐ふ。前ニ種を殘ニ法も推知べし）

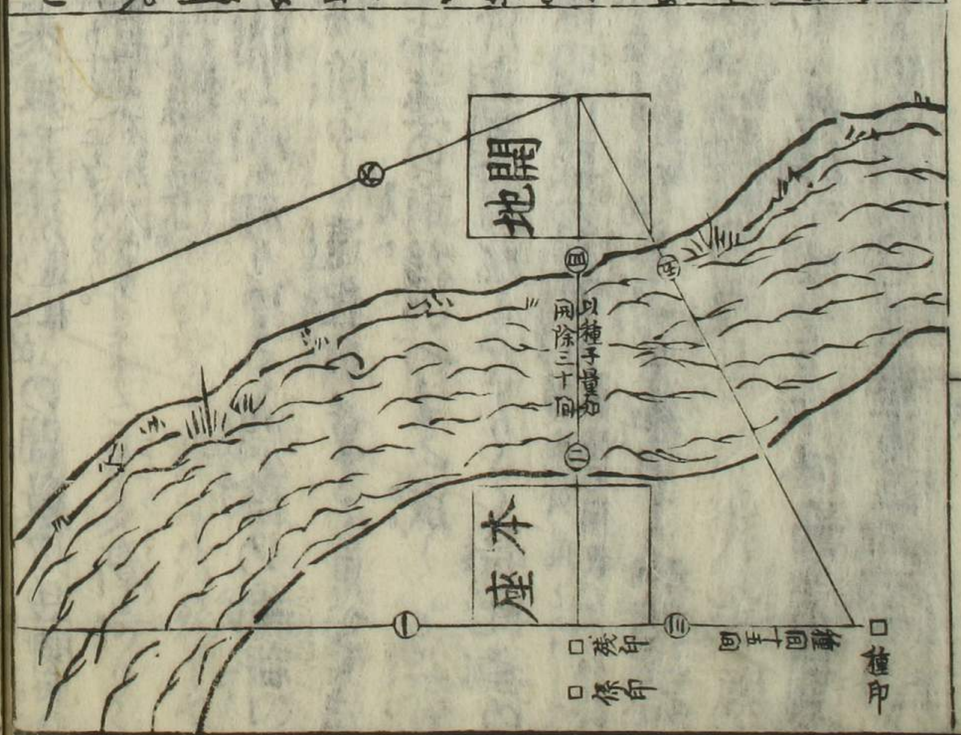
此術ハ本座と開地との間ニ沼ニ河ニいりく。開除の間町幾許もくるとかさ場所ゆく遠程ハ量ニ用ひ其法開除の間數ニ應じて。本座の前後いづれく成とも。正當ニ間數ハ定め。種印ハ立置。開地ニいりくる時。此種の印ハ見返てまた開除の間數ハ量知（種印ハ間とりて開地の間數を知れ）然してのち其求程（本座ニ目的の遠程）を量り知るなり（開除の間ニ沼河ニの

術云（下ニ図ニる取とかく云）作法のごとく始計てのち（一）本座ニ盤ハ方正ニ居盤東より正ニ目的を見込（二）其盤東の正中より

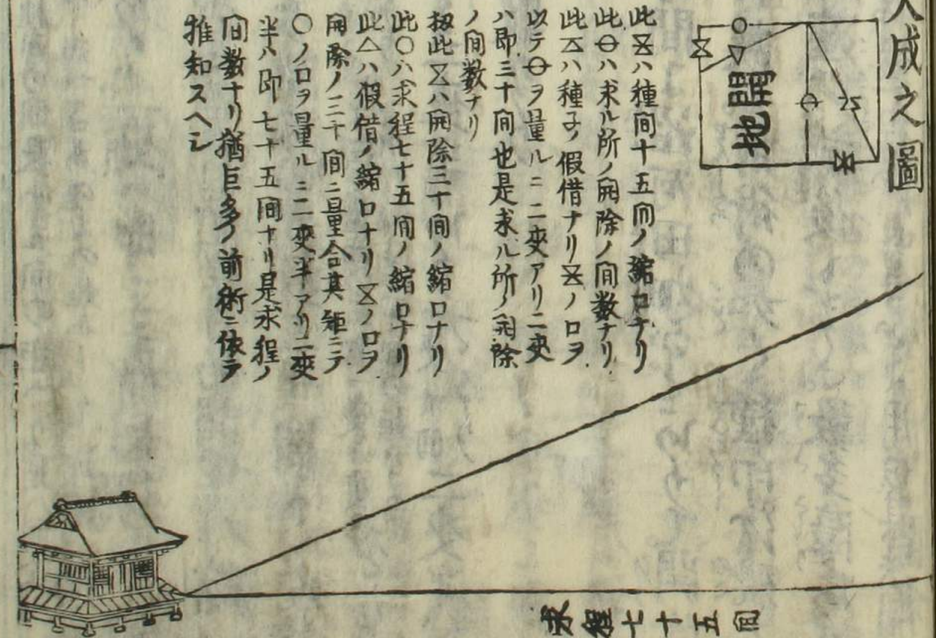
もとこ一下方ゆく正し開地右の方を見通此間地の印ハ。何ゝても其地ゝ有合ゝゝ品物ハ用ヘし。若其品ゝゝハ。本座ゝ係印ハ残るべし

定規ゝ隨ゝ墨を引㊂次ゝ間數ハ定後當間十五間本座の後ゝ正し種印ハ立る也。此種印ハ。本座の前ゝ立ても其術いかゝ。本座ゝ種印ゝゝの間數ハ。大旨間除の間數ハ空地ゝつかりて。半分ゝ又ゝ三分一ゝゝハ用る事ゝゝゝと云

本座ゝ此印をも亦正し見込。然してゝ残印を立間地の印ゝゝハ係印をゝ立べし㊃開地ゝ移り。盤中ゝ引ゝる墨ゝ定規を當残印ハ再見して盤ハ居㊄其残印ハ再見して盤西の墨乃嵩を要して種印ハ見返墨ハ引㊅又同取ハ要ゝ目的ハ見返墨ハ引然る時ハ盤東と盤西と上下両取三四五のかゝりハ盤面大成を今現ゝゝ所の。盤ゝの三四五ハ本座開地種印の縮形なり。其三を種間本座と種印の間の間數



大成之圖



此ㄨハ種間十五間ノ縮ロナリ
此⊖ハ求ル所ノ間除ノ間數ナリ
此ㄨハ種子ノ假借ナリㄨノロヲ以テ⊖ヲ量ルニ二変アリ二変ハ即三十間也是求ル所ノ間除ノ間數ナリ
扨此ㄨハ間除三十間ノ縮ロナリ
此○ハ求程七十五間ノ縮ロナリ
此△ハ假借ノ縮ロナリㄨノロヲ間除ノ三十間ニ量合其種ニテ○ノロヲ量ルニ二変半アリ二変半ハ即七十五間ナリ是求程ノ間數ナリ猶巨多ノ前術ニ依テ推知スヘシ

の間數十五間と量今其矩（此矩。種間の間數十五間の矩なり。是ハ開除の間を知へき為のみの矩ふして。別用あるし）をもつて。其四に量るに二変なり。二変ハ即三十間是開除の間數なり（此三十間とは。本場の三の縮口と名をて量合なり）盤西の三四五六本座目的開地の縮形なり。其三に種の為に量知るる。開除の間數三十間に合（三の縮口長短いろいろと有ると。種の為に量得るる間數にてもを合をなり）其矩（盤西の三に一変に変をもつて。三十間の矩なり）を量るに二変半なり（一変ハ十間なり）二変半ハ即其四（盤西に現るる四ハを量るに二変半なり）七十五間なり是求程の間數なり

正當開方

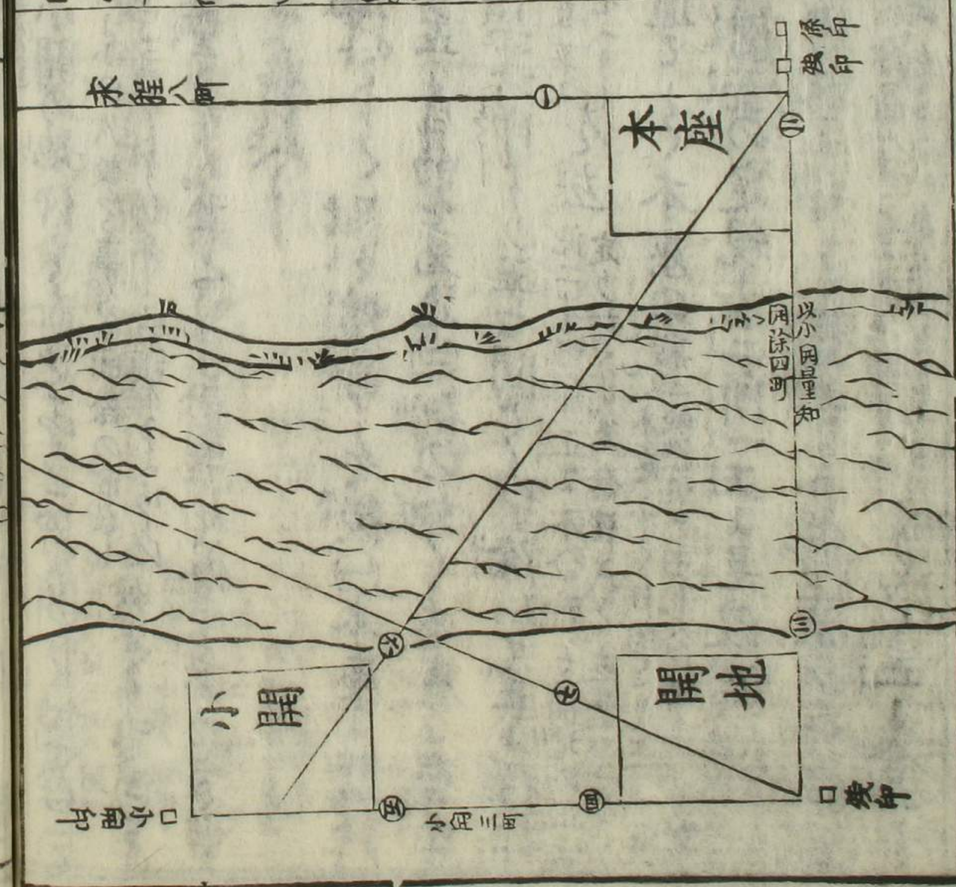
此術ハ本座と開地との間に沼河田畑などなりて。開除の間數幾許を量かたき故に。前術の如く種印に殘して開除べきとすれども。本座の前後もまた。數多障なりて其事成かたき事なり。遠程に量るに用ひ其法開地の外に。又正當に小開の地に。もまた如く開除の間數に量り。（別に小開に設る事。多く開除の間數を量る為のみなり。外に子細有るなれ）然るのち其遠程に求め量るなり。其くりき事を術中にもるを猶又圖を按して考へべし

術云（下に図をもて取をのく云）作法ハ。ごとく品々始計して後（一）本座に盤に方正に居。盤西に正に目的を見込（三）例の如く本座に殘印（此殘印の立つるもを。其印より五七間を除ひて。正に係印ハ。ま心毎術におのしを。殘印と係印と間の間數。乗に定りがたし。尤念に入て立置べきなり）を立。（此二本の印正に不合時々。開地の正當なりがたし。猶多少の心得有へし）を扨開地の印に見通ごとく。本座の盤（本座に目的を見込盤に。少しも不揺して居置）に。彼二本の印と盤面の定規と三所一正に見渡（此見渡印見通のごとくなり）（三）開地にいたり盤に假に居く。盤北より彼一本の印と三乗一正に再見し。（二本の印に一本に見るもを見るもを。即正にもなるなり）よく正に合せく

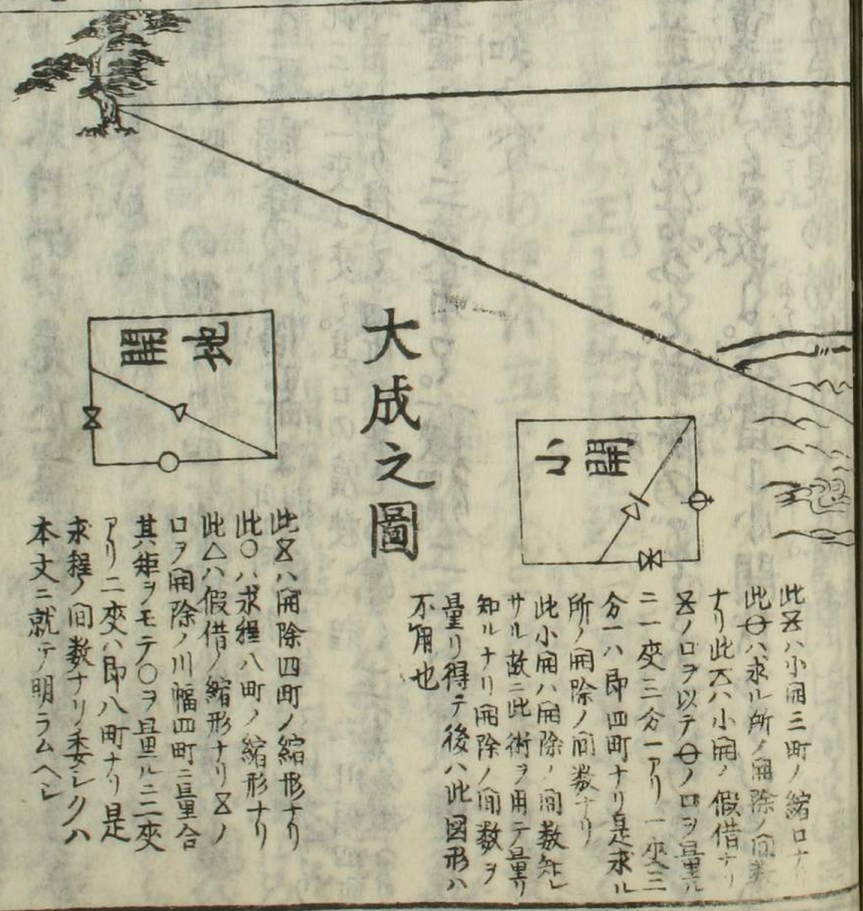
盤状方正ニ極㊃然シテ其盤の彼方正面ニ小開の地状求ム。前當間三十間印を立ク間地の印ヨリ小間の印マデ間縄間竿を用ひて何かどくも間数を定むべし。大脉其間数八本間の半分ニ三分一程を其法トスベシ開地ヨリ正ニ是を見通。

㊄扨小開の地ニ迄リ盤状居ク開地印を再見ル間地印ハ残印として再見を

㊅又盤面ニ定規を



載て本座の残印状見返墨状引。爰ニおのく種の三四五の形現ル。三ハ小開の縮なり。四ハ本開の縮なり。此三を小開の三町ニ量合其矩ト間の町数三町の矩おのく四状量ル一夾三分一あり。一夾ハ三町ニ三分一ハ一町ニ即開除の川幅四町と量知。此四町を後の三量知。此四町を後の三縮口ニおのく



此ヲハ小間三町ノ縮口ナリ此㊀ハ求ル所ノ間除ノ間数ナリ此ヲハ小間ノ假借ナリヲノロヲ以テ㊀ノロヲ量ル二一夾三分一アリ一夾三分一ハ即四町ナリ是求ル所ノ間除ノ間数ナリ此小間ハ間除ノ間数ヲ知サル故ニ此術ヲ用テ量リ知ルナリ間除ノ間数ヲ量リ得テ後ハ此図形ハ不用也

此ヲハ間除四町ノ縮形ナリ此〇ハ求程ハ町ノ縮形ナリ此△ハ假借ノ縮形ナリヲノロヲ間除ノ川幅四町ニ量合其矩ヲモテ〇ヲ量ル二夾アリ二夾ハ即八町ナリ是求程ノ間数ナリ委シクハ本文ニ就テ明ラムヘシ

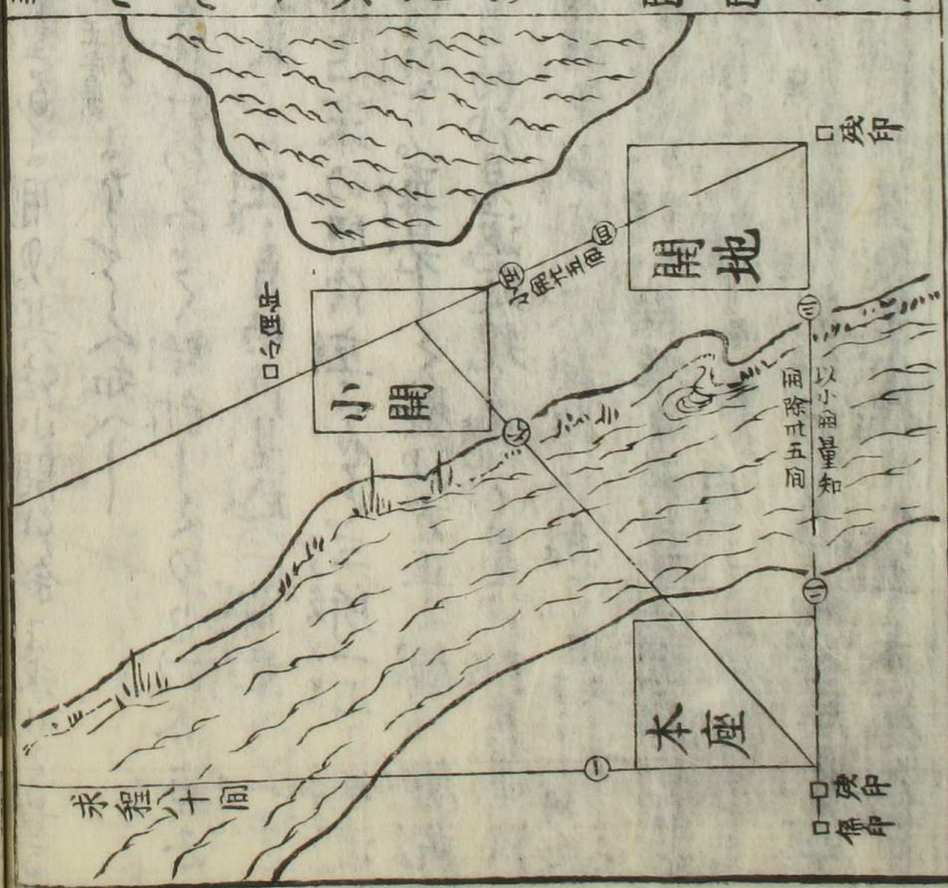
㊐然して後開地に立帰り。初のごとく盤に方正に居。定規に斜に載せて盤良より本目的に見返墨を引。然ばそのときい三四五の形現ず。盤面大成を今現ずる所の。三八開除（左正角四町）の縮なり。四八求程の縮なり。五八假借の縮なり。其三を開除の川幅四町に（此四町八種の為に小角一〇〇別に〇〇〇知る町数なり）量合（渾発ずること此三ずつ一変に変ず。其口の廣狭いろ程成とす。種の四ふく量り得る四町の矩となげく）其矩（川幅四町の矩）をもちいて其四ずつ量るに二変有り。一変四町なり二変は即八町なり。是求程の間数と知るべし

正斜兩開方

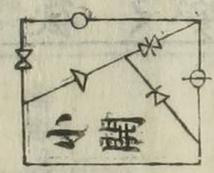
此術は本座の前後左右のごとく障りおく。開除の間数量がたき故に。正當に小開ずるひとすじ。ぞと。其地ゆきたく彼是の妨にりく。正當開叶ひがごと聚り。遠程に量るに用ゆ。其法小開ずに斜に求めて量るなり。大略前術（正當角方）によるべし知べ

術云（下に図をれ聚をりくに云）品々作法のごとく始計しくのち㊀本座に盤に方正に居。盤東より正に目的に見込㊁前章ふに如く其所に残印と係印と二本の印に立させて。三所一正に見渡。是見通の㊂扱開地に迄り。再見して盤に方正に極㊃盤乾を要ふして斜に本目的に見返。定規に隨て墨に引。其墨に條理ふして彼方へ間數を定。斜に小開印に立させ（正に小角を求る事よろしといへども。今其全地にさげ故に。不得止して此墨に隨ひ。斜を用ゆ）開地に残印を立㊄即小開の地にいたり。開地にて引渡して開地の殘印（此殘印は。本座より見通して。今殘印とする）を再見して。盤を正に居又此示して。本目的を見返すに。盤面いよく方正にふる㊅其盤を不搖して直に本座の残印

を見返定規に隨て墨筋引。然るときハ盤の南北兩所に三四五の形ちのごとき盤面大成を今現る所の盤北の三四五ハ本座開地小開の縮形なり。其三を小開の間數二十五間に量合其矩を其四を量るに一変と五分の二あり。一変ハ廿五間



五分二ハ十間なり 即開除の間數三十五間と量知。此三十五間を後の三の縮口よりなげく扨亦盤南の三を開除乃川幅廿五間に量合量合の作法往々前術に述る所に准して知べし其矩間除の川幅廿五間の矩 ふく四を量るに二変と七分の二あり。二変ハ七十間七分二ハ十間なり二変七分二ハ。即八十間なり。是求程の間數なり



大成之圖

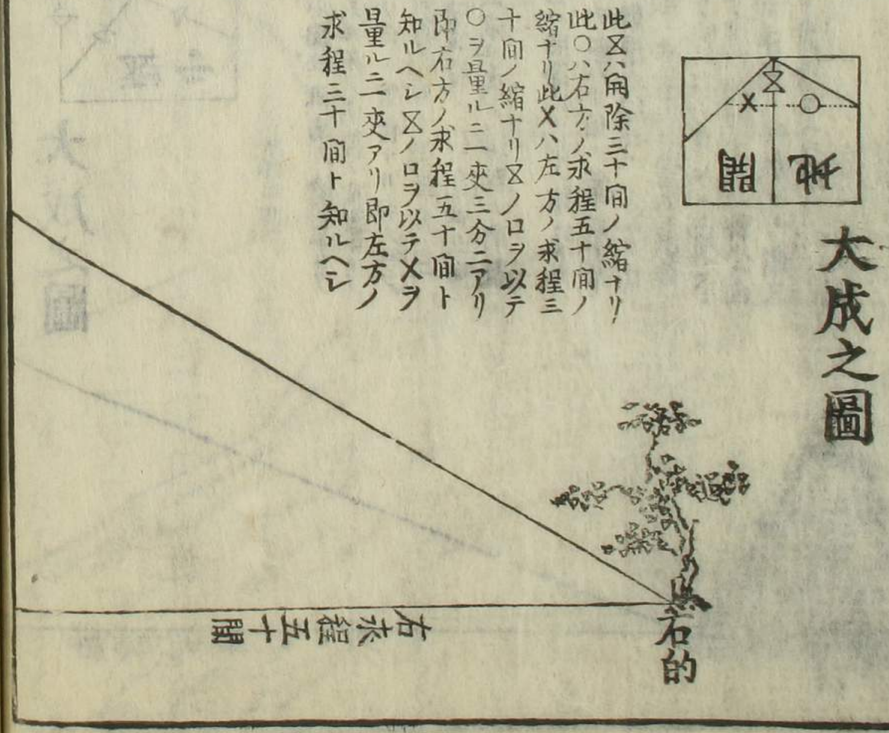
此ヌハ小間廿五間ノ縮ロナリ
此ロハ求ル所ノ間除ノ間數ナリ
此ヌハ小間ノ假借ナリヌノロヲ以テロヲ量ルニ一変五分ノ二有リ一変五分ノ二ハ即廿五間ナリ是求ル所ノ間除ノ間數ナリ
扨此ヌハ間除廿五間ノ縮ロナリ
此ロハ求程八十間ノ縮ロナリ
此ハハ假借ノ縮ロナリヌノロヲ間除ノ廿五間ニ量合其矩ヲ以テロノロヲ量ルニ二変七分ノニアリ二変七分二ハ即八十間ナリ是求程ノ間數ナリ猶又本文ニ考合スヘシ

兩知一開方

爰ニハ左右を量る法なり。

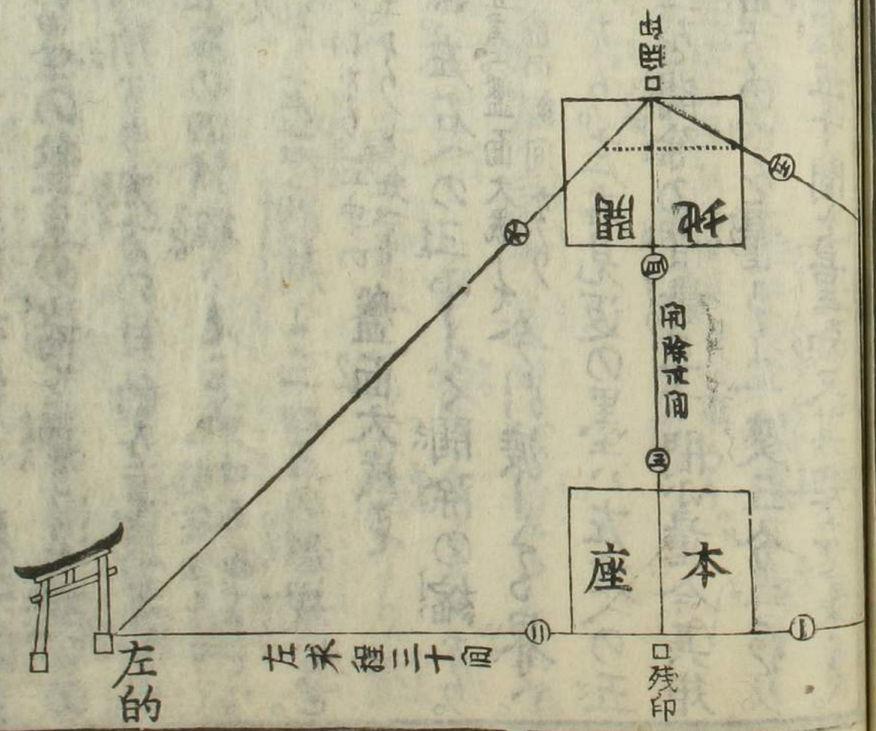
前後を量るも其術々なり

此術ハ今此所ようして或い左右の遠程を量或い前後の遠程を知むと欲するに。一術を以て兩旁の求程を。一同に量知る小用也。其法本座を正中小數く。左右に遠く前後小遠く。心に思ひ物を量るなり。猶又圖を按



此図ハ角除三十間ノ縮ナリ
此○ハ右方ノ求程五十間ノ縮ナリ此×ハ左方ノ求程三十間ノ縮ナリ図ノロヲ以テ○ヲ量ルニ二変三分二アリ即右方ノ求程五十間ト知ルヘシ図ノロヲ以テ×ヲ量ルニ二変アリ即左方ノ求程三十間ト知ルヘシ

術云下に図する取をかく云まず作法のおもむき品々始計てのち（一）本座に盤に横小方正に居。盤南を右に盤北を左に盤東を彼に盤西を此にうと盤西より右方の目的を正に見込（二）同所より左方の目的を正に見込（三）扨開除の間數前當角間三十間を定く。彼へ正に開印に立さ也然して盤の東西の正中に正横に墨に引渡し此墨に定規を當て。



開印を見通。本座より殘印を立置㊃開地よりいろ〳〵。殘印を再見して盤を正より居㊄正中の墨の盤東の崗を要して右方の目的を見返墨を引。

㊅然して剸盤法をかりくぢ。左右の四を極るとさい。剸盤法をかく四を極るとい。

左右の見返の墨を図のごとく横より界を引るべし。切ちぢめくるべきこゝろ左右兩所より三四五の形現ハる。左右とりる。今引渡しゝる界ハ四なり。正中の墨ハ三なり。左右見返の墨ハ五なりと知べし。盤面大成を

今現るゝ所の正中の墨ハ。左右への三小〳〵開除の縮なり。盤の正中より家初引ワ〳〵る竪墨。盤面大成して今引渡〳〵る界ハ。のゝ。左右の三となる。これ即開除の縮間なり

左右への四小して求程の縮なり。左右見返の墨ハ。左右への五小〳〵假借の縮なり。其ハ三を開除の間數三十間小量今。其矩開除の間數三十間の矩をもちいくまげ右方の四を量るより一変三分二なり。一変ハ三十間なり即右方の遠程五十間と量知。又其矩を量知。

右方の四を量るより一変なり。一変ハ三十間なり是開除三十間の矩なり左方の四を量るより。爰ハおのゝ左右の求程俱より知べし

左方の遠程三十間なり。爰ハおのゝ左右の求程俱より知べし

をもて剸盤法をかくすの術ハ。充盤法を用ひて。其理同事なり。爰ハ書中混もゝ故より其事を省くべし〳〵或問ハ

一知雙開方

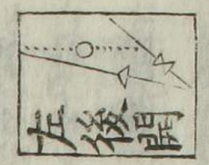
爰ハ兩斜角の法なり。兩正角も准して知るべし

此術ハ本座の狹小なる取り遠町遠里を量るより用㊆。

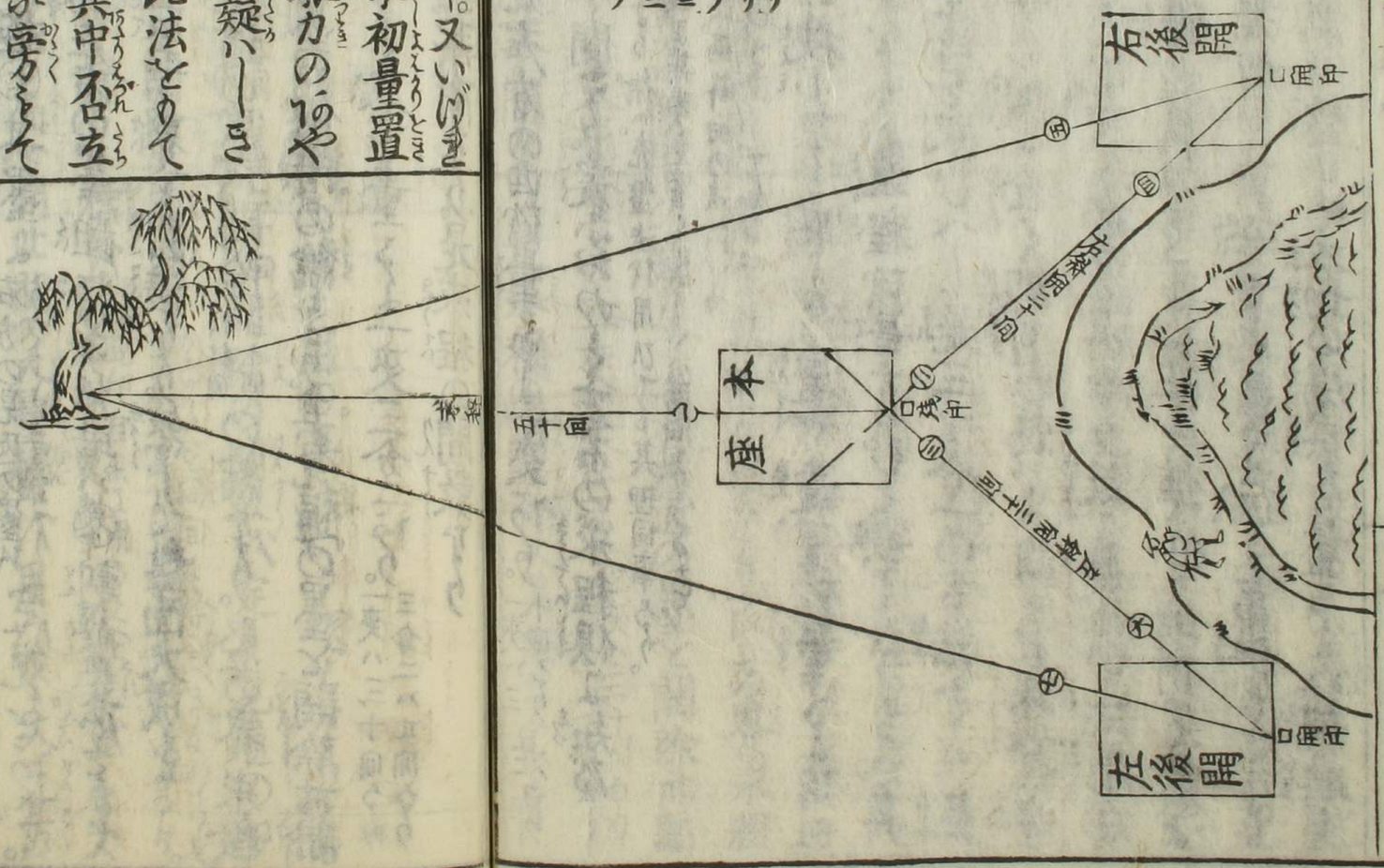
をもて一里ハをもて遠程を量らんと欲するとき。其開除の地徑三町を求むべし。是三十分一の古法なり。然ども見渡三町の間より全く眼目のとゝかぬ場所ハ平陸易地といへども尤すくれさかのなり。故より狹小の地形より

して莫大の遠程を量るより是を佳とす。此術ハ左右より開除を求め。其符節を合せて量る故より。事術をこしも差異なる事なし。惣じて大切の場所を量るより。何時も

大成之圖



此Xハ開除三十間ノ縮ナリ
此○ハ未程五十間ノ縮ナリ
此△ハ假信ノ縮ナリ此Xノ
斜ロヲモツテ此○ヲ量ルニ
一夾三分二アリ一夾三分二
ハ即五十間ナリ是未程ノ
間數ナリト知ルベシ



此法然るべし。又いにしへの術ゆくえ。家初量置るる法とし眼力のいやまり有哉と疑ハしき事等いのべば。此法をもて改正すべし。其中否左どころふ顕ふ旁をて良法と謂べし

術云下ノ図ニ見ヘカラズ云まづ盤の正中より盤南より盤北へ正照立より引渡りて墨糸引きて（一）作法のごとく本座より盤糸方正に居。其盤中の墨に定規糸當て正に目的に見込（二）斜に右後へ間數右斜間三十間を定。開印を立させて。盤中の墨の盤北の端を要ふして。盤東より是を見通

㊂斜に左後へ右後と同間に開印を立て盤中の墨の盤北の端を要ふ〻く盤西より是を見通㊃扨右方の開地に遷て。残印を再見して盤を極㊄其再見の墨と端を要ふ〻く定規を行て本目的を見返墨を引。然して今見返る盤西の墨を毫釐も違いなきに盤東に摸し。㊅左方の開地に移り。残印と再見して盤を極㊆其墨に右方の見返の墨を定規を行て。本目的を見返扨左右の墨齟齬の時は㊇剳盤法を力て見返の墨の盤南の端より見通の墨へ正取立て界を引渡なり。然して盤面大成を今現る〻所の見通の墨は開除（両斜角三十間）の縮なり。竪の界求程の縮なり。見返の墨は假借の縮なり。其見通の墨と開除五間に量合。其矩をとり〻く界と量るに一夾三分二なり。（一夾は三十間なり三分二は九間なり）一夾三分二は即五十間なり。是求程の間数なり

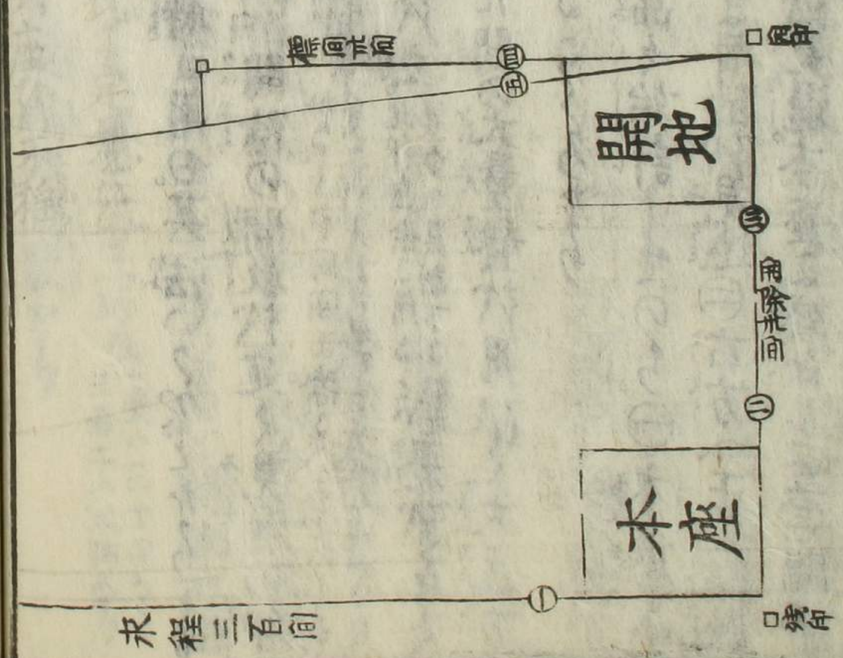
量盤術遠近法下

神速大盤方

此術は目的遠く開地少き時に用ひる。其法いかんとなれども五間七間より十間十五間乃至二十間三十間まで其地よりて角くなり開除の間数を定見通の印を立其彼方へも開除の同間に掛るべき同間に除るべきよりくいなり。間数を定正に合せく標を立。（此印自余に用るといへども異なり。其制下に記す）是を量るなり。畢竟方面十間廿間の大量盤を用ひく。大元方術云所を図して云作法のおとく品々始計してのち㊀本座小盤を方正に居。盤東より正に目的を見込㊁右方へ正に間数を定（右正角三十間）開地を求くこれを見通。本座に残印を立㊂開地に移り残印を再見して盤を方正に極㊃其盤の彼方へ開除の

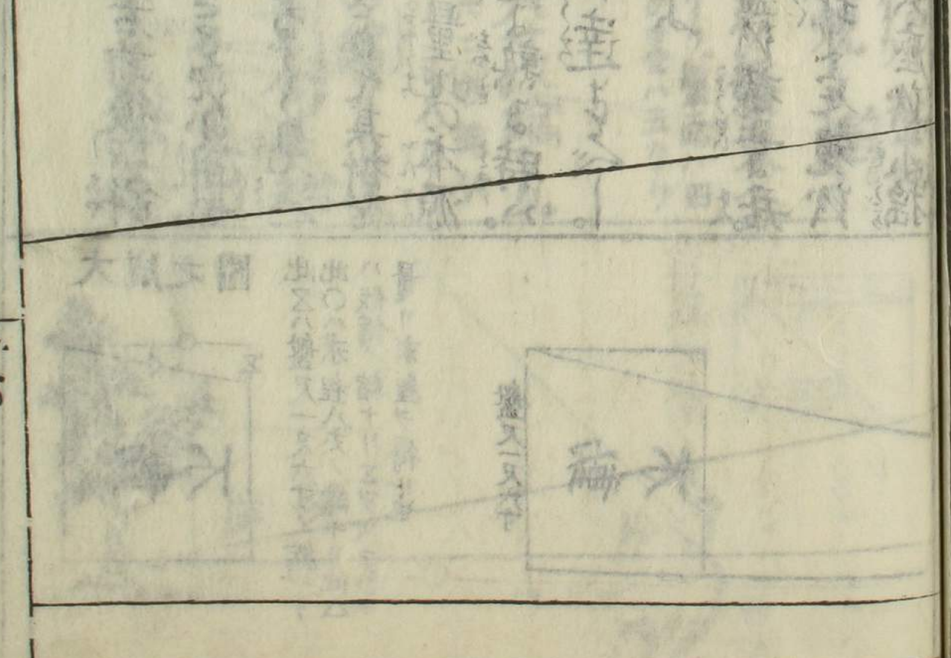
同間ヨ間数ヲ定開印と正ヨ成ごとく標ヲ立此印角印と正を外さぬやうよ。随分念を入て立べし。正當いさゝか違ふとくさい大差と成るゆ。標の制作もまと尋常と異ろ。檀をもく作る。方面二寸竪長二尺二三寸なるを但地ヨ入ればくい外なり。盤の物尺をかく此長尺の節そと。下ヨ石突有り。項より五分去く定規を徹を小竅巧り。稲作用宜きゝ任べし

○盤乾ゆ小斜ヨ見返時ヨ。彼標ヨ徹し置くゆる定規の先ヲ差出して。盤面の定規と目的と彼標ヨ徹ゆる定規の先と。三物一正ヨ見渡なり。然ゆとゝさい二四五の形



現ゆ。盤面大成を此作法い右ヨ倣ふく。方三十間の大盤ふく。大元方と勤るゝゆ持なり

今現ゆく所の標ゆ差出と定規ハ三なり。開地ゆ標まくの地径ハ四なり。盤面の定規ゆ標の定規の先まぐい五なり。其三ヲ開除の間数ハ間ヨ量合三の定規と一夾ヨ夾ゝ。三十間の矩と名ゆゆ其矩ヲとく四ヲゆゆふ十夾ゆり。一夾三十間十夾い即三百間なり。これ求程の間数なり

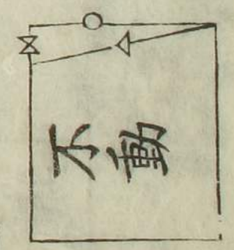


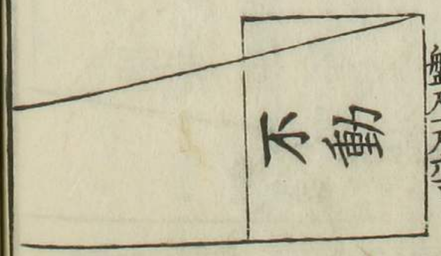
規矩大元方

此術ハ四方障礙多くして。左右前後四斜の開除とゆゑ叶ひがたくさく用ひ。其法本座ゆ不去して。居ながら見込見通の事ゆ勤め。盤尺をとりて其術を竭さとり。抑此法此理ハ量地の本源量盤の玄微なり。故ゆ此ゆ熟る時ハ。其他ハ不學といへども自達さとべし。此謂ゆ號て大元方とゆ

術云 下ゆ図する所の本座ゆ盤ゆ横平ゆ居。盤南を右とし。盤北を左とし。盤東を彼とし。盤西を此とし。盤北ゆ定規ゆ載て正ゆ目的ゆ見込。次ゆ其座ゆ不強

大成之圖





此Xハ盤尺一尺六寸ノ縮ナリ
此○ハ求程八丈ノ縮ナリ此△ハ假借ノ縮ナリXヲツヽテ○ヲ量リ求程ヲ得ル也

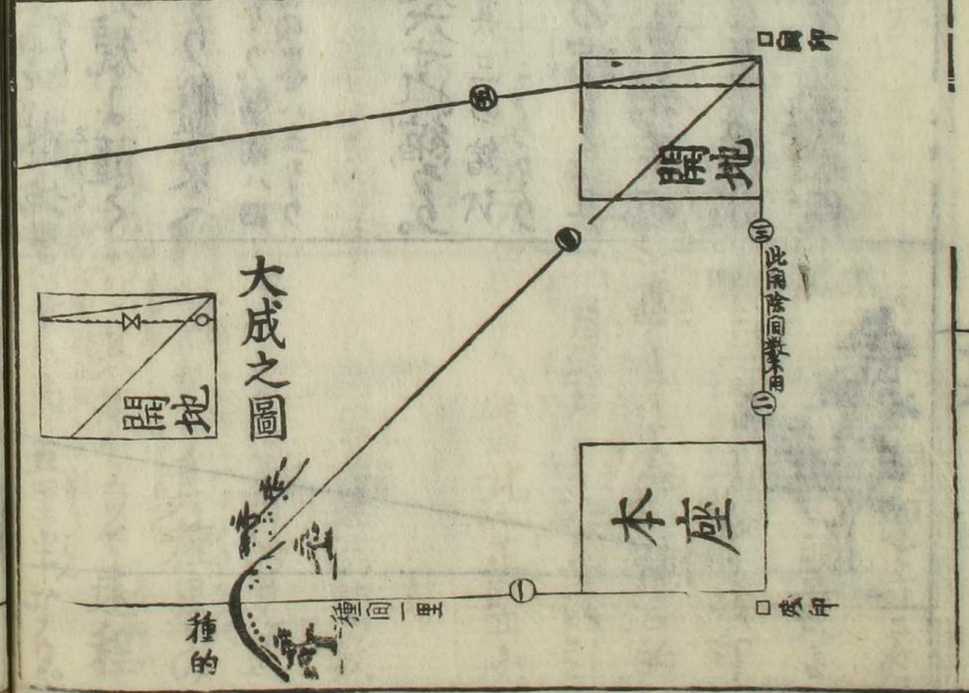
ゆ。盤尺の術なり。即盤西を開除ゆ用て其座を動ぐるなり。盤坤を要ふ。斜ゆ目的ゆ見返。定規ゆ隨く墨ゆ引。然る時ハ盤南より盤東へ加をく。三四五の形盤東ハ三なり。盤南ハ四なり。斜當の墨ハ五なり。ゆ。盤面大成さと

今現ゆ所の。三ハ開除一尺六寸ゆ縮る。盤の長尺たとへバ一尺六寸ゆ。ハ其三の縮ゆ一尺六寸の口と名る事。尋常同一ころなり四ハ求程の縮なり。五ハ假借の縮なり。其三ゆ開除の盤尺一尺六寸ゆ量合。其矩盤尺一尺六寸の矩をもて。四を量る五十夾有一夾ハ一尺六寸宛なり五十夾ハ即八丈なり。是求程の間數と知るべし

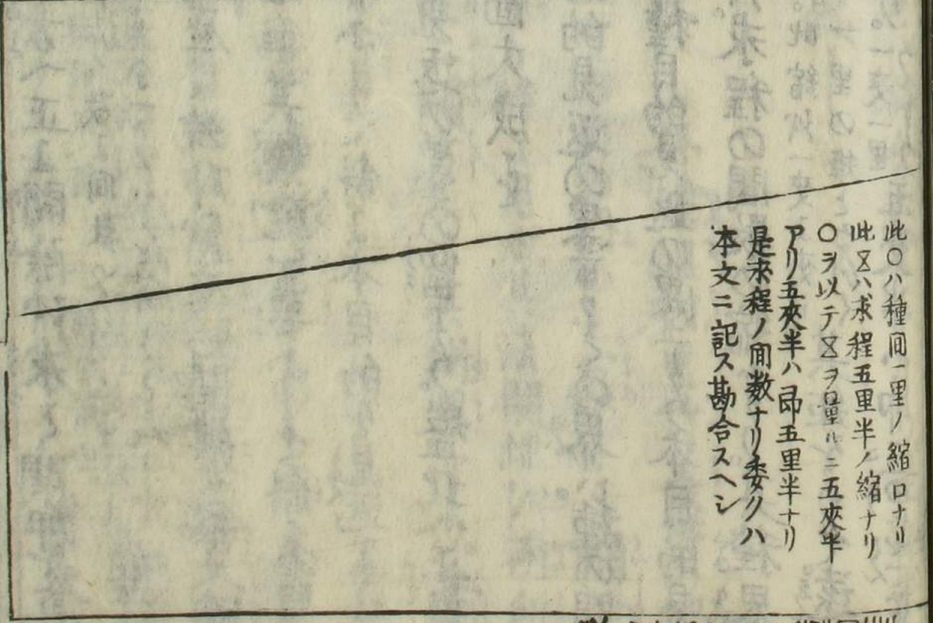
幽遠大量方

此術ハ郡郷を累る州國を隔てく十里廿里乃至廿里五十里の遠程を量るを用其法種の小目的を設き此間數を求程の矩として量知るなり。くはしくハ廿里の遠程を量るを用ハ其間除一里ならぐき事古法より叶えりとゝいえども。一里の間數全眼力のちからを稀ならんべし。此故より種の小目的をもよりて其間數を即間除となして求程を量知さなり是を大量方と號く

術云（下より図まで所をとりく云）先本座より



空眼を以て山頂より目的を定。遠里を量るときは必ずしも目的ハ山頂を用ひざるべし。次本目的の此方少て山林なりとも堂塔なりとも。里町の知れたる種目的を定（種目的の間數。兼て丈知ハ。其期より臨く。まづ種の間數を量るなり。今其遠程假より一里と定ひ。次より左右いつまへ成とも兩の目的の見へ安き方へ開地を定め。（下より図まで右方へ用くるり如此より始計）して後（一）本座より盤を方正より居。盤東より種の目的を加きく本目的を正より見込其



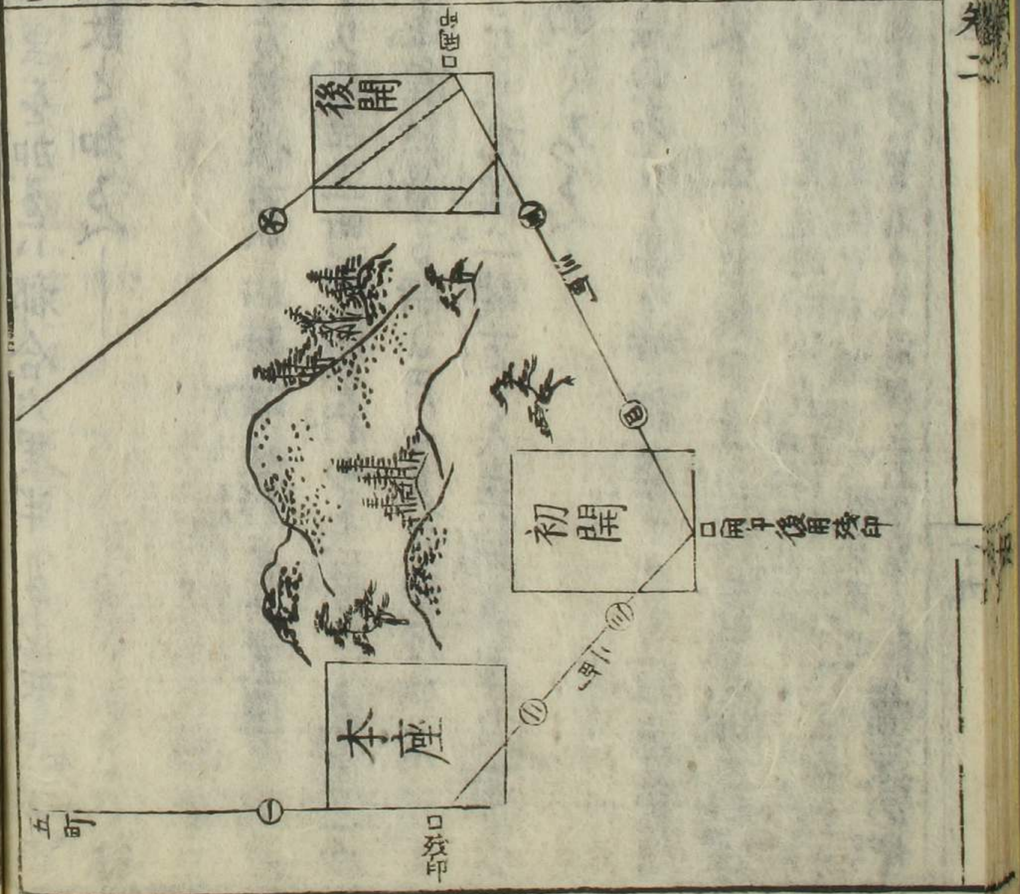
盤に不搖やうに居置㊂右方へ正に開除に求る開印と立る。
此開地の間数ハ。求程の種ふい不用なり。故に間数いろかとまくも
くくーうくべ。但種目的まくくの遠程三十分一ぐらるを節ともべー　盤北に
定規に載く是に見通本座に残印に立㊂開地に移り残印
を再見して盤に方正に居㊃其盤乾と要ふして斜に種目的
を見返墨に引㊄同所を要ふして斜に本目的を見返墨に引
㊀扨剗盤法をもく。盤南の見返の墨の留より。盤北へ正竪ふ
界を引渡る。然る時ハ盤面大成る
今現に所の。盤北より種目的見返の墨まくくの界ハ。種の間数
本座より種目的まくくの遠程より一里の口なり。種目的見返の墨より本目的見返
の墨ゑ盤南の留まくくの界ハ。求程の間数の縮なり。其種界の
縮口に。種の里町一里に量合。此縮に一変に変し一里の矩とるく其矩をもて遠程
の界を量るふ五変半なり。一変一里なり五変半ハ即五里半なり。

其上に種の間数一里を加るハ都合六里半なり。是即求程
本座より本目的まくくの遠程なり の間数と知るべー

二地重開方

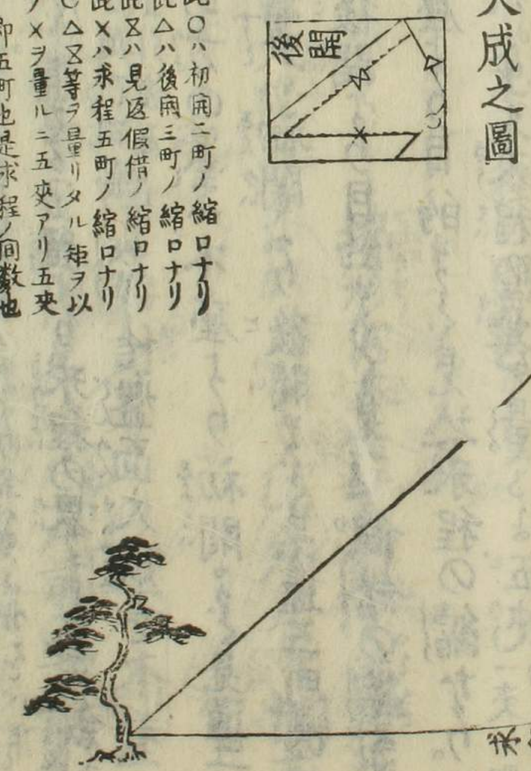
此術ハ。本座の左右前後或いハ山林峻岨村里竹葦等の地そ。
一町二町の間より。乃至三町四町の内ゑと。宜ーく開除の
場なき事より。遠程に量る時に用る。其法開地に兩所に
累る求て量るなり。尤彼二開方と其術異なり。委くハ
術中に記る。勤くもるべー
術云 下に図る 事に於ゆく云 作法のごく品々始計畢てのち㊀本座に
盤に方正に居。盤東より正に目的に見込㊁右後の方へ斜ふ
間町と定 斜開 二町 開地を求て見通の印に立る開除の法いろとそも正に
前後左右ゆくりおはき故に。是非に不論ーて斜を用る。爰ふくハ
もくく斜開にもるゆれものハ皆もるり。前後これるるえ 盤東の中

程より此一下の方ゆく。斜に初開の地に見通。定規ホ
をさゝげて墨に引。
本座に殘印に立。
㊂開地に移て殘印
を再見して盤に
方正に居㊃右前へ
斜に間町を定め。斜角三町
後開の地に求め。
見通の印を立さ。
初開の墨に盤北の



出を要ホして。彼
見通の印 後開の地の開印をよ
を見通。其定規に
隨ひて墨を引㊄
後開の地にいたり。
初開の印を殘印ホ
し。 初開の見通の印 爰にて殘印 を
是に再見して。盤
を方正に極㊅今
再見して後開の
墨の盤西の出を
要ホして本目的を

大成之圖



此〇ハ初開二町ノ縮ロナリ
此△ハ後開三町ノ縮ロナリ
此又ハ見返假借ノ縮ロナリ
此×ハ求程五町ノ縮ロナリ
〇△又等ヲ量リタル矩ヲ以
テ×ヲ量ルニ五夾アリ五夾
ハ即五町也是求程ノ間數也
其作法ノ書ナルヿ本文ニ記
ルス考ヘシ

見返墨ヲ引㊀扨盤法ハ先見返の墨乃盤ヲ南の留より。初開の見通の墨まで。南北へ正竪ニ界ヲ引渡此界即求程の縮となるなり其界と墨との會より盤北の要まで。初開の墨と其間數初開の間數也二町ニ量合。會より要まで二夾ニ合セ其渾発の口ヲ一町の矩と名く其矩より後開の墨ヲ其間數後開の間數也三町量取量取ハ以ハ量合と量取ハ。其こゝ違つ混ぐ〳〵し。其こゝろ留より求程の界まで。又斜ハ界を引此界ハ見返の墨ニ随ひ曲節ハ渡ル〳〵ハ斜平ニ引渡ル〳〵ハ渾発ニ引渡ル〳〵ハ然して盤面大成ル今現ハ所の盤艮の方の墨い。本座より初開まで見通二町の縮なり。盤乾の方の墨い初開より後開まで見通三町の縮なり。盤坤の方の界ハ後開より目的まで見返假借の縮なり。盤東の方の界い本座より目的まで見込求程の縮なり。扨初の矩初開後開をこゝ渾発の口ハ求程の界を量ニ五夾一夾一町なり

ある。五夾い即五町なり。是求程の間數なり

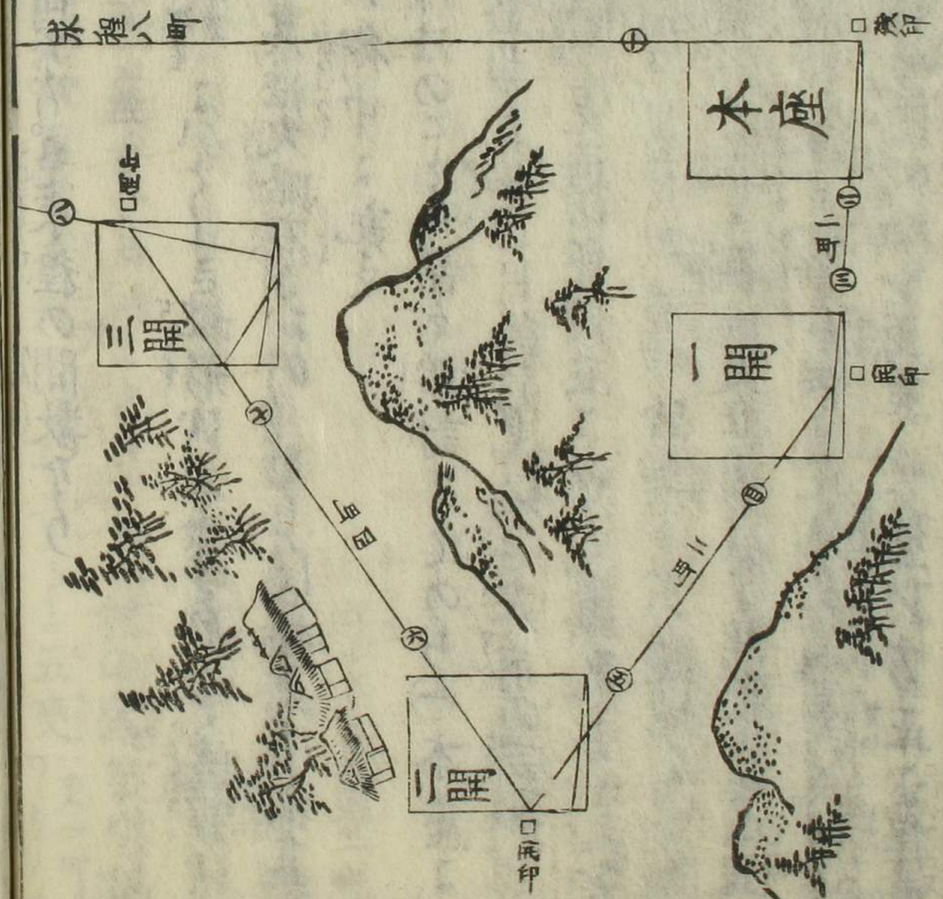
三地重開方

此術も前術二地重開方ニ引き地形ヲ本座ニ移し遠程ヲ量ニ用ゆ。其法大略右ニおなじ。たゞし知るべし猶其審なる事ハ術中ニ記す

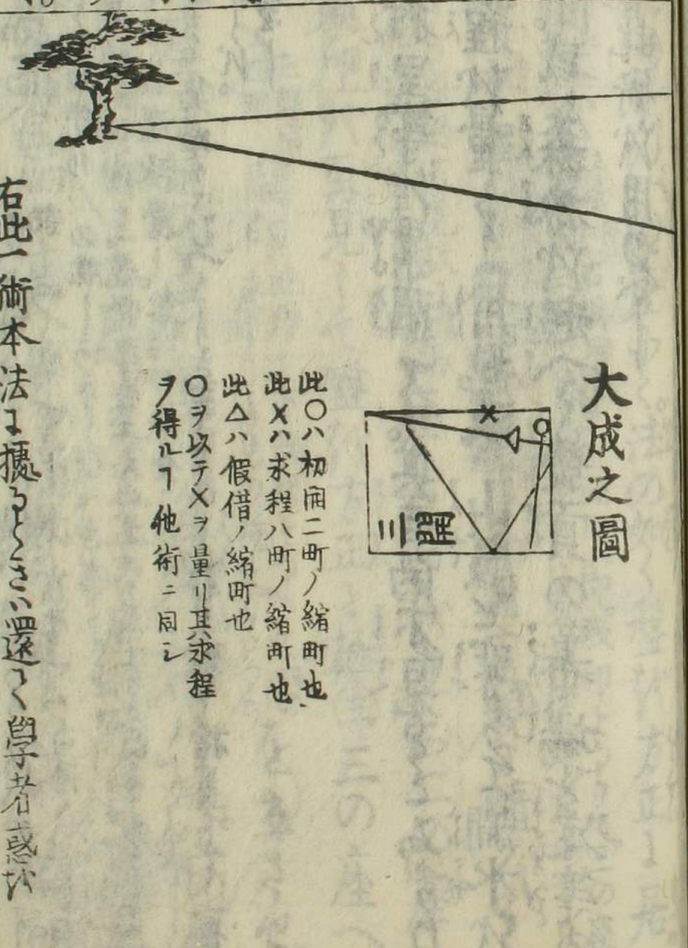
術云下ニ図ニ云ハ作法のごとく品々始計してのち㊀本座ニ盤ヲ方正ニ居。盤西より正ニ目的ヲ見込㊁左前の方へ少し斜ニ間數ヲ定左斜角二町見通の印ヲ立させく。盤乾ハこれを見通。定規ニ隨ひ墨ヲ引。殘印ヲ立㊂一の開地ハいろ。殘印ヲ再見して盤ヲ方正ニ極㊃又左前へ斜ニ間數ヲ定め。左斜角三町開印ヲ立く。盤北の正中程より斜ニ是ヲ見通墨を引㊄二の開地ニ近り殘印一角の角印即殘印と成るを再見して盤ヲ方正ニ極め。

㈥ 右前へ斜より間數ヲ定。右斜角四町 開印ヲ立。一の開地の殘印を再見しる墨の盤東の端を要ふして。開印を見通墨を引

㈦ 三の開地より移り。殘印二角の角印即殘印と成るを再見して盤ヲ方より極



㈧ 今二の開地を再見しる。盤西の墨の端を會ふして。盤北より斜より目的を見通定規を隨ひて墨ヲ引時。盤西より盤北へかきく。三四五の形現ずる。然しる盤面大成を



右此一術本法より據るとさい還さく學者惑ヒ生ー畧法ヲ用ゐるとさい速より初心會ー安ー多ヒ今其ハ本法ヲ措く其畧法ヲ図ヲ覧者ー〳〵此旨ヲ察して妄ヒこれヲ拘泥せざるべし。然しる此をも俱に用ひべー

今現在の所の。三は初開の縮なり。四は求程の縮なり。五は假借の縮なり。其三を。初開の間數二町と量合（此三を一変と変して二町の矩と名るなり）其矩ゆく四を量るを四変（一変三町）とす。四変は即八町なり。是求程の間數と知るべし（記し置くべき比法のごく纖密幽妙なるかの。倏忽として加へ難しも。ゆやもく初學の人の曉しがたし。ふかくふかくぷかくく注釈が今其大略は爰に述く巨細は残るを。是併参攷工夫の為なり。ゆゑにひさもく日は逐ひ月を移りく切磋琢磨し。黎明の白昼にいたるまでぐごくぷをのづから其理をいさもむべし。奥ぬくひつくき事とのこれをいて捨置ふもば。悟る期終に有べくば。學者をべくく思惟し）

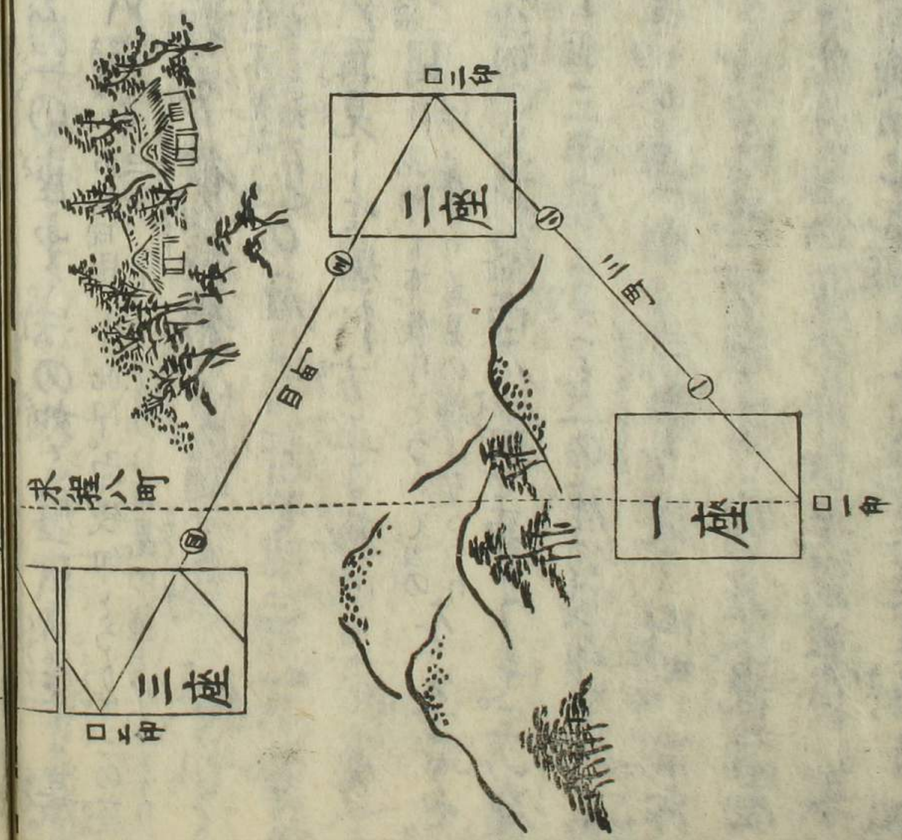
累隔指正方

此術は山林村里等は累隔て。其目的不見ところなり。正當に遠程は量るを用ひ。或は山腹を穿ちて澗水は此方へ通し。或は森林は超へく發貢の幕場を定等のもろ〳〵。皆此術は用ひべし

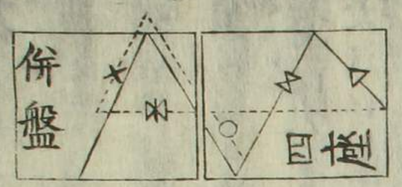
術云（下に図する所をかく云）㊀まづ一の座は。法の如く盤は方正に居。二の座へ斜に間數は定く（右斜角三町）開印（此印。即。残印とりて。三の座より。再見の種となるなり）を立させ。盤北の中程より彼印は斜に見通。定規に隨ひて墨は引。（本座より目的不見故に。一の座に残印は立㊁二の座は見込の作法はなきもの）迂り。一の座乃残印は再見して盤は方正に極㊂三の座へ斜に間數は定く（左斜角四町）開印（此印も亦。残印とりて。四の座より再見の種となるなり）を立させ。一の座より二の座へ見通の墨は盤西乃端を要して。三の座の印は見通墨は引㊃三の座に至て。二の座の残印を再見して。盤は方正に極㊄四の座へ斜に間數を定く（右斜角五町）開印（此印は残印小用ひざるなり）を立させ。二の座より三の座へ見通の墨は盤東の端を要小して。四の座の印は見通墨は引㊅四の座へ移り。三の座の残印を再見して盤を方正に極㊆扨

目的へ斜ニ間數ヲ定左斜角三町三の座より四の座へ見通の墨の盤東の前を要ス〳〵て。本目的ヲ見返。四の座より目的見ゆるゆく〳〵。爰ニ〳〵見返ら定規ニ隨ひく墨を引。

㊀扨剌盤法ヲ改て新ニ分間の矩ヲ設此矩ハ。ゴ〳〵の縮ニ〳〵ヒ。盤面の墨の長短ニ隨ひて。〳〵ふ〳〵ふ。制ヲ定メなり其矩ゆく。一の墨ヲ



大成之圖



△ハ二ノ間三町ノ縮ナリ
ヌハ三ノ間四町ノ縮ナリ
○ハ三四ノ間五町ノ縮ナリ
×ハ四五ノ間三町ノ縮ナリ
ヌハ求程ノ間八町ノ縮ナリ
△ヌ○×等ヲ量タル矩ヲ以テヌヲ量リテ即求程ノ間數ヲ得ル也

其開除の間數三町量取。量取作法ハ前章ニ記セル二の墨ニ其開除の間數四町量取。三の墨ニ其開除の間數五町量取。四乃墨ニ其開除の間數三町量取。各圖乃おとく巨細ニ界ニ引。扨其四乃墨ニの量終ル。一の墨の量始まる。正竪ニ界を引。然して盤面大成ニ尽く。見通ガ悪シ。故ニ是ニ併盤法と名く。其委しき作法ハ。或問の編中ニ載セ

今現ル所の。四の墨の量終ル。一の墨ハ量始まる引渡し正竪ハ界ハ。即求程の縮ル。家初の矩といふハ分間の矩也 家初の矩剃盤法ニて新ニをもちる。此正竪の界を量ル。八変一変一町なり。八変ハ即八町なり。是求程の間數なり

無的定間方

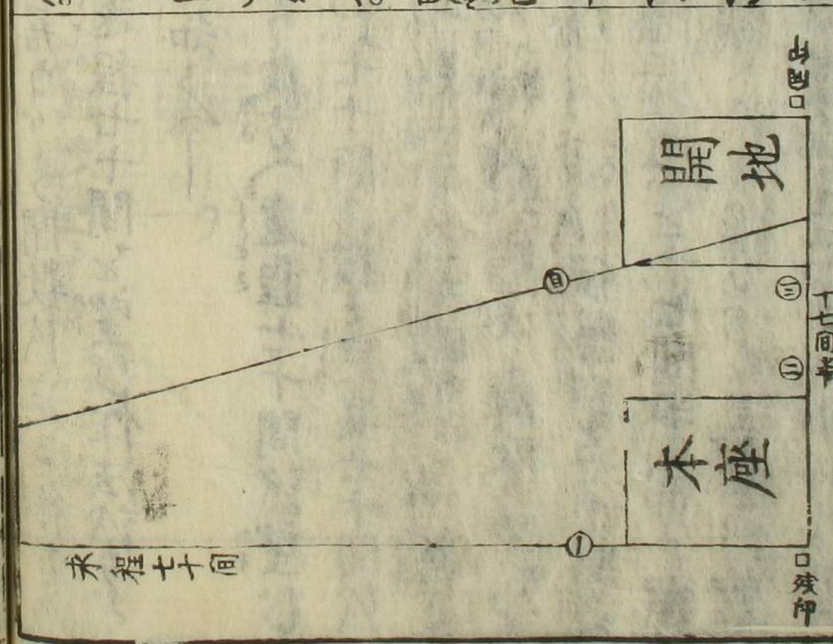
此術ハ間縄間竿ニ不用して。或ハ前後。或ハ左右。幾町幾間

ゆくと。其望む所ニ隨ひ。居ながら間數ニ定る術なり。

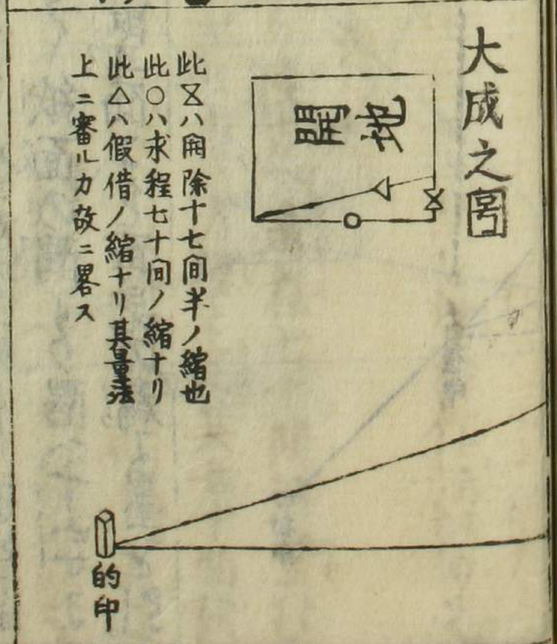
今爰ニ此方より彼方まで遠程七十間を望み作法ゆく記セ。術中ニ述ル事ハ餘ハ推して知るべし

術云 下ニ図を載セ云 ゆくべ此方より彼方へ。遠程七十間ニ望む時ハ。まず盤の四を爰ニ盤四と盤東ニ付て。ハ七十間の摸と定其七十間ニ即盤四ニ割合 盤東の当を盤北より盤南まで。有余不足ニ様ニ割合ハ。割合とハ量合とハ其儀なり 新ニ今間の矩ニ制ス 置 此矩用除の間數ニ量ル。次ニ開除の間數を十七間半と定 此間數十七間半ニ除ル。下の図ニ載セ 彼盤四を七十間ニ割合ル矩をもく。盤三 爰ニ盤三と盤北を十七間半量ニ取。其矩の量留ル。七十間の矩の留へ 七十間の矩の留と 盤東を定規ニ當斜ニ墨ニ引渡セ。然する時ハ豫盤面ニ三四五の形ニ成。是ハ前の事ハ本座ニ出ざる以前の法なり ㊀扨本座ゆく圖ゆく。大躰望の間數

七十間の積りなり。彼方へ正し目的の印を假に立さん。作法如くに見込㊀右方へ正し開乃間數十七間半量り見通の印を立さやうく是を見通本座より殘印を立㊂開地に移り殘印を再見ーく盤を方正に極㊃家初に設置さる五の墨に定規をあてく。望の橛を望の橛と云。目的の為に假に立置さる印の橛をいふり見通なり。〳〵目的の橛五の墨の定規と一條に不合時い。幾度ふくも。望の橛を進退せしめて。

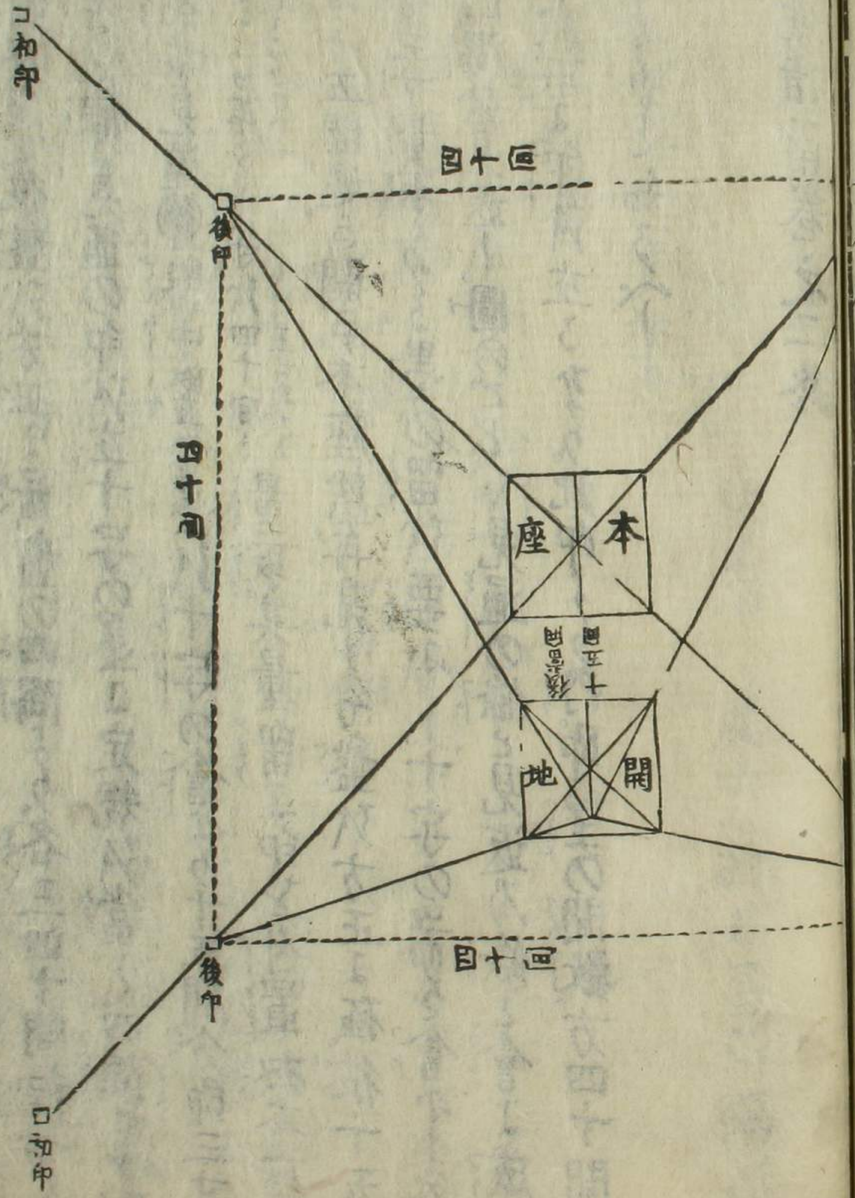


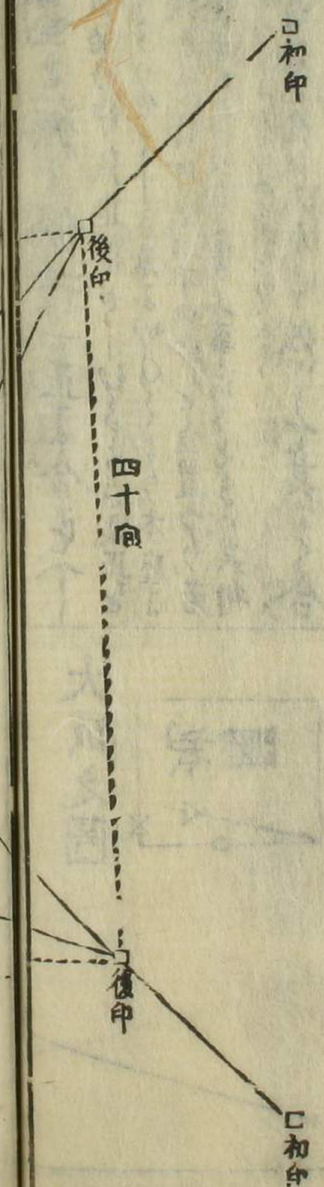
墨と橛と條理一正に合をべし目的の印を進退せしむるとき正を求りせんが為なり。本座より殘印と係印と二本の印を立置るに直ちに進退の作法正に違ふ事なきハ其術かるべし差異なり。前後充念を入るべし。然して其に合さる時。彼印の橛を其聚に立置ーし。是即遠程七十間望乃間數の印と成なり



暗指方面方

此術も亦右に同じく。間縄間竿を不用して。本座より四方面いづれに成とも。望に任せく居ながら其間數を定ひる術なり。前法無的定間方と此法とい。當用無益の術に似りとなれども。初學の徒をして。千変萬化の自由を得せしむ





度に為る其緩急に不論。たゞ〻仮差に賛と。覧者好事の言なりとす。語る事なり。

術云 下は図を取るなり云 もとへ本座に正中をかりて。方面四十間に望む時いまだ白紙一枚に四方同すに裁く假に是に四十間四方に摸と定 尤四方同すなりとさハ。其紙の廣狹ふハかゝりゝごろり。紙面八寸四方ろゝバ。二歩を一間とし。二寸を十間とし。八寸を四十間と定め。即此矩とかゝく。開の間数を量る圖のごとく紙面の隅より隅へ十字に墨縄引とし 此十字の墨。即方面四十間に四隅なり竪面ことに再見の為に墨を引。

扨此十字に引くる紙を盤面に張付く用也。是まぐくの事ハ本座に出ざれ以前の法なり

㊀扨本座に彼盤に方正に居盤の四隅より各三四十間程つく除きて假に見通の印に立十字の墨に定規に當て四隅とゆふ彼印を見通㊁盤中竪の墨に十字の會より十五間分即三寸右のごとく八寸に四十間と定むるなり八寸間分ハ三寸なり量取其量留に印を付置扨本座より十五間退き開き本座に再見して盤に方正に極彼十五間分三寸量取くめる墨の留に要ふして十字の端を會ふして各四隅に見返し圖のごとく見通の條と見返の條と會に成くめる取に印に立るなり此印より内即望の間數方四十間四面なりと知るべし

量地指南卷之二終

量地指南卷之三

勢南　處士　村井昌弘　編述

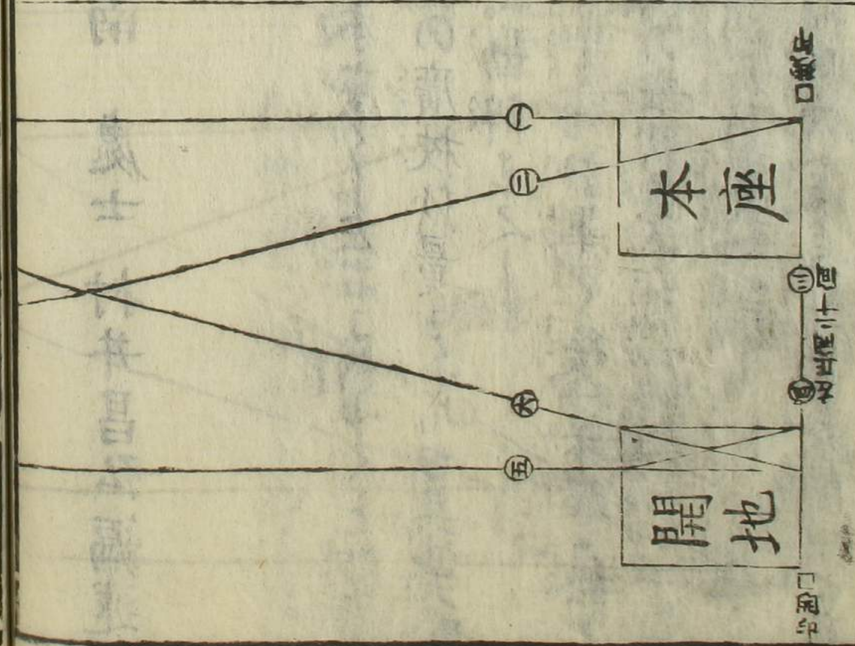
量盤術廣狹法

正面正開方

此術ハ平原曠野の地形に本座して左右に何方くを妨障なき場所より彼方正面の廣狹に量るに用也其法大略遠近術の左右開に據て勘辨すべし

術云下に図をもて云作法のごとく品々始計畢て後㊀本座に盤を方正に居盤西より正に目的の左に見込目的の左ハ本座の右㊁其盤乾を要ふして斜に目的の右に見込此見通用地にて定規に隨ひて墨に引㊂左方へ正に間數に定て開地を求開印を立てせて是を見通本座に殘印に立置㊃扨開地に迄り殘印を

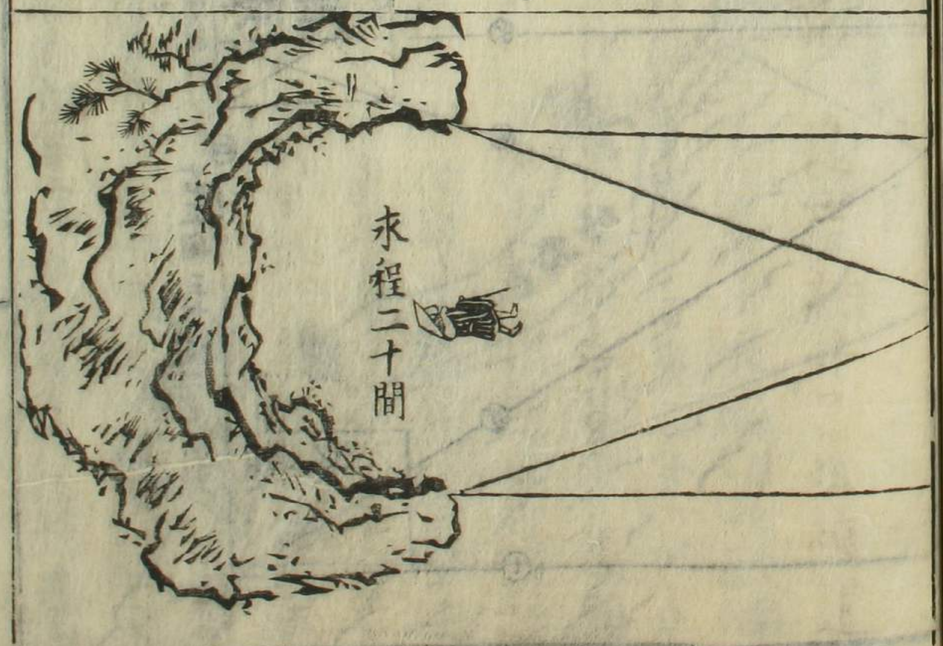
再見〳〵盤坤方正ニ極㊄其盤坤を會ニ成ごとく（かゝるを盤坤を會ニを成ごとくとしるハあるべし）其作法の下をのべくいふ盤北ゟ斜ニ目的の左ゟ見返墨を引㊅今目的の左を見返ゟる墨の盤北乃端を要ふ一正ニ目的の右ゟ見返（此見返開地ゟ見返の）墨ゟ引。然ゟる時ハ盤の南北兩所ニ三四五の形ゟ〳〵ゟん。盤面大成を今現ゟ〳〵所の盤北の三ハ開除（左正角二十間の縮なり）盤南の三ハ求程



彼正面廣程の縮なり（右方の四八目的乃左方の四八目的の右〳〵の縮なり）其盤北の三ゟ開除の間數廿間ニ量合其矩（開除の間數二十間の矩）ゟ〳〵盤南乃求程の縮ゟ量ニ同変なり。同変ゟ即廿間なり是求程（彼方正面の廣程二十間）の間數と知るべし

大成之圖

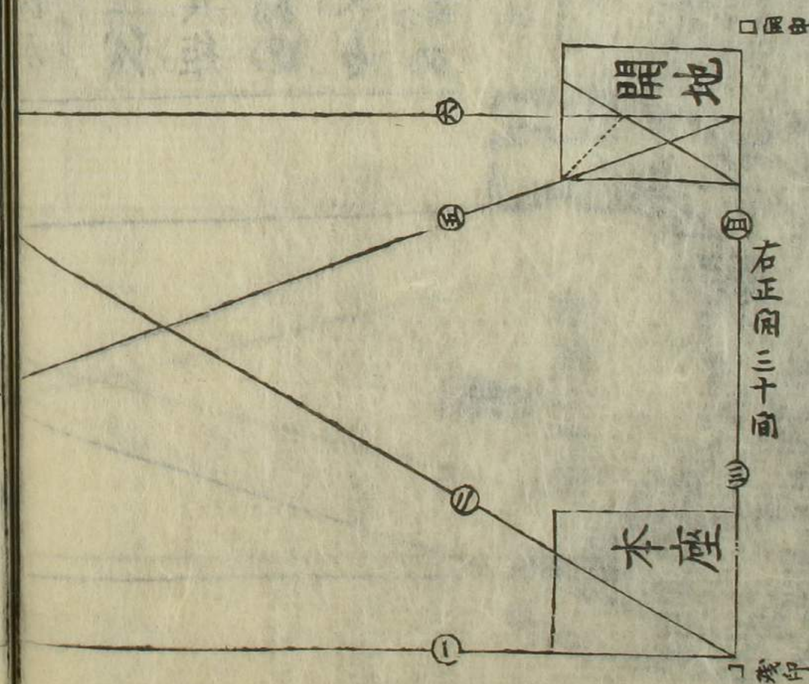
此又ハ左正角二十間ノ縮ナリ
此〇ハ求程二十間ノ縮ロナリ
今運算ヲ以テ又ヲ一変ニ変ニ二十間ノ矩ト名ク其矩ヲ以テ〇ヲ量ルニ同変ナリ同変ハ即二十間也是求程ノ間數ナリ



斜面正開方

此術ハ平原廣野の地ニ。彼方の斜面乃廣狹ハ量ニ不用。其法大畧前法（正面正開方）ニ准知るべし

術云（下ニ図ニ云）作法乃おゝ始計して（一）本座ニ盤を方正ニ居。其盤東ニ正ニ目的の右を見込（二）盤良を要ふして斜ニ目的の左ハ見込



墨ハ引（三）右方へ正ニ開除を求（右正開三十間）開印を立さ也これハ見通殘印ハ立置（四）開地ニ移り殘印を再見して盤を方正ニ極（五）其

大成之圖

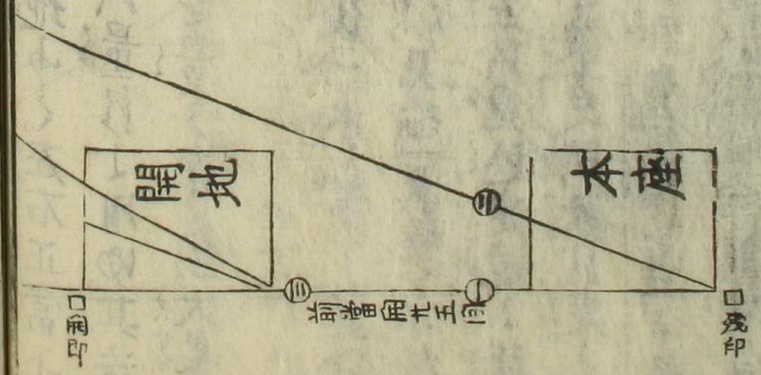
此又ハ右正開二十間ノ縮ロナリ
此○ハ求程四十間ノ縮ロナリ今
渾発ヲ以テ又ヲ一夾ニ夾三ハ間
ノ矩ト名ケ其矩ヲ以テ○ヲ量ル
ニ一夾三分一有リ一夾三分一ハ
即四十間十リ是求程彼面ノ廣超
十リ猶本文ニ依テ明ラムヘシ

盤巽ニ會ふして。盤北より斜に目的の右に見返墨に引㈥其墨
今目的の右を見返
しく引くる墨斗より
の盤北の前に要ふして。正彼面の廣程莫大なれ時ハ斜にも見返るり小
目的の左に目的の左ハ本座の右なり。前後の件々これまた見返定規に隨ひて墨に引
㊀扨割盤法をもく盤巽乃會より。左の目的の見込見通の墨
の會まで。斜小界を引渡し然して盤面大成を
今現形所の盤北の三ハ開除右正角三十間の縮なり。盤中乃斜三
斜三とハ今割盤法に彼斜面廣程の縮なり。左方の四ハ目的の左
まで。引渡るる界を云ハ求程彼斜面廣程の縮なり。左方
の四ハ目的の右
までの遠縮より其盤北の三に開除し間數三十間に量合其矩
開除の間數
三十間の矩をもく。盤中の斜三の界を量ふ。一夾三分一なり。
一夾ハ三十間より
三分一ハ十間なり一夾三分一ハ即四十間なり。是求程彼方斜面の廣程四十間
の間數なり

正面前後方 爰ふ前當角の作法に記を後當角も是に准して知へし

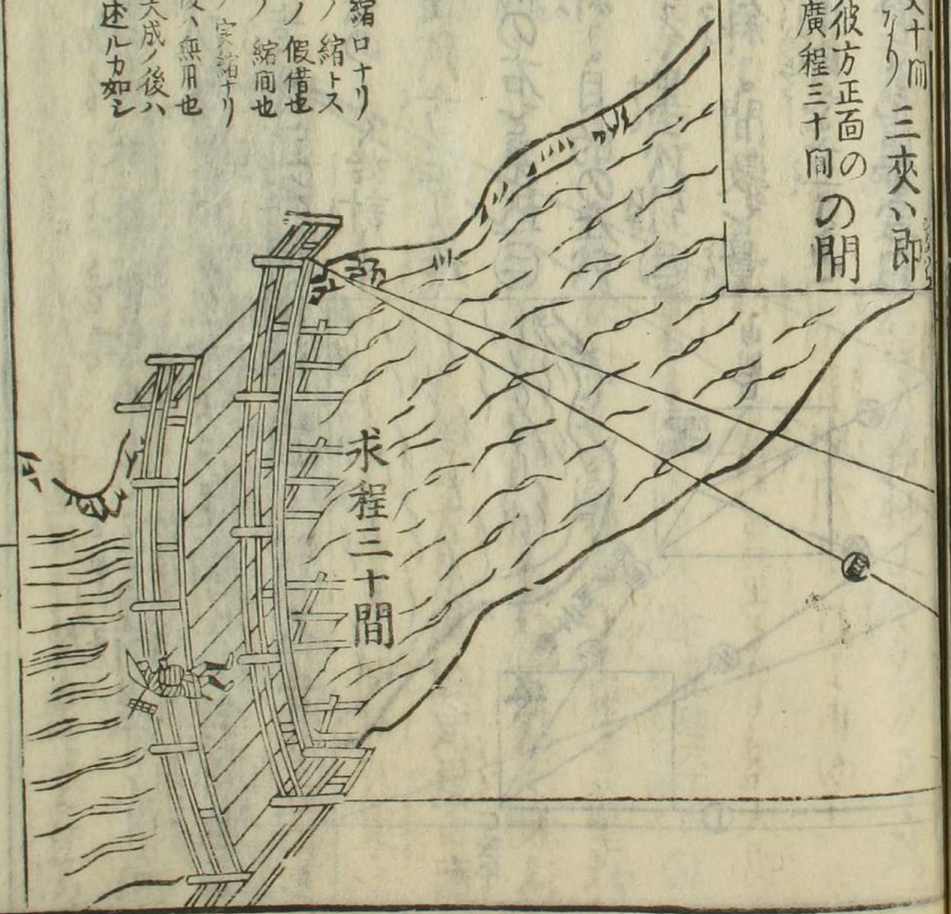
此術ハ本座の地形窄道堤防等乃狹地ふく。左右正當小
開除叶ひ難き場より。彼正面の廣狹に量形に用ゆ。其法
開地に前後へ進退して求る然して求程を量るなり。大畧
遠近術前後開の格小同じ。配合まで
術云下に図まで取とりて云作法のごく品々始計して後㈠本座に盤に
方正に居。盤東より正小目的の右に目的の右ハ見込㈡其盤を示揺
やく小居置。盤良を要すく斜に目的の左に見込。定規に隨
ひく墨に引。本座に殘印に立。夫より正に彼方へ間數に定く
開除に求め左右へ開除叶かきに進て求ふ見通印を立さを。
目的の右と。盤東の定規と此印と。三所一條に成ふく念に入㈢開地に
立置べし。尤見込の條々ふく。別に見通と為ふ及ざれなり㈣目的
迂り。殘印に再見して盤を方正に極。此所より念の為ふく目的
盤良に要ふく斜に目的の左に見返墨に引。然まるる記ふ

三四五の形現ゆ。盤面大成を今現ゆ所の。三ハ求程彼正面廣程の縮なり。五ハ假借の四ハ種子本座より目的の右まくの遠程の縮なり。差ハ開除前當用九五間の縮口なり。扨其差口を開除の間數廿五間を量合其矩をもく。三三ハ元来彼面の縮口なるゆえ。假に差口と合して本座より目的まくの遠程と種に用ゆ。是を量る二夾ゆ。其上に差口乃廿五間を加倍しく假に七十五間と知り。是を四に名くるの種間とし。扨新矩を設く。四を其種間七十五間に量合。運発をもく。此四を十間の矩とゆく。其矩をもく。再度三を量る。此三を初度と夾半に夾ゑ是を後度と兩度量るゆ。初度ハ目的まくの假の遠程に用ひ。後度ハ求程の間數に用ひ。元来此三も



来程の縮なり。扨三夾ゆ。夾十間三夾ハ即三十間なり是求程彼方正面の廣程三十間の間數と知るべし

大成之圖



此又ハ差也用除廿五間ノ縮口ナリ
又○ト合一ルテ求程廿間ノ縮トス
此○ハ三也遠程七十五間ノ假借也
実ハ又ト合メ求程三十間ノ縮間也
此×ハ四也遠程七十五間ノ実縮ナリ
此△ハ五也假借也大成ノ後ハ無用也
此□ハ旧五也假借也是又大成ノ後ハ
無用也量法委クハ本文ニ述ルカ如シ

正面斜開方

此術ハ本座の地形茂林薮等ふして。左右前後ともふ。正當の開除叶ひがたき所より。彼方の正面の廣程を量るふ用ゆ其法大旨遠近術斜開法を據く曉るべし

術云（下ノ図ニ就テ云）作法のごとく始計して。

てのち㊀本座ノ盤を方正ノ居。

盤東より正ノ目的の右を見込㊁

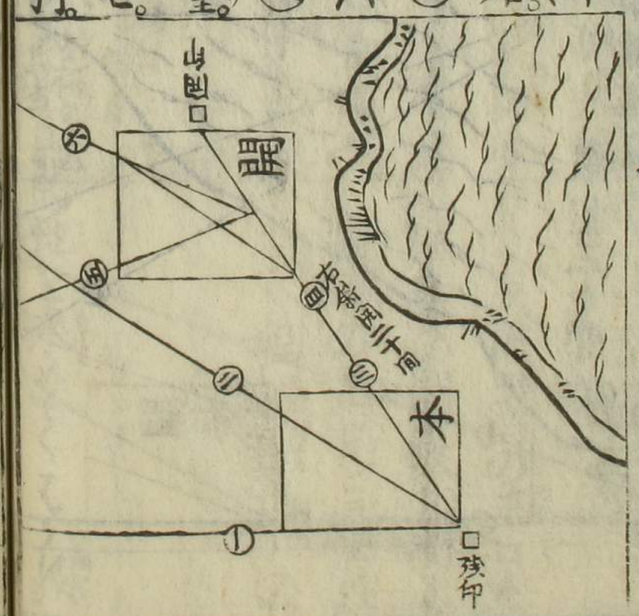
其盤艮を要ふし斜ノ目的の左を

見込。定規ノ隨ひて墨を引㊂

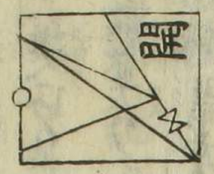
本座の右前の方へ斜ノ間數を量。

開地を求く（右斜間二十間）開印を立さる。

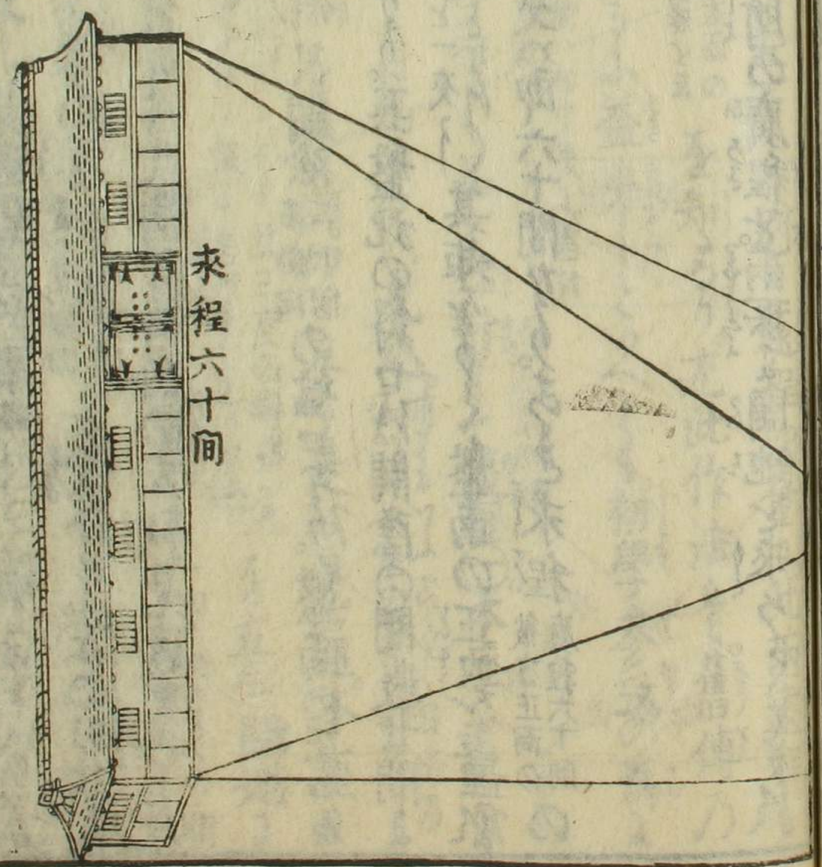
盤艮より是をもと斜ノ見通墨を引。



大成之圖



此図ハ右斜間二十間ノ縮口也
此○ハ来程六十間ノ縮間ナリ
図ヲ以テ○ヲ量ルニ三変有リ
三変ハ即六十間ナリ是来程ノ
間数ナリ委ク ハ本文ノ如シ



本座ヨ殘印ヲ立㊃開地ヲ至テ殘印ヲ再見して盤を方正ヨ居㊄其盤巽を會ふし。見通の墨ヲ要ふしく斜ふ目的乃右ヲ見返墨ヲ引㊅其墨の要（是ハ見通の墨の要ろり）を要ふし。左の見込の墨乃盤南の前ヲ會ふして斜ヨ目的の左ヲ見返墨を引。然して盤面大成を

今現在所の盤北の斜口ハ開除（右斜角二十間）の縮口なり。盤南の正口々来程（彼正面廣程）の縮間なり。其盤北の斜口ヲ開除の間數廿間ヨ量合（渾発をもく此斜口を一変ろ其矩をもく盤南の正口を量れ変ヶ是ヲ廿間の矩となれり）其矩をもく盤南の正口を量れヨ三変ヶり。（一変廿間）てろり三変ハ即六十間なり。ふと求程（彼方正面の廣程六十間）の間數なり

一知兩開方

此術ハ彼面一ケ所の廣程と兩取ヨ開地を求ろ

術なり。其法目的の左右へ各別ヨ遠程ヲ量り。此兩遠程を種々。求程（彼方面の廣程を云）を知ろり。尤此作法を舊傳乃數説ふしく用ろふ益少しとも。初學參攷の為ヨ姑ころ贅を（此術ハ初中後ヨ盤ヲ三度改てろれなり）術云（下ヨ図ヨろ取をもく云）作法のまく品々始計して後㊀本座ヨ盤ヲ方正ヨ居。盤東ヨり正ヨ目的の右ヲ見込。（前ヨもて目的乃右ハ即本座の左ヨ知ル）

㊁右方へ正ヨ開除（右正面三町）を求め開印を立く是ヲ見通。本座ヨ要印（此印毎例の殘印ろ也とも。初中後三度の術共ヨ。此印を肝要ヨなれ故ヨ假ヨ名づけてろり）を立㊂開地ヨ迄り。再見して盤を方正ヨ極め㊃盤巽を會ふし（かくのごくの術盤巽を會ヨもべしとなり。あらば爰ヨ図ヨろうくし）其目的（目的の右と云）を見返墨ヲ引。然ヨ

ちさい三四五の形ヲ作ろ。即其三を開除の三町ヨろ合其矩をもく四を量ヨ三変ヶり。（一変三町）てろり即目的の右の遠程

大成之圖

此五八右方ノ遠程六町ノ縮也
此×八左方ノ遠程八町ノ縮也
此○八水程ノ廣程六町ノ縮也
其量法本文ニ委ク記ス宜ク
面合スヘシ

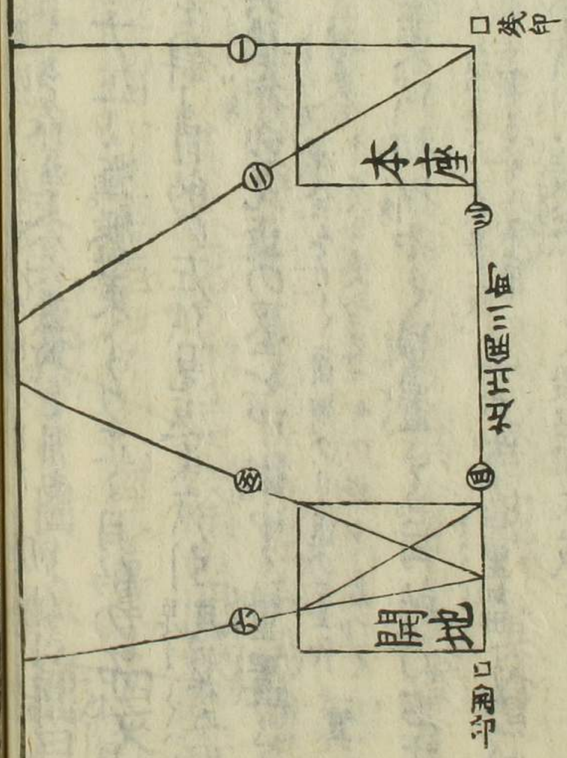
六町と知る。是まぐれ初度の術にて目的の右方をもとめる種なり 然して其盤を藏置此盤は目的の右方をもとめる蹤なり。此六町即求程なり 中 ㊄ 扨新盤を圖ぐく。斜に要印を合せて、方正に居。初術に用ひる盤を。其侭用ひて事よろしとい へども。盤中の墨混じやすきが故に。今新盤を用ひる。然しても盤を斜に居る 盤東より正に目的の左を目的の左は本座の右なり 見込。此見込実は正にあらざる故に。今見る東より正にして又正なり ㊅ 其盤西より右方へ正に開除右正角四町 を求開印を立て是を見通 ㊆ 開地に入り要印此印前術にも用ひる印なり を再見して盤を方正に極 ㊇ 盤巽を會ふして其目的目的の左と云 を見返墨を引。然るときは三四五の形になる。即其三を開除乃四町にて もと合。其矩をもつて四を量ふ二夾なり。一夾四町 即目的の左の遠程八町と知る。是まぐれ中度の術ふして目的の左方を量りなり。此十町即求程を量る種なり 然して其盤を藏置此盤は目的の左方を量る種なり。後術に用ひる かくれぐく目的の左右の遠程を量得て後 後 ㊈ 新盤を用ひて此盤もまた。必新らしきを用ひ

限らず。初術中術の盤を用ひても事足りなり。初術に居るべし 初學のまぐれして曉しやすきを為に。今新盤を用ひ 初術に居るべし おもに要印に合せて方正に極。盤東より正に目的の右を見込 ㊉ 其盤艮を要ふして斜に目的の左を見返墨を引是まぐれは後度の術なり ㊋ 扨剃盤法をもつて。其後術の見返の墨を中術にて量置る。目的の左方の遠程八町を量合。渾発をもつて後術の見返の墨を 其矩を十夾に夾合せ一町の矩と名づく もつて後術の見込の盤東を。初術にて量置る。目的乃右方れ遠程六町量取。盤北より盤南の方へ量取。其餘余をは剃まぐれ不用 其六町の量留より八町の墨の終へ。小斜に界を引渡。然して盤面大成を 今現に所の見込は目的の右まぐれ遠程なり。見返に目的の左まぐれの遠程なり。今引渡まぐれる小斜の界は彼面乃廣程なり。其見込見返を量る矩をもつて。此界を量ふ六夾なり。一夾一町 六夾は即六町なり。是求程の間數なり

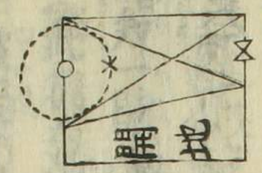
圓知正開方

此術ハ野外の村里海中の嶋嶼とゝ彼所ニ在る所の圓周ハ量知るゝ用也其法往々廣狹術ニ述る所とゝ雖推知べし聊異なる作法ハ術中ニ記さと

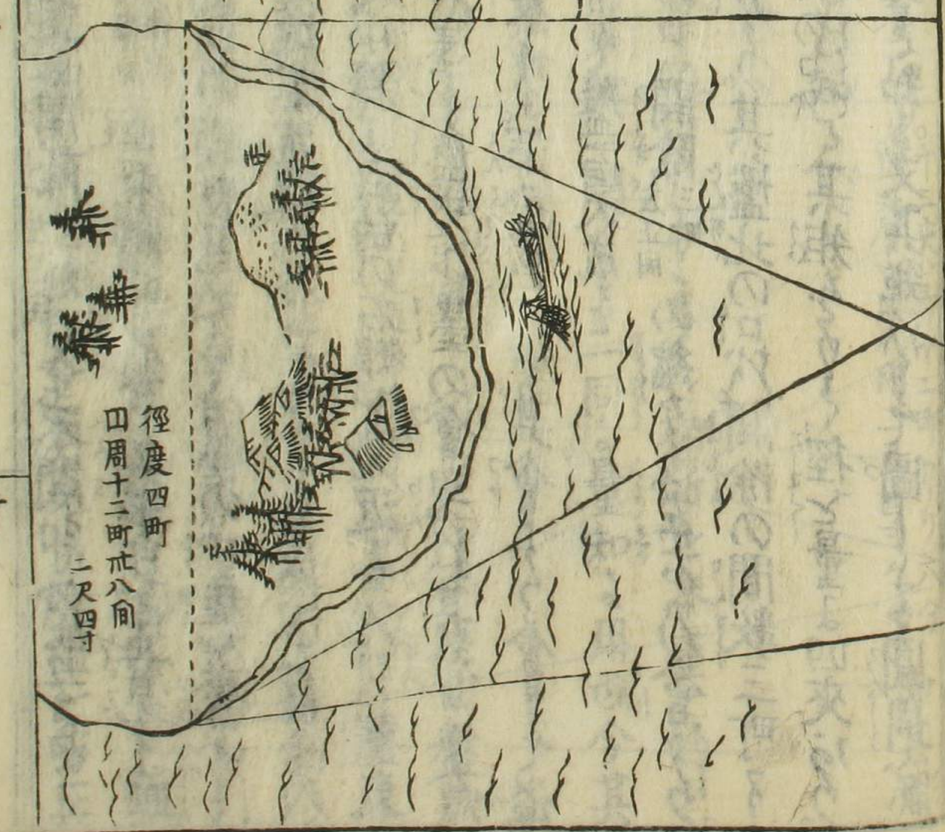
術云下ニ図ニ取とりて品々作法のごとく始計るくのち㊀本座ニ盤ハ方正ニ居盤西ニ正ニ目的の左頰を見込㊁其盤乾を要ふして斜ニ目的の右頰を



大成之圖



此㊄ハ左正角三町ノ縮ロナリ
此㊀ハ未程徑度四町ノ縮ナリ
此㊅ハ未程四周十二町ハ八角二尺四寸ノ縮也其量法本文ニ記スカ如シ考合スヘシ



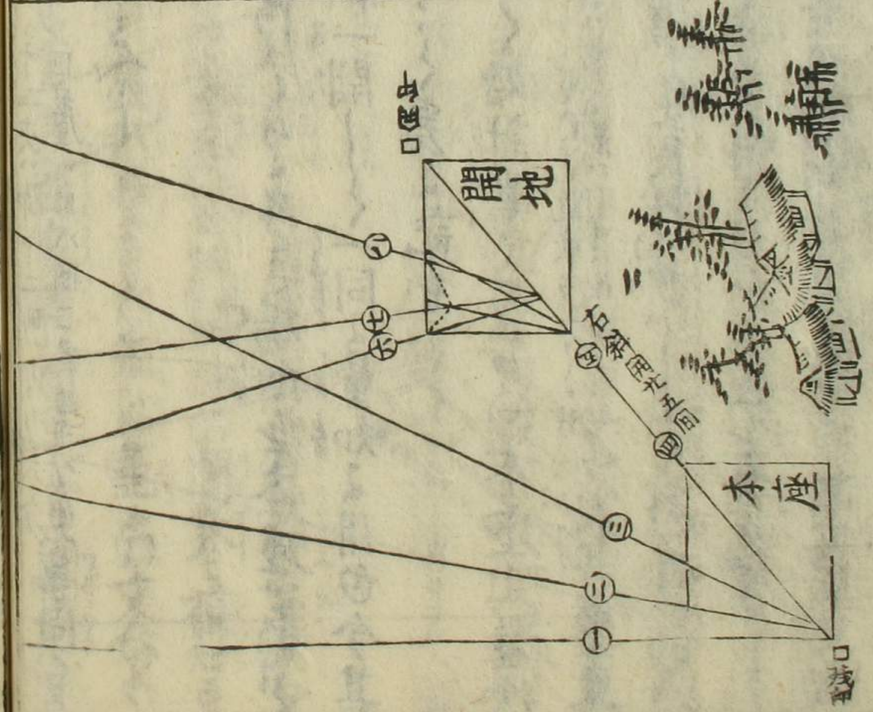
見込墨ニ引㊂左方ヘ正ニ開除（左正角三町）を求開印ニ立さゝく
是ニ見通本座ニ残印を立㊃開地ニ移り其残印を再見して
盤を方正ニ極㊄目的の右頰ニ見込ニる墨の中程を會ふし
斜ニ目的の左頰ニ見返墨ニ引㊅今左頰を見返ニる墨乃
盤北の端を要ふして小斜ニ目的の石頰を見返墨ニ引然れ
時見込の墨と見返乃墨と盤中小墨の會現れ其會と會
の空間を圓周の徑度ニ渾發ニ引く其會ニ會して溢
れニ圓形を圖を然して盤面大成を
今現れく所の盤北の口開除（左正角三町）の縮なり左右乃會ニ
會まく圓周の徑なり其盤北の口ニ開除の間數三町ニ
量合渾発ニ引く此盤北の口ニ其矩をのく徑を量ニ四夾ニ
一夾一町三夾ニ夾ニ一町の矩 即其徑四町と知る又其矩ニ立て圖しニる圓周ニ

量ニ小十二夾六分四釐ニ当る十二夾ハ即十二町なり六分四釐ハ四町八間二尺四寸なり 即其周
十二町四八間二尺四寸と知るべし

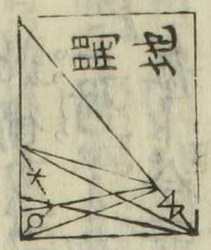
兩知一開方

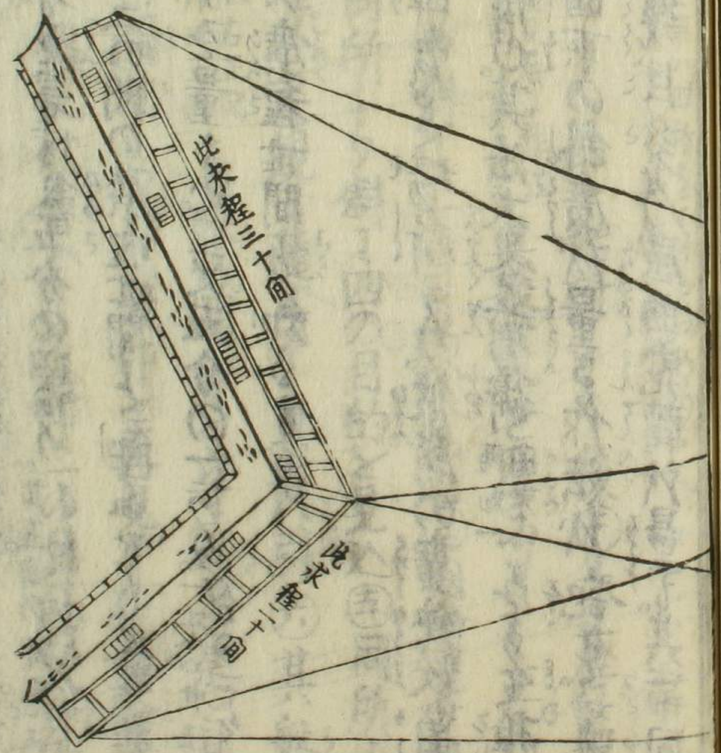
此術ハ池沼叢澤等の円くニ多き場所を本座とし
彼面の廣狹數箇所ニ一開しく一同ニ量知ニ用ゆ今其
二箇所を量る作法ニ立てこゝ爰ニ記を
術云（下ニ図所とりく云）作法のごとく始計畢てのち㊀本座ニ盤ニ
横ニ方正ニ居（此術のごとく見込見返數多なる時ハ盤を横ニなして居べし其作法前ニくり）盤東
ニ方正ニ目的の右ニ見込㊁其盤長ニ要ふしく斜ニ目的乃
中を見込墨ニ引㊂同所ニ又斜ニ目的の左を見込墨を引
㊃右前ヘ斜ニ開除（右斜角廿五間）を求開印ニ立さゝくこれニ見通
本座ニ残印ニ立㊃開地ニ至り彼印を再見して盤を方正

小極め㊅其再見の墨を要に〜盤巽位會ふ〜て斜よ目的の右位見返墨を引㊆其墨の要よ成り〜る所を要よ用て斜よ目的の左位見通墨位引㊇扨剌盤法をもつて盤南よ現いまそめる。三所見込の墨と三所見返の墨と其會より會へ界位引渡ととさ。二所求程の縮形ひつ〜いまと然〜て盤面大成ま



大成之圖





㊅㊆右斜間二十五間ノ縮口也
〇ハ一二ノ廣程九間ノ縮口也
×ハ二三ノ廣程九間ノ縮口也
㊅ヲ以テ〇ヲ量リ九間ヲ知ル
㊆ヲ以テ×ヲ量リ九間ヲ知ル
其書ナルヿハ本文ニ記ス

今現形所の盤北の斜口ハ開除（右斜間廿五間）の縮なり。盤南二所の界の斜口（今割盤法にて引渡さる斜界）ハ永程（彼斜面廣程）二所の縮なり。其盤北乃斜口を開除の間數廿五間と量合（此斜口と一夾と夾ミ廿五間の矩と名づく）其矩ハ如く。盤南二三の間乃斜界を量るハ一夾五分の四なり。廿五間の矩を五分とすれとき ハ其一分五間と當る。然るハ則 即一二の間の廣程廿間と知るなり。又其矩ハ如く。盤南二三の間乃斜界を量るハ一夾五分の一なり。一夾ハ廿五間五分の一を五間都合三十間也 即二三の間の廣程廿間と知るなり

四知一開方

此術ハ如き妨障なき場所なり。彼所の廣狹數箇所を一術ハ如く量るハ用也。其法大略前術（兩知一開方）をもて推知をなす。今一開して四所の斜廣ハ量る作法ハ記さすべく此理ハ據とき ハ幾巨多乃屈曲宛轉ハ量も其事同じ

かるべし（矩ハ前ハ記を取ハ四所をとる法なり。五所七所とも云。其術ハ如）

術云（下ハ図なる所と云）作法のごとく品々始計しく後（一）本座ハ盤ハ横ハ方正ハ居（盤を横ハ居る作法往々前章ハ委く記す）其盤乾を要ハしく正ハ一の目的ハ見込（二）同所より斜ハ二の目的ハ見込（三）同所より斜ハ三の目的ハ見込（四）同所より斜ハ四の目的を見込（五）同所より斜ハ五の目的ハ見込。各定規ハ隨ひく墨ハ引（六）其盤南より右方へ正ハ開除（右正間廿五間）を求め開印を立さるく是と見通本座ハ殘印ハ立（七）開地ハいくり殘印を再見して盤を方正ハ極（八）其盤西より盤良ハ會ハして斜ハ一の目的ハ見返。（九）今一の目的ハ見返る盤西の墨の端を要ハして斜ハ二の目的ハ見返（十）同所より斜ハ三の目的ハ見返（十一）同所より斜ハ四の目的ハ見返（十二）同所より斜ハ五の目的ハ見返各

大成之圖

△右正角卅五間ノ縮口十リ
○八一二ノ廣廿間ノ縮口十リ
△八二三ノ廣十五間ノ縮口也
△八三四ノ廣九間ノ縮口十リ
×八四九ノ廣十間ノ縮口十リ
其量法巨細八本文ニ云ヘシ
勘合スヘシ

定規ニ隨フテ墨ヲ引（界）扨剳盤法ヲ以テ五所見込の墨と五聚見返の墨と其會ヨリ會ヘ悉く界を引渡一二の間二三の間三四の間四五の間四ケ所會ヨリ會ヘ悉く界を引渡是彼面銘々の廣ヲリ

然ルニ盤面大成ヲ今現形所の盤西の正口ハ開除右正面巾五間の縮なり盤東四所の斜界ハ剳盤法ヲ以テ彼斜面四所の廣程なり其盤西乃正口ヲ以開除の間數巾五間ニ量合渾発ヲリ此正口を一夾ニ夾ミ巾五間の矩とかゝくべき事なり

又いも庄ヶ〜ハ還て拐法迂遠ニなるゆゑ其矩開除巾五間を七夾ニ夾ミ巾五間の矩と名ヲリ今此正口を七夾ニ夾ミ五間の矩をヲリ

二三の間ハ界ヲ以量ルニ三夾ヲリ即其廣程十五間なり三四の間の界を量ルニ四夾ヲリ即其廣程二十間なり四五乃間の界を量ルニ二夾ヲリ即其廣程十間なり

廣程各自小ヲ以さゝかなり

量盤術高深法

量深二術方

此術ハ山上小居ヲ谷心の深程ヲ以量リ城樓小登ヲ郭外乃里程ヲ以知リ或ハ山河ニ桟橋を渡シ或ハ磯岸ニ井樓を上ル等に用ル今其谷心の直立ヲ以量ル作法ヲ以ヲ

爰ニ書ス餘ハ是小倣ひ知ルべし（此術ハ初ニ遠近術を勤て空徑の遠程とヲリ）

後ニ又其座ニ高深術を勤む前後二術をヲリ其深程の全躰を量リ知ルヲリ審ニ術中ニ記ス

術云下ニ図ヲ云

まづ本座ヲリ（初）目的下の遠近術をもヲリ

目的下の遠近術とハ盤の彼ニ下を此ニ上ヲ遠近を量ルヲリ其くゝ〜ニ事ハ別巻ニ記ス故ニ爰ニ其作法を不載

谷心の目的まで空徑空徑とハ空中の指渡とす地形の事ニ拘リふ〜ハ

の間數ヲ以量ルニ八十丈ヲリ是ヲ以テ本術の種とス右ヲリ所ハ空徑を量リて回數を得るまでの法ヲ以て別用ヲ故ニ八十回ヲ以得て後ハ此盤を不用なり

（後）扨作法のごとく本座ニ此本座ハ目的下の術ニ勤ル座を即用ル也盤を直立ル居

求程五十七間

下ニ図するごとく。盤北ハ上とし。盤南ハ下として居るゆえ。其盤東盤西ハ勝手のゆえ。盤西と盤東と此方として居るゆえ。

栖くいしくハ定規ニ針を刺。盤良初巻ニ云るゆえ。

を要ふして。斜ニ谷心の目的へ見込墨ハ引。然する時ニ三四五盤西ハ三。盤北を四。今引渡する斜の墨ハ五とし。

の形現する。盤面大成を

今現形の所の三は求程（念直立の深程）の縮なり。四は地径（本座と目的と。其両間地中の直径）なり。五は空径（本座と目的と其両間空中の斜径）なり。其五を種の為に目的下の術ゆ、量量る。空径の間数八十間に量合。（盤中の斜の墨と八交に交こ十間の矩とを。勿論）此斜墨形一交に交こる七間の矩と名く其矩（斜の墨と八交に交こる七間の矩）をりて。彼三形量るに五交七分ありり。（一交八十間なり七分八七間なり）五交七分は即五十七間なり。是求程（谷心直立深程）（五十七間）の間数なり（或は其矩にて。四形量るは地径の遠程なり。其矩にて五形量れは空径の遠程と知べし）

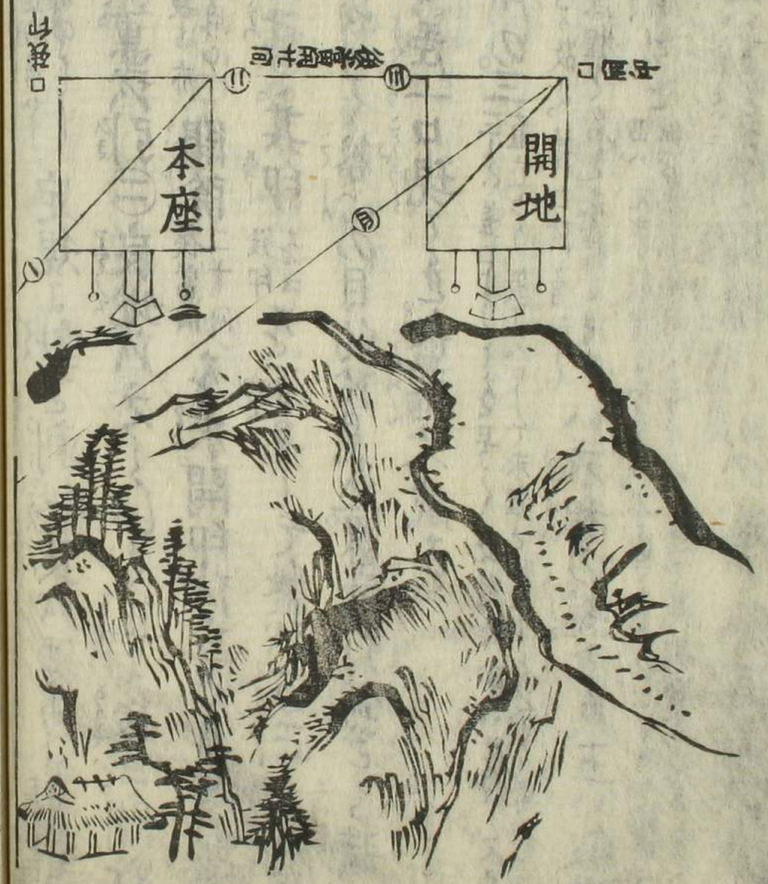
量深二術方

此術も前術（量深二術方）に小異とへども。但其用は一なりとへども。其法は異なり。前術は二術（遠近術高深術）をめぐり量り。此術は一術形つとめて知るなり。其大略遠近術の前後開に准拠べし。猶術中に巨細形記を照らし考べし

術云（下に図を取とかく云）品々作法はじめ始計して後㊀本座に盤形直立に居。（盤の居やう前のごとし）定規に針を刺。盤良形要ありて斜に谷心の目的を見込。墨形引㊁良地形えらひて正に後き。間数を定く（高深術用の間数も亦二十分一の法を用ゆ）開除（後當用二十間）を求。開印形立て是を見通。残印形立㊂開地に迂て。其印（残印を云）を再見して盤形方正に極㊃まて其盤良形要ありて谷心の目的形見込。墨形引。然て持は三四五の形と別に差一口現て。盤面大成と

今現形所の三（三交に差口より上を号く。此縮口実は差口と合して。谷心の直立なり。故に合して求程とも云べし。其術に随ふ時は。甚しく繁雑なるが故に。差口形省ひて。爰に直立の深程と名き。求程に用ゆ）は求程の縮なり。五は假借なり。四もまた假借なり（四は元来假借にして。本座より谷心まで地中の直径なり。然れども本理にまたがへり。還て其術繁雑なるゆへに。暑を假借と）差は（差と三なり下をなり）開除（後當用二十間）の縮なり。其差口形開除の間数二十間に量合。（差口と一交に交こ。二十間の矩と名く）其矩をめぐり。彼三（本法に拠る時は三と差と合して求程の間数なり。然れは其法繁雑なる故。今暑法を用ひ。差を加入せずして求程に繁雑なる故。）を量るに二交半なり。

一夾ハ廿間ろり半夾ハ十間ろり二夾半ハ即五十間なり。是求程谷心直立の深程五十間の間數なり或ハ其矩をかゝく四を量まゝ本座より谷心まぐく地徑の遠程ろり。其矩をかゝく五を量まゝハ本座より谷心まぐく空徑の遠程と知べし



大成之圖

⊠ハ差也角除二十間ノ縮ナリ
○ハ三也求程五十間ノ縮ナリ
⊠ヲ以テ○ヲ量ル時ハ其求程アラワル
⊠ハ四也假借ノ縮ナリ実ハ地徑也
△ハ五也假借ノ縮ナリ実ハ斜徑也
×ハ新五也假借也大成ノ後ハ無用ノ縮ナリ

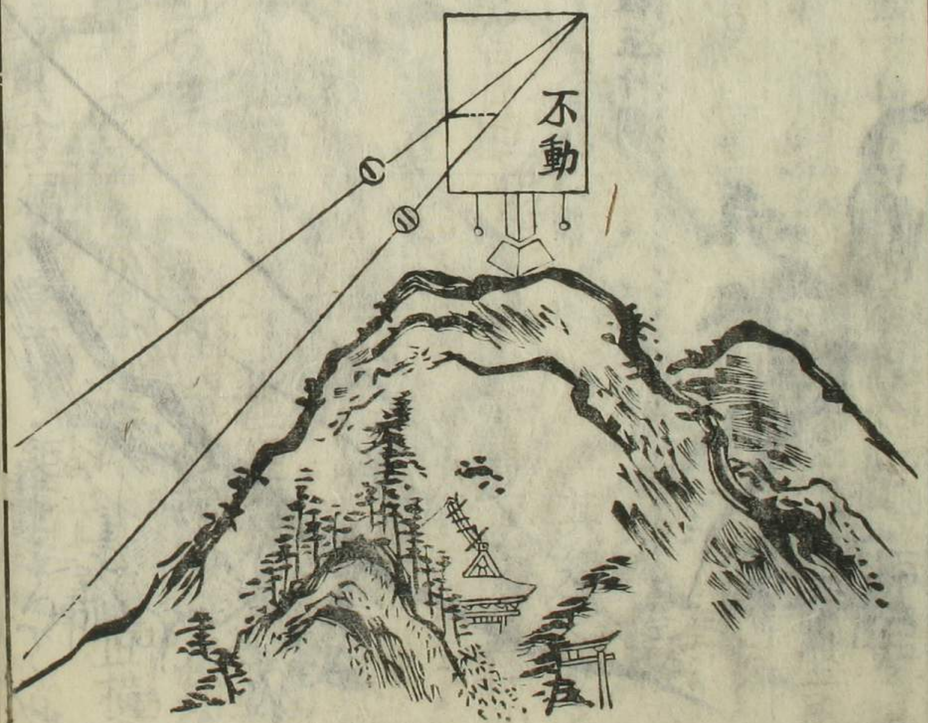
求程五十間

谷心量廣方

此術ハ峯ノ峰ニ居テ山間ノ谷幅ヲ量ル。樓上ヨリ城外ノ堀幅ヲ知ル等ニ用ヒ。

ヒクク高サ聚ヨリ低キ地ノ廣狹ヲ量ル術ヨリ今爰ニ谷幅ノ廣程ヲ知ル作法ヲ左ニ記ス其餘是ニ准ジテ知ル

目的下ノ遠迫術



此量谷心廣方ハ。目的下ノ遠迫術ヲ二度動ク。彼此ノ禁下ヲ遠程ヲ量リ知リ。次ニ其聚ニ高深術ヲ施ク。其全体ヲ量知ラル。前後三術ヲ以テ大成ヲ知ベシ

術云 下ニ図ス聚ヲ云 先本座ヨリ初目的下ノ遠迫術 目的下ノ作法別章ニ載ス故ニ爰ニ不載

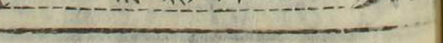
彼山ノ禁ヘ見込空徑ヲ量ル其間數七十間ト知ル中又同術ヲ以テ此山ノ禁ヘ見込空徑ヲ量ル其間數五十五間ト知 此山ノ禁ニモ。彼山空徑ニモ。量リモ其術同事ナリトイヘドモ。未熟ノ人ノ爲ニ。彼此ヲ量リテ知ベキ法ヲ述

此彼此ノ空徑ヲ以テ本術ノ種トス。是マデハ本座ヨリ彼山此山。両禁下ヲ量ル別術ヨリ。尤本術ニカヘ以テ空徑其図其辞ヲ畧ス故ニ爰ニ不記 後扨是ヨリ高深術ノ作法ヲ述ル

(一)本座

大成之圖

☒ハ彼禁ヘ空徑七十間ノ縮也
×ハ此禁ヘ空徑五十五間ノ縮也
○ハ求程ノ地徑二十間ノ縮也
其☒×ヲ量リタル矩ヲ以テ○ヲ量ル時ハ自ラ得ヘシ



此本座ハ。家初ヨ遠迫術を場取ル為ル ヲ盤ヲ直立ヨ居盤の居やうハ前ヨおなじ定規ヨ針を刺。盤良ヲ要ヲ斜ヨ彼山の麓を見込墨ヲ引㊂盤良を要ヲして斜ヨ此山の麓を見込墨ヲ引㊁扨剌盤法ヲ彼山ノ麓を見込ル墨を目的下ヶ術ゆく量置ル空徑ノ間數七十間種の為ヲ家初量置ル合。渾発をゆく。七変ヲ 其矩をゆく。此山の麓を見込ル墨を目的下の術ゆく量置ル空徑の間數五十五間是もまた種ノ為ヨ家初量置ル を量取此山麓ヘ見込の墨を上ヶ下ヘ五十五間量取ル 然ル ヨリ彼墨ノ留ヲ剌捨ル不用ル此墨の量留此の見込の墨五十五間量取ル留を彼の見込の墨の終り盤西の端とヲ まぐく界を正横ヨ引渡し。盤面大成を今現ヲ所の彼の墨ハ彼山の麓下まぐく空徑五十五間の縮ル。此の墨ハ此山の麓下まぐく空徑七十間の縮ル。今引渡し。ル正横の界ハ求程山間谷心の地徑を ヲ の縮ル。其空徑を量ル矩をル。此

正横の界ハ量ル不二変ル。二変十間 ヲ二変ハ即二十間を求ル是求程山間谷心の地徑二十間の間數を求ル

量高二術方

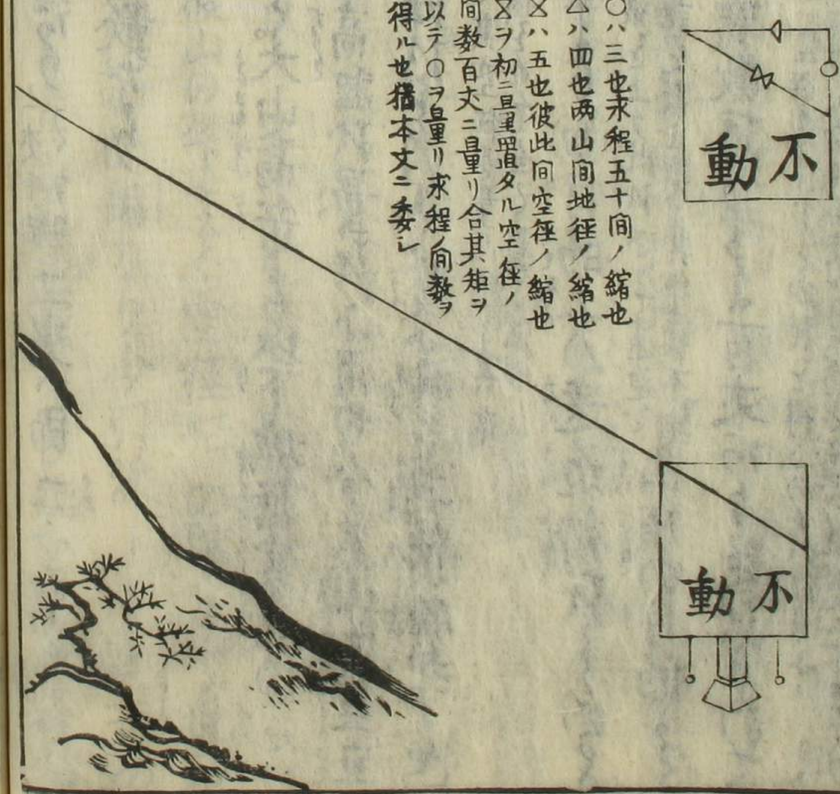
此術ハ平地ヲ處し。大山高岳ヲ以下城樓宮室ゆ、ハ堂塔樹竹等ヲ。ぐく高程ハ量ル不用ル。今其山岳直立の高程ハ量ル作法ハ。爰ヲ書ル。其他ハ推知ス此術ハ。初ヲ遠迫術をゆく。其空徑を量リ。後ヨ其座ゆく。高深術を勤。初後二術をもて全く量ル法ル

術云下ヨ図をもて云 まず本座ヲ㊀初目的上ノ遠迫術ハ量ル。猶くハ。目的上の遠迫術とヲハ。盤の彼を上ヶ此ハ下ヶ遠迫と量ル。故ヨ爰ヨ其作法を不贅 山頂の目的まぐく空徑空徑とハ空中指渡の遠程をヲ前後徴ヲ の間數ハ量ル百丈ヲ是ハ求ルて本術の種とヲ。右ハ空徑を量ル間數を得ル。ハ作法ヲし。別用ル。故ヨ百丈を量得ル後ハ。此盤ハ不用ル

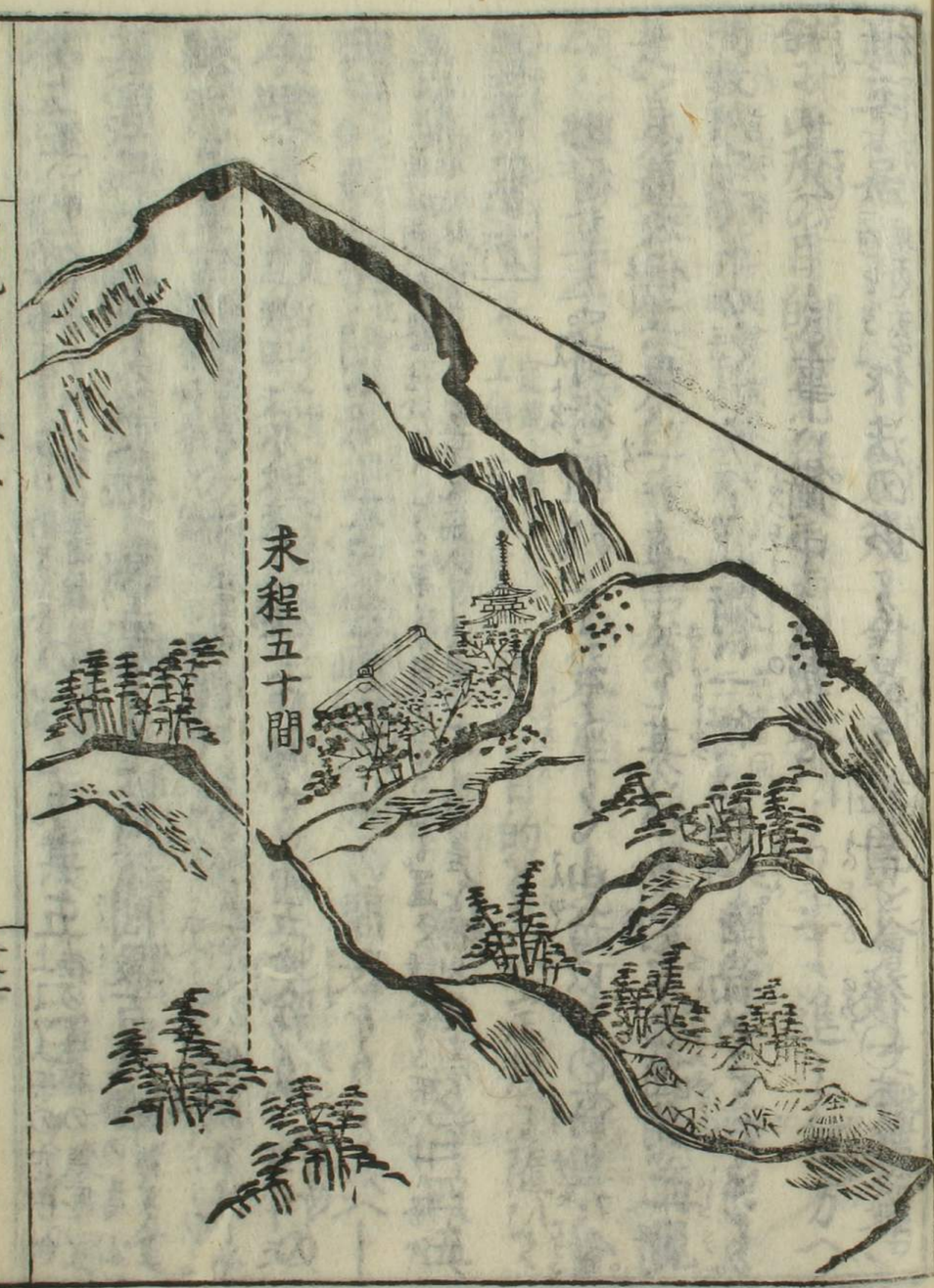
㊁扨本座ヨ此本座ハ即目的上の術を勤ル座を用ル盤を直立ヨ居。盤の居やう前ヨ くり故ヨ界を

定規ゝ針を刺。盤乾を會ふして盤東ゝり斜ゝ山頂の目的ゝ見込。定規ゝ隨ひ墨を引。然るとき八三四五乃盤東を三ゝ。盤北を四ゝ。斜の墨ゝ五ゝ。平陸術ゝて八。かゝるゝゝど見迎八四ゝ。山谷術ゝて八。何時ゝ見込八五ゝ成ゝり。山谷術の見込八。平陸術の見返のゝゝゝり形現ゝ。盤面大成を今現形所の。三八求程山心直立の高程の縮ゝり。四八地徑本座ゝり目的ゝ地中直徑の遠程の縮

大成之圖



○八三也求程五十間ノ縮也
△八四也両山間地徑ノ縮也
又八五也彼此間空徑ノ縮也
又ヲ初ニ量置タル空徑ノ間数百丈ニ量リ合其矩ヲ以テ○ヲ量リ求程間数ヲ得ル也猶本文ニ委シ



なり。五、空徑本座より目的まで空中斜徑の遠程の墨と以て目的上の術まで家初て量置て空徑の間數百丈種の為に家初て量置て丈なり小量合。渾発式なり。盤中の五の墨式。十変て変ず十丈の矩となる。勿論此墨を一変て量合て丈なり。是式百丈の矩となり。其矩をもて空徑百丈式十変て変ず十丈の矩彼三式量る小五変なり。一変十丈なり五変、即五十間なり是求程山心直立の高程五十間の間數なりと知べし。

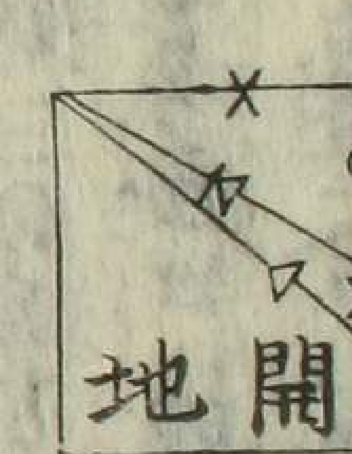
とて高深術ハ剃盤法式のごとき事本法なりとて還て設金る事ハ略て用ひ。前後倣之。又小事ハ盤尺を加入して量るべし。ぽ差を捨るハ大差となるなり

量高一術方

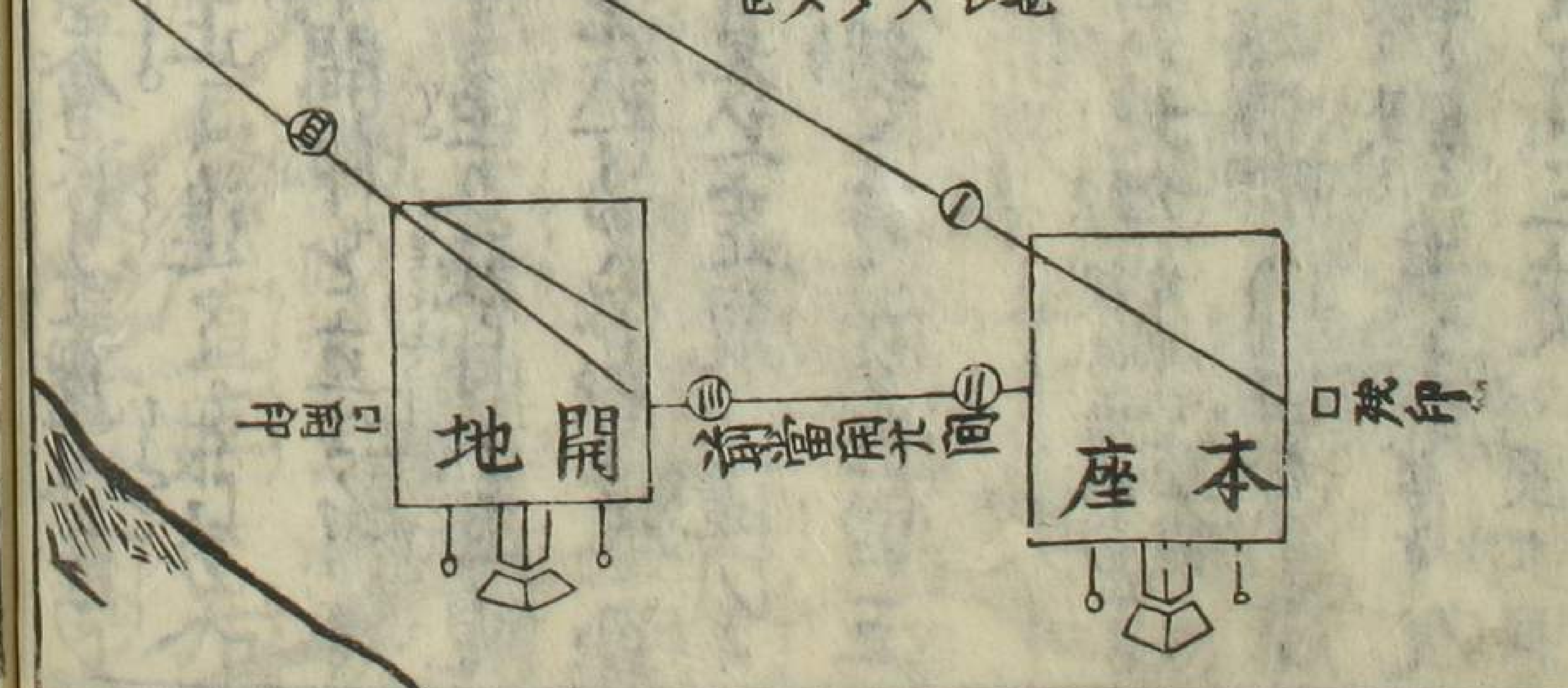
此術まず。前術量高二術方に記て。山岳以下の高程を量小用ひ。但其用ハ一なれとも其法ハ別なり。前術ハ二術遠近術高深術をもて。此術ハ一術高深術を以て勤て知る。其ハ一き事ハ術中に載を術云下に図にある所を作法のごとく品々始計して後(一)本座に盤を直立て居。盤の居やう前に記す定規に針を刺。盤乾を會にて盤東より斜に山頂の目的式見込。墨を引(二)其所より正に進て。彼方へ間數式定て此間除の間數もまた大略三十分一を用ひ間除前當間二十間を求。開印を立させて是を見通。本座に殘印式立(三)然て開地に至り殘印式再見て盤を直立小極(四)此所にても本座に見込あるおとく小。盤乾式會小て定規に針をたて上斜に盤に當て山頂の目的を見込。定規に隨ひて墨式引此術。惣して平陸術前後間の作法に同じ。唯盤を直立に居るのみ其事異なるなり。然る時に三四五盤東と三〜盤北と四〜斜墨と五とに。の形現を。盤面大成を今現て所の三、求程山心直立の高程の縮なり。四、地徑彼此両間の地中の直徑の縮なり。五、假借或又空徑の縮なり。差口、開除前當間二十間の縮なり。其差口式開除の間數廿間に量合。差口を一変て変ず二十間の矩と名く其矩をもて彼三此三假に差口と合して假の地徑の間數と。真の地徑を量る種とも。実ハ求程の間數也を量る。三変一変廿間なり

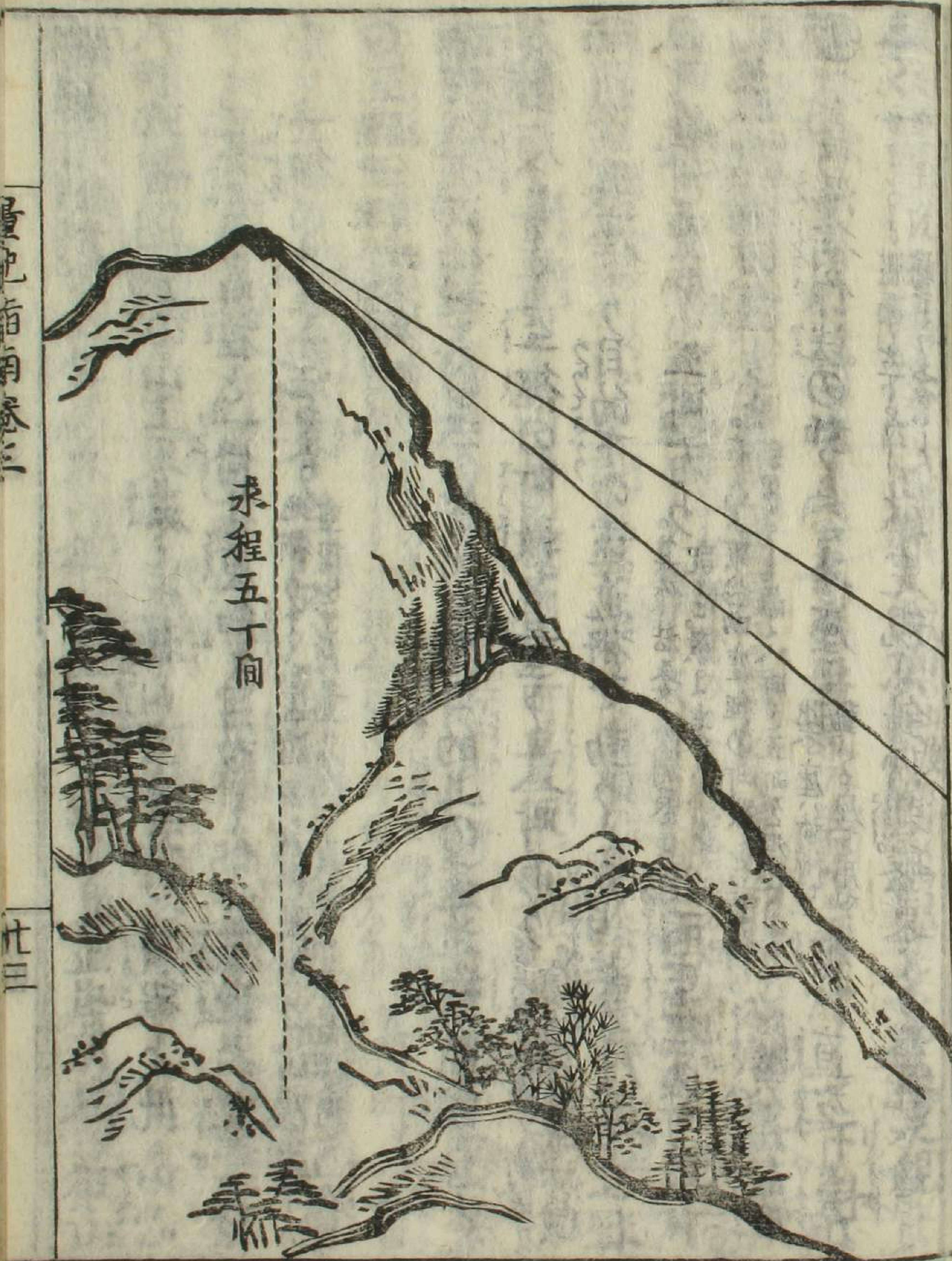
なり。其上に差口乃二十間を
加ふれバ。都合八十間なり。是
真の地徑（其地徑とハ盤四を指をに）號なき
種なり。扨新に矩をなしきて。
（始に二ツと差口とを以て合する矩をハ不用して。今また四ツを量る為に。別に矩をなしたるなり）
四を地徑の八十間に
量合。（新に渾発をなしきて。此四ツ八ツ目に変ヘ。十間の矩と名く）
其矩をもて再度三を量るに
（三ハ初度後度二度量るなり。初にハ差口と合して假の地徑八十間に用ひ。後にハ求程の）五変有り。（一変十間間数に用るなり）
五変ハ即五十間なり。是求程
（山心直立の高程五十間）の間數なり

大成之圖



区ハ差也開除九間ノ縮也
又〇ト合ス假ニ地徑トシ
真ノ地徑ニ名ルノ種トス
〇ハ三也假ニ区ト合一ス
真ノ地徑ヲ得ルノ種トス
実ハ求程直立ノ縮口也
区ハ旧五也假借ナリ
△ハ新五也假借ナリ
量法本文委ク考ヘシ





兩山同知方

此術ハ此方の山上に處して彼山心直立の高程と此山心直立の高程と一同に量知る用ゆるとき彼此乃高下を一術に量る法なり此術も遠迫術を兩度勤めて山頂山麓の空徑を求げ量り次に其座に高深術を勤む

前中後三術を略く。全く量知る法なり

術云下に図を略す所に云まず本座より㊀初目的上の遠迫術を勤めて彼山頂まで空徑の町數を量るに八町あり。其作法委く別巻に記せり故に爰に不載

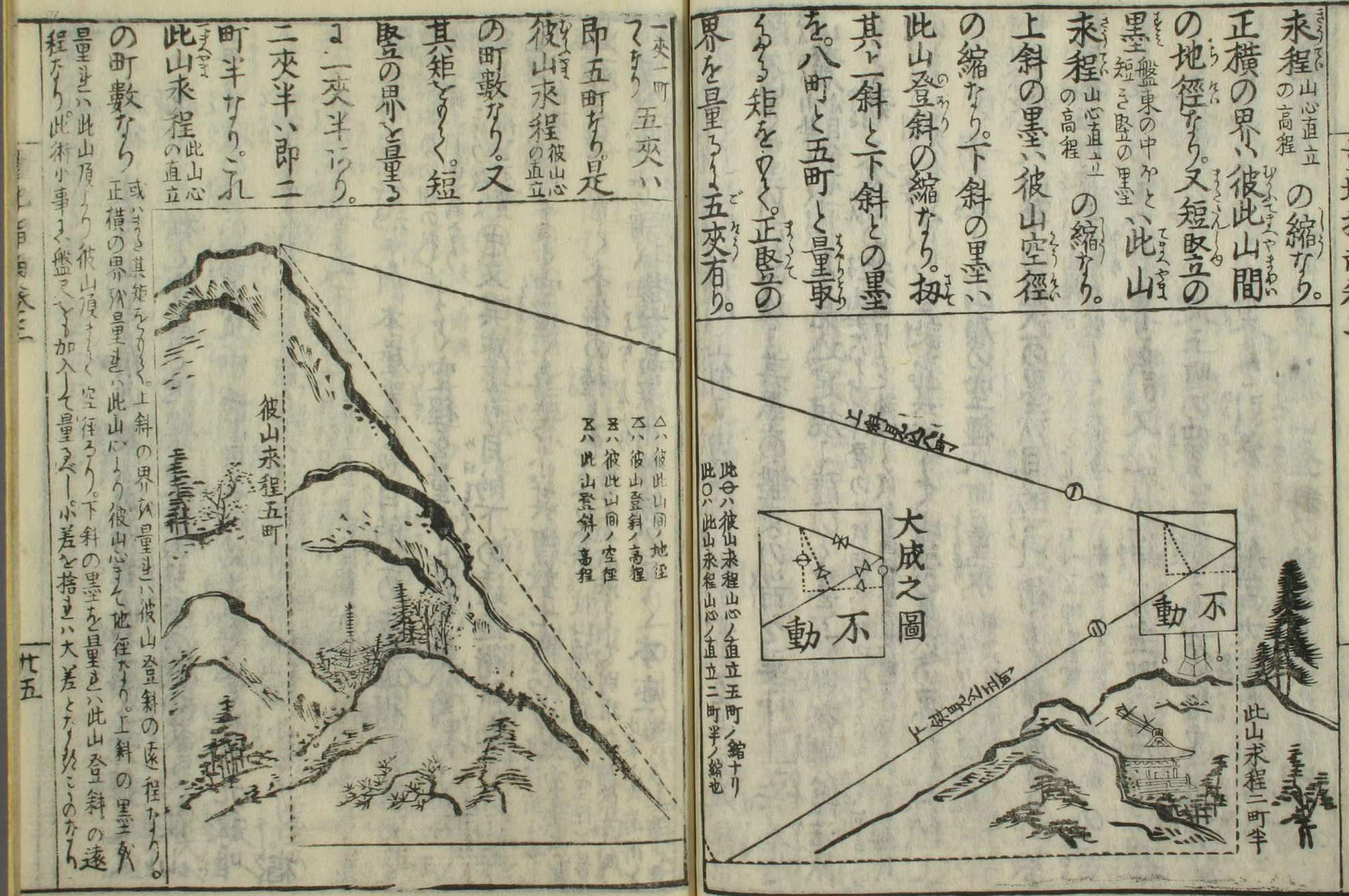
㊁中ゆく其座より目的下の遠迫術を勤めて此山麓まで空徑の町數を量るに五町有り。其作法委く別巻に記せり故に爰に不載此兩空徑の町數を量得るまでの法なり。

㊂後本術の種とす。右の兩ハ兩空徑の町數を量得るまでの法なり。此盤をハ不用別用ゆる故に八町と五町を得るのみ。

㊃扨高深術作法の如く㊀本座に此本座ハ前術と勤むる座を用ゆ盤を直立に居。盤北を上に盤南を下に置く定規に針を刺盤東より盤乾を會に居る事。往く前に述べし

まで深害あり上斜に山頂山頂小目的有るを見込定規に隨ひ墨を引。㊁次に其墨の盤東の端を要して下斜に山麓山麓小目的有るを見込定規に隨ひ墨を引㊂扨剌盤法を新に分間の矩此矩ハ渾発の口を用ゆ。一町の矩と名づく。何も此の縮口に拘はる。盤面の墨の長短に隨ひ新に分間を制す。委くハ図に考合べし。を設き其矩にて山頂の見込の墨を目的上の術に量置る。山頂の空徑八町量取。山頂見込の墨を此より彼へ八町量取なり。然して其残余をハ剌捨て不用又山麓の見込の墨を目的下の術に量置る。山麓山麓見込の墨を上より下へ五町量取なり。然して其残余をハ剌捨て不用其八町の留の空徑五町量取。

より五町の留へ斜に界を引又八町の留より五町の留へ正横に界を引又五町の留乃正横より右へ盤東の端左へ八町の留の正下に界を引。然して盤面大成と今現在所の上斜の界ハ彼山登斜の縮なり。正直の界ハ彼山



求程（山心直立の高程）の縮なり。正横の界ハ彼此山間の地徑なり。又短竪立の墨（盤東の中央と、短き竪の墨）、此山求程（山心直立の高程）の縮なり。上斜の墨、彼山空徑の縮なり。下斜の墨、此山登斜の縮なり。扨其上斜と下斜との墨を。八町と五町と量取る。矩をのべく。正竪の界を量るに五夾有り。

一夾一町なり五夾ハ即五町なり是彼山求程（彼山心の直立）の町數なり。又其矩をのべく。短竪の界を量る。一夾半なり。二夾半ハ即二町半なり。又此山求程（此山心の直立）の町數なり（或ハ其矩をのべく。正横の界ハ量るハ彼山登斜の遠程なり。量るハ此山頂より彼山頂まで空徑なり。下斜の墨を量るハ此山登斜の遠程なり此術小事なれ盤之ことも加入して量るに一ぶ差を捨るハ大差となり終このなり）

山谷數知方

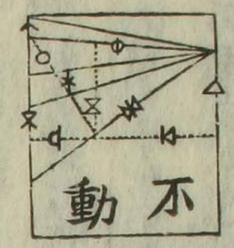
此術ハ此山の山頂に居く彼山の高程と登斜と地徑と又此山の高程と登斜と地徑と又彼山絶頂の樹の丈と彼山半腹の堂の高と又兩山間の谷心の深程とをとく九種唯一術をもく量知る用也其法粗前術兩山同知方小ゞ猶勤て審小をべし今九種ハ量ミ法ハ云十種二十種を量ることと同事なり

術云下に図をかて云まず本座より初目的上の遠迫術ハ勤めく。彼山頂頂の樹の根を目的と為り まゝく空徑を量る其町數八町なり其作法委しく別巻にあり故に爰に其術を不贅中又其座より目的下の遠迫術ハ勤て此山禁下山禁下まゝく空徑を量る小其町數七町なり其法前に委し故に爰に不記小目的有度し

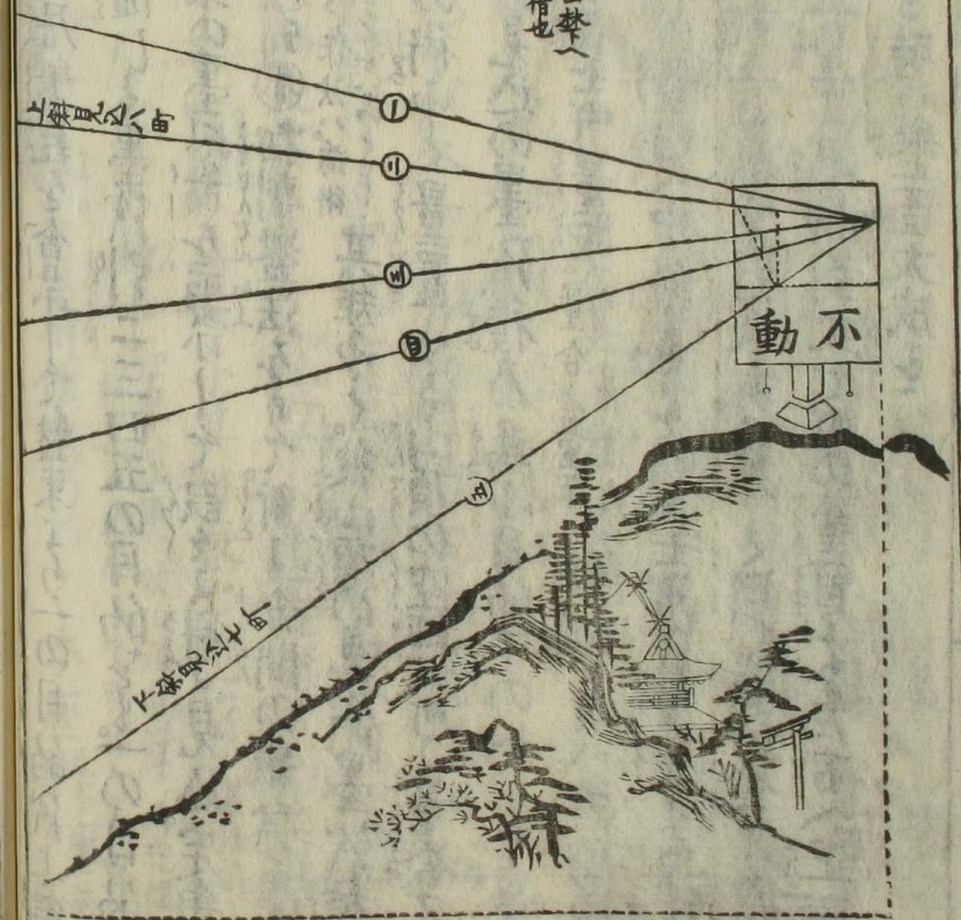
此兩空徑をもく本術の種とす石ハ小果ハ彼山頂此山禁下兩空徑と量得るまゝその法にて別用ニし故に八町と七町との兩徑を得るのゆへ此盤面を不用後扨高深術作法乃ゞく本座此本座ハ前術を勤る座を用ひ

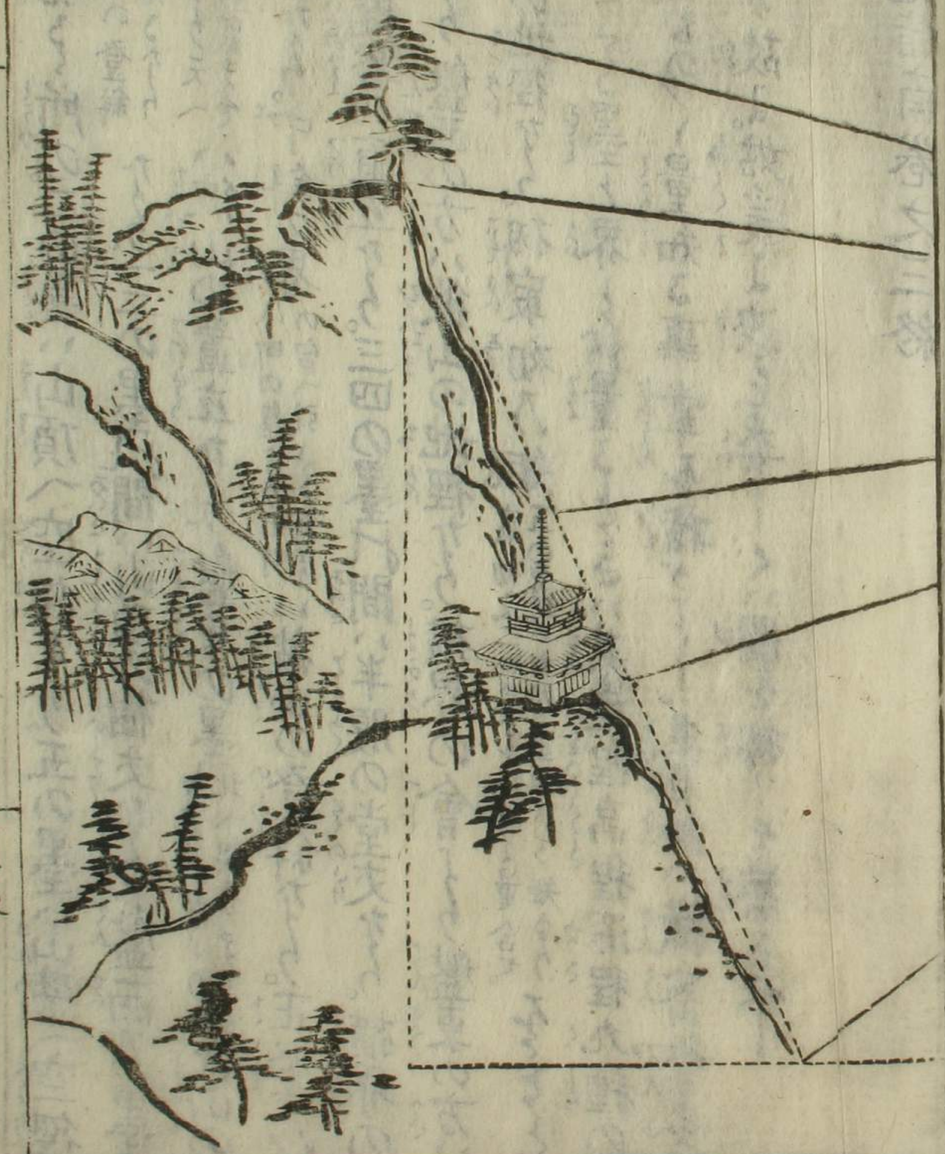
小盤ハ直立に居盤乾を會小して盤東より一の目的ハ上斜小見込定規に隨ひく墨ハ引二三四五の目的をも一の目的ハ見込定規に隨ひく墨ハ引段々に斜に見込定規に隨ひく墨ハ引界扨盤法をもて新に矩を制する作法ハ前術兩山同知方に記すべし其矩小為小目的上の術小く量置る山頂の空徑八町に量合又其矩にく山禁下の見込の墨ハ種乃為小目的下の術にて量置る山禁下の空徑七町量取量合と量取と別意前に事なり其八町の墨乃留より其七町の量留へ中斜に界を引又七町の量留より天へ二の墨にて正竪に界を引又斜の界く四ハ墨の會より天へ三の墨にく正竪に界ハ引又七町の量留より左右へ正横小界を引然る時ハ盤面大成を

大成之圖



㊀ハ山頂ヘ立徑也㊁ハ山麓ヘ空徑也二法ハ種ニメ倍借也
㊂ハ山頂ノ樹丈也
㊃ハ彼山ノ直立也
△ノ此山ノ直立也
○ハ彼山ノ登斜也
㊄ハ中谷ノ直立也
㊅ハ半腰ノ堂丈也
㊆ハ此山ノ地徑也
㊇ハ彼山ノ地徑也
㊈ハ此山ノ登斜也
以上九種ニ種子ノ數ヲ量タル矩ヲ以テ量知ルナリ





今現る所の二の墨い山頂へ空徑なり。五の墨い山禁へ空徑
又此山の登斜
も用るなり なり。二の墨れ間い山頂の樹丈なり。盤西乃墨
横界より天へ 斜界の留まで 北へ横界まで 盤東の墨 盤東の要より い彼山の
い此山の
直立なり。中斜の界 八町の留より七町の留へ引る斜界 い彼山の登斜なり。正竪乃
界い間谷の直立なり。三四の墨れ間い半腹の堂丈なり。横界の
會より盤西の方い彼山の地徑なり。横界の會より盤東の方い
此山の地徑なり。扨家初乃矩 家初乃二の墨を八町乃量合せ。五の墨ハ七町量取る矩なり をもとく。
現きとく墨と界と量るとき。其遠程高程深程九種の
求程。おのく量知る事掌を指ごとし。其巨細い纖密敏多
なるゆえ故よ。姑爰よ洩と委しくい圖を按して察さとべし

量地指南巻之三終